再版

同志社教授 博士ゼ、デ、デビス著

神學要原理

東京

警醒社書店

明治
39 10 10
内交

神學之大原理

緒言

余は昨年「神學總論」なる一小冊子を著し、簡單に神學の大要、及神學を研究する方法を陳述したり、後又「基督教の基本」なる一書をも著述し、今又此書を發刊するに至れり。

抑余が著述の目的は、人間の臆說に重きを置かずして、天啓の默示は畢竟如何なる事件を顯はす者なるかを研究するにあり。此等の論說中余は聖書中より數多の引照をなせしと雖も尙讀者に望むは唯此書中に引用したる章句のみならず、廣く聖書を涉獵して其前後の脉絡を考へ、其關係を尋ねて、新舊約書の趣旨の存する所を悟覺せられんことなり。

昨年、余著はす所の「基督教の基本」に於て、第一に神の存在を論じ、第二に基督教の証據を論じたり。是より余が從事する所は第三神の支配、第四罪、第五救拯、第六來世論、第七教會學即ち實地神學の諸項なり。神學とは廣く之を解すれば上帝を論ずるの學問なり、故に此の學たる宇宙萬有よりも廣く、深く、且つ高くして其の及ぶ所蓋し究極あることなし。ナマの人ゾバル嘗て約百に問ふて曰く（約百記第十一章七節より九節）汝何ぞ上帝の本体を究索することを得んや、何ぞ大能者の全相を究知することを得んや、其の高きは猶ほ上天の高きが如し、汝何を爲し得んや、其の深きは實に陰府の深きに遙ゆ、汝何を知り得んや之を量るに地よりも寬く、之を測るに海よりも濶しと。吾人は今神學に於ても亦之を謂ふ。

神學は上帝に關する諸般の事物を講究する學問なるを以て諸學の中獨り最も高貴なるものにして、又諸の科學を完全ならしむるに缺く可らざる基本たるなり。若し此の學にしてなからしめんか、天下の事物は皆な悉く不可思議たらん矣。而して吾人の疑惑は到底之を解くに由なく、人々終に安心の地なきに終らんのみ。且つ其の論ずる所は概ね高尚なる問題に涉るが故に、講究の方法にして其宜しきを得ば、必ず能く人心を潤大にし、又た能く之を高尚にすることを得ん。然り而して之を學ぶの法、須くかの嬰兒の心の己れを空ふして、知識を求め汲々として曾て飽かざるもの、如くならざる可らず。只管眞理を知らんことをのみ勉めざる可らず。又能く信仰の大本たる事實と人間の作爲せる學說との間を辨じ、確實にして動す可らざるものと、唯だ然る可く思はるゝものとを別んことを要す。今夫れ世間人々の皆知らんと欲する大問題あり、上帝果して存在するか、上帝人に告語せしことありや、果して之ありしとせば其の告語せし所のものは何ぞ、人類には來世ありや果して之れあらば來世と現世との關係は如何、人は罪と其の報果とより免かれ得べきや此等の問題は常に吾人が心頭を挑んで置かざるものにして。其の他尙幾多同種の疑問あり、宇宙萬有には果して創始ありしや、又た終極あるべきや、萬有は時間と空間とに於て際限ありや否や、宇宙萬有には大原因ありや、果して之あらば其原因は何者ぞ、宇宙の物質は受造のものなるや、若しくは永遠自存のものなるや、上帝は萬有間に常住するか、將た創造後其の自然に任ずること夫の時計師が一たび時計を捲きし後其自ら解くるに委して傍觀するが如きものか、物力は何によつて起りしや、現に宇宙の間に於て諸の物力を生ずる原因は如何、造化の工は今も尙ほ其の進行の途中に在るか、物質界は漸々空間中に延長するものか、宇宙萬有の大目的は如何、人類の大目的は如何、心靈と物質との聯絡は如何、心靈は不朽のものなるか等、吾人人間に向ふて答辯を促して止まざるもの殆んど數ふるに暇あらざるなり。抑も神學は敢て悉く此等の疑問に答へんとは宣言せざれども、其の最も重要にして、吾人人類が現在の情況に在つて最も先きに知らんことを要する所の疑問を解釋するを以て目的となすものなり神學講究の要領たる主義を觀察するに當り、吾人は先づ第一に是れ無限の問題たりと云ふの意を認め、而して吾人は唯だ此上帝に關する學問の僅少部分乃ち上帝の存在其企圖其事蹟其方法等に於て僅かに其一部分をのみ知り得べきことを認め然る後に人類が最も先きに知らんことを要する所のもの、乃ち獨一眞神の事實及び其品性、人類の性質、罪惡の由來、罪惡より免るゝの方、靈魂を救濟するの道、心靈上生活の狀態等を探究せんことを要す。乃ち斯くの如くにして吾人が最も先きに知らんと要する所の此等のものに關し吾人を啓發する示現の存するあらば、其存するの事實こそ正に此等のものゝ眞理たるの一强證なれと云ふべし。

吾人は始めに人類の性質を講究すべし、殊に在らゆる知識の本源たる諸直覺の講究より始め、確く此直覺論の主義を持し而して直覺の人類が心靈上の生命を保存するが爲めに必要なること、猶夫の本能の禽獸が肉體上の生命を保存するに必要なるが如くなるを以て、人類に此直覺力あるを否むの道理に於て甚だ合はざる所以の事實を認め、人類が普通意識の此の直覺力あるを許せるが故に、到底之を否む能はざる所以の意を認むべきなり。

神學固有の問題に至つては吾人が講論する所をして勉めて日本人が當時の必要に適合せしむることを期すべし、乃ち自然神學の範圍内に於て各種の無神說不可思議論懷疑論凡神說を斥け、而して又一方に於ては神を以て高く萬有の上に在りとする全然たる超絕說を斥け、他方に於ては神を以て全く萬有の内に在りとする凡神

的常住說を斥けざる可らず。吾人は實に宇宙の間に於て夫のヒルベルタス、タイロチンシス氏が云へる如き萬物の中に在ると共に、又萬物の上に在る所の獨一天父を追求して之を發見せざる可らず。氏が言に曰く神は萬物の上に在り、又萬物の下に在り、神は萬物の外に在り、又萬物の內に在り、萬物の內に在りと雖ども其中に籠閉するにあらず萬物の外に在りと雖ども其外に離隔するにあらず、萬物の上に在りと雖ども之が上に高擧するに非らず、萬物の下に在りと雖ども之が下に屈伏するに非らず、之が上に在つて之を保護し、之が下に在つて之を維持すと。予は思ふ氏は之に加へて神は萬物の內に在つて其永遠の大圖に應じ、之を運轉し、之を活動し且つ之を發達せしむと云ふ可かりしなり。

吾人は尙ほ一歩を進めて斯の天父が人類に何をか啓發せしことありや否や、果して之ありしとせば其啓示は如何なるものなるか、基督敎は果して上帝より出でし救濟の道なるかを知らんことを求むべし。而して予は基督敎の証據如何を講究するに當つては當今世界に存する基督敎の講究より始め、漸次古昔に溯つて之を論ずるの日本に於て最も適せる方法なることを認む。蓋し基督敎の存在は基督敎其者の眞理たる最大の証據にして、書卷中に叙述せられたる在らゆる記錄よりも寧ろ幾層の價値あるものなり。又吾人は基督敎其者の存在する所以よりして、進んで之が源たる神人に論究せん基督の神たることは基督敎の基本にして、聖書を解釋し基督敎の存在を說明するに缺ぐ可らざる元首なり。是故に聖書を以て上帝の言語なりとするは、如何なる意義によるか、聖書を解釋するは如何なる方法によらんか等の疑問を決せんには、吾人須く謹眞敬虔の心を以て叮嚀詳密に之を論議せざる可らず。

聖書の記錄たる人類が理會力高下の度に適應したるもの、乃ち聖書各部の著作せられたる當代の人々が理會力の度に適應したるものなるの事實を承認し、聖書中に存する心靈上の眞理は概して皆表號的の事物を以て述べられたるの事實を承認せんことを要す。殊に當初上帝が心靈上の眞理を人類に啓示するの極めて困難なりし所以を熟知せざる可らず、實に上帝は未知的の事物を啓示するに、既知的事物の名稱を借り、依つて以て未知的事物の表號として之を用ひざる可らざりしなり。上帝は心靈的の事物を啓示するに、物質的事物の名稱を借り、依つて以て心靈的事物の表號として之を用ひざる可らざりしなり。上帝は無限的の事物を啓示するに、有限的事物の名稱を借り、依つて以て無限的事物の表號として之を用ひざる可らざりしなり。即ち心靈上の部分より之を觀れば聖書は表號的の事物を以て記錄せられたるものにして、實に表號的の書冊なりと云ふべし。吾人にして善く聖書中に存する心靈上眞理の意義を了得せんと欲せば須く前段の意を服膺すべし。例せば上帝は聖靈を表するに風なる言語を用ひたるも、之が爲めに聖靈は風よりも微力に、若しくは風と同力ならんと斷定す可らざるは勿論、寧ろ之を表せんが爲めに用ひられたる表號的の風よりも、更に幾層强大なるものたることを知らざる可らざるなり。且つ贖ふと云ひ、救ふと云ひ、洗ふと云ふが如き人間の言語を以てキリストが吾人人類の爲めに成就せる贖罪の大業を表せるも、之が爲めに決して表號たるものよりも微少に、若くは之と同位なりと斷定す可らず、寧ろ之を表せんが爲めに用ひられたる表號的事物の意義よりも無限深長の意義を有することを察せざる可らざるなり。此れ唯だ數百例中の一二に過ぎざれども、斯の主義によつて進まば吾人は聖書中に存する心靈上の眞理を解し、且つ之を敎ふるに於て大過なかるべきを信ず。聖書をして正確誤謬なきの書たらしめ、萬世朽ちざるの書たらしめ、人類が靈性の需要を滿足するの書たらしむる所以のものは他なし、其中に存する心靈的意義の深長にして曾て究極する所なきものあればな

り。吾人は實に同章同句を讀むこと或は千遍に至るも、而かも毎時必ず一層深長の意義を了するを得るなり。吾人は又聖書の發育生長するを得る書たるの意を承認せんことを要す、顧ふに舊約書は花萼の如く、基督は綻花の如く、使徒等が書と後世の基督教とは共に果實の如し。

聖書を批評するに其度を越へずんば所謂高批評、低批評兩ながら共に不可なるなし、然ども吾人は獨乙人の諺に似て、浴水を投瀉すると共に小兒を投瀉するが如きことある可からざる也、聖書總論と聖書解義學とは共に日本に在ては神學教授の最も切要なる部分にして、解釋法の大綱領とも稱すべし、乃ち概して聖書全體を解釋し特に表號的の部分と預言とを說明する鑰鍵なりとす。

組織神學に至ては吾人は須く其知識の本源は唯上帝の聖言のみなることを承認し、嚴く聖書に錄せられたる所のもの丶外に出づることを愼み、且つ上帝の聖言に因由せざる諸種の說論を戒むべきなり。ウオン、ウーステルツエー氏の言に曰く、眞正なる定說家が天啓の聖書に於けるは、決して奴隸の主人に於けるが如きに非ず、又裁判官が訟者囚徒に於けるが如きにも非ず恰も自ら知りて甘心依從するもの丶關係なりと云ふべし、乃ち斯の如くなるが故に毎時聖靈の祐助を得て愈よ神言の深意に達し益す其奧義を悟るに至るものなりと。

デンマークの神學者マーテンセン氏も亦曰く定說的の想考は、聖書と牴牾することなかる可きは勿論、又其當否を聖書によりて檢定す可きものにして、且つ當に能く聖書の教理に從ふて之を長養し、常に少壯發育の力を有せしめざる可らず、聖書は固と神靈の感覺によりて述べられ、又其作用を表彰するの書なるが故に、其中には絕へず發育するを得べき無限の萌芽を包藏して、縱令人爲の定說は旣に老塵陳腐に屬するに至るも、聖書は依然として少壯發育の力を保存す、是れ蓋し聖書は人に示すに組織せる定說を以てせずして、却て定說を組織し得べき材料を供する圓滿なる眞理を以てすれば也と。予の經歷する所を以てすれば予は年々神學上の教授を重もに人々の皆知らんと要する聖書中の大教理にのみ限るの甚だ切要なるを感じて止まざるなり。乃ち聖書の各部に貫通せる教理にして、若し之を聖書より取らんとせば之と共に聖書をも取らざる可らざること譬へば鉢中の草木を取らんとするに其根枝の鉢中の全土に周布せるが故に、遂に共に其全土をも取らざる可らざるに至ると一般なる明瞭正確のもの丶みに限らんことを感ず。予は實に其根枝を新舊兩約書の全部に周布せる活ける重大の教理をのみ教へ、且つ傳へんことを欲す。顧れば空想妄想流行の今日にして人々皆幻像怪影を追逐し唯だ新奇なるを以て眞正なりと假定し、其進步すると退步するとに拘らず、徒に變動更易するをのみ之れ喜樂するの際に在ては、吾人實に空想妄想を忌むもの丶却て時勢に後れたる人なりと見らる丶を知る、吾人實に斯くの如きもの丶一種の人には頗る擯斥せらる丶を知る、然れども予は時勢に後る丶と見らる丶も、或は擯斥せらるゝも、甘じて他人の之を爲すに任じ、唯靜に後世公論の果して神と共なる所のものは常に必ず勝つなるべし。キリストも曾て吾儕は吾儕が知る事を語り、吾儕が見しことを證す云々と言ひ給へり、吾人はキリストを師とせんのみ。且つキリスト或はパウロが默して言はざりしものに至つては吾人も亦默して言はざるの頗る當然なるを見る。之を要するに吾人が講學教授の際組織神學に於て最も注意す可きは上帝の品性基督教の眞理、神言の眞理、罪惡の事由、基督の神性と人性、基督贖罪の意、各人が基督と一たるの理、改心更生の狀、心靈的の發達、心靈的の作用、教會一致の作用、及び審判の終結、等の大主義に在り。

基督教會の歷史は神學教授上の最も切要なるもの丶一部なり、吾人は此に於て創世記の「パラダイス」より

默示錄の「パラダイス」に至るまで、教會歷史の全行經を熟察すべし。乃ち預備の時代、進步の時代、成功の時代、殊に預言の幔幕の少く開ひて吾人をして之が內實の幾分を伺ふて得せしめたる榮光の時代を熟察すべし。又千八百年間に於ける教會進步の歷史を學ぶに方て其諸大教訓を鑑み、誤謬說の生命なき所以、空理空想の人心を殺す力ある所以、キリストが純潔なる福音の活ける生命を頒與する力ある所以、及び此第十九世紀に於ける教會進步の非常長大なる所以を講究教授すべきなり。

最後に講ず可きは實地神學なり、予は思ふ予が教ゆる諸科の中に於て其切要なること說教學牧會學の如き實用上の學問に如くものはあらざるべしと。予は神學生の一層深く其重要なる所以を實驗せんことを望む、此科たる實に學生に教ゆるに其凡て學び得たる所のものを實行するの方法を以てするものなり。吾人は夫のパウロに倣ひ十字架に釘せられしキリストを以て傳道の大主意となし、人をして悔改して直にキリストを信せしむるを以て傳道の大目的となすべし。予は實に方今日本の狀態たる既に說教には必ず靈魂救濟の福音眞理を含有せざる可らざるの時に達したるを見るなり。

然り而して吾人は講學教授の際に在つて、吾人が人となりこそ第一の主眼にして、其遙に知識業爲の上に出で、極めて價値あるものたるの事實を悟了し、此人となりを進めんが爲めに宜しく凡ての眞理の靈の降臨を求め、之れが啓導祐助を得、以て神の國を此日本に來さんとする吾人が大業に從事すべきなり。

基督の語に云へることあり、曰く爾我を世に遣はしゝ如く、我も亦彼等を世に遣はせりと、吾人宜く之を服膺し日々の生涯に於て此語を實行すべきなり。又人生の短促なるを認め、其生涯の大目的は人を救ふに在るを思ひ、人を救ふの事業は概ね各自個々の事業たるを体驗すべし。而して斯の如き熱心なる利ゝ他益ゝ人の事業は、天父の祝福し給ふ所、人生最貴の事業たるなり。故に吾人は確く心に此大目的を定めて日々の生涯を送り、現に今に於て直に、斯の人を救ふの事業に從ふべし。其喜んで吾人の誘導を受くると、受けざるとは責彼に在て我の與かる所にあらず、我は唯我が能ふ丈の智慧と能力を盡すべきのみ。斯の如くにして始めて茲に、永遠の喜樂と圓滿の幸福を望むを得べし。

余は自ら、余の論述する所の餘りに簡單にして、隔靴の憾を讀者に與へんことを知れり、且つ自家の淺學を思ふて心窃に忸怩たりと雖も、神學社會現今の風潮、唯新を好み奇に走り、却て基督教の本領を失ひ、其生命の源を忘れんとするの顯象は實に余を驅て此著述を急がしめたるなり。然れども此著に由て幸に神の眞理に達するの一助を讀者に與ふるを得ば、著者の微勞も決して徒然に歸せざるなり。

終に臨み一言せざるべからざることは米國人なる余が日本語の著述をなしたることなれば其際多少の遺憾なき能はず、殊に數人の飜譯者を煩したれば文體亦同一を欠ぐ、讀者之を諒察せば幸甚

明治二十四年七月

著者誌

再版緒言

十四年前に出版せられたる本書の甚だ不完全なることは予が今切に感ずる所なり、然して之を改訂せんと欲するも其暇に乏しく、且つ之を改訂するもそは極めて小事に止り書中の大綱領に就ては別に之を變更するの要を認めず、基督教の大綱領に就きて予の理解し、確信する處は弗三章十八九節に於ける使徒パウロの愛の悟りの如く、唯だ益々活ける大基礎の「長さ廣さ高さ深さ」の測り知るべからざるを感ずるのみ、蓋し神學に缺くべからざる大原理に關する理論及學説は變化すること屢々なりと雖も、基督教の大事實に至りては確乎として動かすべからず、

何を以て基督教の權威(シーツ・オブ・オーソリティー)の所在となすべきかに就き多くの説ありて、或は聖書、或は教會、又或は各個人の自覺等を擧ぐる者ありと雖も、斯く其所在を一所に狹むるは極めて危嶮なりとす、予思ふに其が權威の所在となすべき者蓋し三あり、

一、聖書なり、素より聖書の一點一劃悉く皆な標準となすべしと云ふにあらず、此説の誤れるは予が云ふ迄もなし、唯基督は聖書の中心點にして其救の道は實に聖書

の趣意なりとす、故に此中心、此趣意に基きて其重なる綱領を定むるの標準となすべし、試に盆栽を其の鉢より拔けば其土も共に扛がるべし、之れ根蔕の深く土中に貫くものあるに由る、基督教の活ける基礎とすべき綱領の聖書に於けるや又斯の如し、此綱領は新舊約全書を貫通す、若し之を拔く時は又何物をも殘さゞるべし、例せば基督の救の道、聖靈の事、又永遠の生命等の如き是れなり、

二、全世界の重なる基督教の各派、各教會が一千九百年間に亘りて一般に受け容れたる所の大綱領は又斯教の根本原理として疑ひを容れざる者の如し、基督教會の組織及其神學說は變化したるも其大事實は千古に亘つて變化せざるなり、今より七年以前、同志社の組織變革の時に際しそが憲法の變更すべからざる綱領の第四條即ち「基督教を以て同志社各學校の德育の基本と爲す」てふ事に就き端なく一の問題は起りしなりゝ之は同志社の德育の基礎とすべき基督教とは如何なるものなるかと云ふにありしが遂に次の如く決定せられたりき、曰く全世界の重なる各派各教會が共に受け容れ共に信ずる所の活ける基礎たるべき基督の大綱領を以てすべしと、夫れ聖靈は聖書の趣旨傾向に背き、又二千九百年間一般の重なる教會が受容れて信ぜし所の大眞理を拒むが如きことを奬め給はざるなり、

三、各信者が聖靈に導かれ己が智慧、己が知識、己が經驗に由て受け容れ且つ自覺したる處も又斯教權威の所在（根據）となすことを得べし、然れども吾人は宜しく以上の第一と第二とを標準となし以て己れの自覺を照らし之を匡さゞるべからず、聖靈は聖書に示されたる救の道の大綱領を教へ聖書を形成したる者にして、又教會の中に居り給ひ之が指導者たり又之に生命を與ふる者たりと謂つべし、夫れ聖靈が信者を導き之をして凡ての眞理を悟らしむべきは主基督の約翰傳十六章十三節に於て宣ひたるが如し、

以上三個の標準を合して斯教權威の所在（根據）となさば吾人は其の謬らざるに庶幾からんか、

予は本書に於てキリストの神性なること、其完全なる救主たる事、各個人は聖靈に由て新たに生れ、聖靈に由て活ける基督と相合体して進歩し且つ有益なる働き人となる事、又教會の働き及び來世の希望等を述べたり、而して之等の事に關する予の確信は今に於て益々强固となるを覺ふ、

予は最後に斷言せんとす、基督教の根本的事實は眞理にして疑ふべからずとの確信は、予の生ける間年を遂ふて其意義一層深玄に又堅固となれり、予は四十年間此等の問題に關する凡ての事實を恐るゝ所も忌み憚る所もなく科學的に研究せり、而して其眞理なることを信ずるはその能く理性に適ふことを知れるに由る、予が心中に疑の生じ來れる時は何をも憚る所なく能く事物の眞相を奥底まで精査し、終に疑惑自ら解け信仰全きを得るに至れり、殊に聖書の質直にして意義一貫する點に就きては予が確信愈々堅固なるに至れり、此書の起源に僞作揑造なく、批評的研究の進むと共に其が根本的に眞實にして信憑するに値ひする者なる事を明かにせり、況んや聖書の内部に伏在する實質は實に予が心情を飽き足らしめ、予が肺腑に徹底して、其說く所の理予に適合し、情意剴切予が衷心の要求を全ふせしむる者あるに於ておや、是れ實に聖書の眞理なるを示す最强の證明に非ずや、予が之に對する信念は愈强く益固ければ予が意を表はさんが爲めには予は「之を信ず」と云ふ語の稍々足らざるを感ぜざるに非ず、予は寧ろ「之を知る」と云はんと欲す、

明治三十九年二月

著者誌

神學之大原理目次

緒言

第一章　神之支配

總論
第一項　物質界と心靈界の支配の區別　一
第二項　物質界の支配　四
第一條　神は宇宙全般を支配す　六
第二條　神の支配は微小なることにも及べり　六
第三條　神の支配は天然法によりて全般一樣に行はる　九
第三項　心靈界の支配即ち道德的支配　一二
理論部　一三
第一條　道德性あるものゝ義務の性質基礎及限界　一三
第二條　道德上の働の性質　一五
第三條　本心の性質と働　一六
第四條　意志の性質と働　一八
實際部
第一條　神は其支配を行ふ事　二一
第二條　神は人間の撰擇と執意迄も支配すと雖も人間は尙自由たるなり　二六
第三條　神の支配の公平なる事　二九
第四條　神は特權を以て支配す　三一
第五條　此支配は偶然に出でたるにあらず、神が始より建つる企圖に應ふ者なり　三二

第二章　罪之說

第一項　罪の定義　三七
第二項　何をか罪と稱するや　四五
第三項　人間の罪の實際なる事　四八
第一條　罪は人間の有樣なり　四八
第二條　此傾向は人間一般生れながらに有する者と見ゆ　四八
第四項　罪を犯す傾向の原因　五〇
第五項　罪と神との關係　五三

第三章　救拯之説

第一項　基督の性質を論ず

第一條　基督は完き人間なり　五九

第二條　基督は完き神なり　五九

一目　聖書はキリストに附するに神の聖名を以てせり　六〇

二目　神の性質は亦キリストに在り　七三

三目　神の業は以てキリストに歸せり　九七

四目　神に屬する所の榮光は亦キリストに屬せり　一〇一

五目　神の性質は直接にキリストに歸せり　一〇四

六目　キリストは自己の神たることを知り、又自から神なりと敎へたり　一〇八

七目　キリストの神たることは、使徒等を始め初代信者の確信せし所、又實に基督敎の基礎なり　一〇九

八目　神の靈、或はキリストの靈なる語は聖書に於て互に交換して用ゐらる　一一二

九目　キリストの甦生及昇天は彼が神たることの强き証據なり　一一六

十目　キリストの高尚なる敎訓と、世界の中に顯はれたる其結果とを見ればキリストの神たること益々明なり　一一八

十一目　キリスト或は基督敎の事蹟を考察せんと欲する者は須らくキリストの神性を見認むべし　一一九

第三條　キリストに在る人性と神性の關係　一二四

第四條　三位一體論　一二七

第二項　キリストの事業　一四八

第一條　キリストの救拯に關する事業の定義　一四八

第二條　キリスト贖罪の事實なること　一四九

一目　聖書外の証據　一四九

二目　神は始祖等に贖罪の契約をなし、又預言せり　一五三

三目　キリストの挽回の供物となり人類の罪惡を全く贖ひしことは聖書の趣旨なり　一五九

四目　キリストの苦惱と死と、人間の罪惡より救出さるゝことゝの關係　一六八

第三條　キリスト贖罪の目的　一七九

基督の贖罪に關する諸家の説今日現存せる四説並に其批評著者の考説

第四條　基督贖罪の結果　二〇二

一目　基督の贖罪は一般靈物たるものゝ道德的希望に合せり　二〇二

二目　正義なる靈物に大なる結果を及ぼす　二〇四

三目　罪人に及ぼす所の感動　二〇六

四目　基督の甦生及昇天の結果　二一〇

五目　信者は基督の贖罪により基督と一致するなり　二一七

第三項　聖靈の性質　二二一

第一條　聖靈は明に一個の「ペルソナ」なり　二二一

第二條　聖靈は眞に又適當なる神なり　二二二

第四項　聖靈の働　二二三

第一條　再生　二二三

第二條　再生の必要　二二五

第三條　再生の眞實　二二六

第四條　この變化は神即聖靈の働に由て生ず　二二六

第五條　方法を用ゆ　二二六

第六條　其感化力の性質　二二七

第七條　再生の即時の結果　二二七

第八條　再生したる靈魂の主觀的狀態　二三〇

第九條　再生したる心の客觀的習用即愛　二三一

第十條　再生したる心と再生せざる心の比較　二三二

第十一條　僞りの再生　二三五

第十二條　改心の眞僞判決の徵証　二三五
第十三條　基督信徒の弱く且不活潑なる原因　二三六
第十四條　再生　二三七
第十五條　再生したる者と神の預定の關係　二四〇
第五項　其活動、信者の神聖になる事　二五二
第一條　神聖になること、即完全に神聖に成ることは進歩的の働なり　二五二
第二條　神聖になることは基督の贖罪に由る　二五二
第三條　之を來たすものは聖靈なり　二五二
第四條　神聖になることの度　二五二
第五條　基督教徒の生命の生長を助くる者　二五五
第六項　神の忍耐せしむること　二六二

第四章　來世論（エスカトロジー）

第一項　死と大審判との間際に於る靈魂の情態　二六四
第一條　有意識の情態なること　二六五
第二條　靈魂の死後幸福又は苦難の情態に入ること　二六五
第三條　境遇の變動　二六六
第四條　死と審判との間際に於ける義人と惡人の居住の場所　二六六
第五條　死と審判との間際に於ける靈魂の體軀　二七二
第二項　大審判の件　二七三
第三項　凡て德性を有する者の品性及情態は大審判後限なく不變にして存在すべし　二七六
第四項　衆生悉皆の終局回復說　二九五
第五項　死後即ち死と大審判との間際に於ける悔改　二九九
第六項　靈魂消滅の說　三四三
第七項　罰の性質　三六一
第一條　聖書の趣旨を査ぶるを要す　三六一
第二條　罰の性質を論ず　三六二
一目　刑罰の苦痛は重に內部より生ず　三六二
二目　罪人は既往生涯の損失不幸を悔ゆべし　三六二
三目　現に在る所の損失不幸を悲しむべし　三六三
四目　未來の損失を想像して嘆息すべし　三六三
五目　本心の譴責　三六三
六目　他の聖き靈物等の擯斥　三六三
七目　束縛を感ずべし　三六三
八目　不義邪惡と交るに至るべし　三六三
九目　其心に安易と平和を得ざるべし　三六三
十目　神の極て深く罪を惡み給ふや確實なり　三六四
十一目　聖書は既に現世に於てさへ罰を受けたる者あるを示せり　三六四
第八項　甦の事　三六四
第一條　甦の事實たることは聖書之を証明す　三六四
第二條　甦の時　三六四
第三條　甦る者の順序　三六五
第四條　靈體なるものゝ性質　三六五
第五條　キリストの甦生と信者の甦生との關係　三六五
第六條　甦と云ふ語の定義　三六五
第七條　肉體と靈體との關係　三六七
一目　靈體は肉體と同じ物質にあらざるべし　三六七
二目　又必ずしも同じ元素より成立たざるべし　三六七
三目　又肉體の如く生理的法則によりて變化せざるべし　三六七
四目　靈體と肉體と同一なる點は元素及形貌以外に在り　三六八
五目　此世の親族朋友等は來世に於ても相見知るなるべし　三六九
六目　靈體に於ては肉情なし　三六九
第八條　一般の人間各キリストの臺前

に裁判を受く　三七〇
第九條　死してより大審判に至る間の體形の狀　三七〇
第九項　天國の說　三七一
第一條　「パラダイス」所在の場處　三七一
第二條　「パラダイス」の住者　三七二
第三條　「パラダイス」に住む者の狀態三七二
一目　「パラダイス」に住む者は智情共に發達すべし　三七二
二目　神と他の靈物又己に對して全き調和を得るなるべし　三七二
三目　又神と和合し神と共働すべし三七三
四目　「パラダイス」は完善完美の場處なり　三七三
五目　「パラダイス」に於て高尚なる職事あるなるべし　三七三
第四條　「パラダイス」の義者は不義者の苦惱を見知りながら尚歡喜あるべきや　三七四
一目　不義者の苦惱は至當の應報なり　三七四
二目　不義者の苦惱は場處を轉ずるも去らず　三七五
三目　義者も天使も神も此苦惱を輕減するを得ず　三七五
四目　義者其苦惱を憂ふるも少なかるべし　三七六
五目　聖徒の人情は大に高まり大に潔まりたるものなるべし　三七六
第十項　天使之說　三七六
甲之部　聖なる天使　三七六
第一條　天使の性質　三七六
一目　天使は靈物にして靈體を具へん　三七六
二目　天使は人間より先きに造られたり　三七六
三目　天使の位は人間よりも高し　三七六
四目　天使は其性次第に發達すべきものなり　三七六
五目　天使は個別に造らる血脈に由らず　三七六
六目　其心情は聖なるものなり　三七七
七目　其中に位階の差等あるが如し三七七
第二條　天使の數　三七七
第三條　天使の容貌　三七七
第四條　天使の棲處　三七七
第五條　天使の職掌　三七八
一目　天使は神の使者なり　三七八
二目　天使は特に救を得んとする者の爲に勞する也　三七八
三目　神は不義者を罰する時天使を使者と爲し給ひき　三七八
四目　キリスト降世前天使頻に現はれたり　三七九
五目　末日に彼等はキリストに陪從すべし　三七九
六目　天使は神を讃美する者なり　三七九
七目　彼等は自身に人の禮拜を受けず　三七九
乙之部　惡逆の天使　三七九
第一條　惡魔の實際に存在する事　三八〇
一目　人と惡鬼とは別物なり　三八〇
二目　鬼につかれたる者と他の病者三八〇
三目　惡鬼は或は言ひ或は事を爲せり　三八〇
四目　鬼につかれたる者と他の病者と同一視するときは右の事情を解明する能はず　三八一
五目　惡魔はキリストの神たることを知る　三八一
六目　キリスト惡魔の存在を事實とし給へり　三八一
第二條　惡魔の始原　三八一
第三條　惡魔の位階と名目　三八二
第四條　其數　三八三
第五條　惡魔の性質と其所業　三八三
一目　惡魔は神を知るも恐れて戰けり　三八三
二目　惡魔は求めて害を爲す者なり三八三
三目　惡魔は神の牽制を受く　三八三

四目　惡魔は靈物を惑はす　三八三
五目　信者は勉て之を拒き又キリストに依て勝利を得べきこと　三八四
六目　キリストは惡魔に全き勝利を得給ひたり　三八四
第六條　惡魔の罰　三八四
第十二項　キリストの再臨　三八四
第一條　聖書中キリストが大審判の前降臨し給ふの証なし　三八六
第二條　「プレ、ミレニアル」說は聖書の趨向に逆ふ　三八七
一目　キリストは今尙王と爲てダビデの位に坐し給ふ　三八七
二目　キリストの聖國は心靈的にして其寶座は「パラダイス」に在り　三八八
三目　今の傳道法は聖書の示す趨向也　三八九
四目　義者不義者の甦生の大審判の日　三九〇
五目　ユダヤ人歸國神殿再建の預言　三九一
六目　此預言は聖書の明示する所に反す　三九二
七目　此地球は聖徒が永遠に住むべき處にあらず　三九三
八目　此世界の國々がキリストの再臨に由て其支配に歸すと云ふも聖書に反す　三九三
第三條　「ポースト、ミレニアル」說の困難　三九四
一目　今にキリスト再降の事を聞かず　三九四
二目　第一降世後キリストの顯はれ給へること　三九四
第十三項　神の善德と惡の永存とを調和するの說　三九五
第一條　靈物の棲處　三九七
第二條　靈物と其自由性　三九八
第三條　天使惡鬼となる　三九八
第四條　人類と自由性及遺傳性　三九八
第五條　神も自由性を抑壓し玉はず　三九八
第六條　迷へる靈物を救回すの至難　三九八
第七條　罪の固成　三九八
第八條　迷ふたる者を救ふ神の方法　三九八
第九條　或靈物の救ふ能はざるに至ること　三九九
第十條　神人類を父母より生れしむ　三九九
第十一條　神は始より善動機を豫備し給ふ　三九九
第十二條　新靈物永遠の歡喜に入る　四〇〇
第十三條　神は救の爲に百方術を盡す　四〇〇
第十四條　迷へる靈物と救の制限　四〇〇
第十五條　强て迷へる者を救ふの害　四〇一
第十六條　救はれざる者の滅亡　四〇一
第十七條　現世に罪を犯しながら死する者　四〇一
第十八條　罪人刑罰等を思ふて益罪を重ぬ　四〇二
第十九條　罪人の刑罰苦痛　四〇二
第二十條　頑剛なる靈物は救に入らず　四〇二
第廿一條　迷へる靈物も永存を望む　四〇二
第廿二條　來世の悔改は難し　四〇二
第廿三條　救はるゝ者は其數頗る多かるべし　四〇二

第五章　教會之教理（實地神學）

第一項　教會の定義　四〇四
第二項　基督と教會の關係　四〇七
第一條　教會は体にしてキリストは其首なり　四〇七
第二條　キリストは常に其教會の活力たり　四〇八
第三條　教會の生命と働はキリストのものなり　四〇九
第三項　教會の目的　四一一
第一條　此世に於て神と其眞理の証者たること　四一一
第二條　信者の互に助て心を修ひること　四一二
第三條　多人數相集て神を禮拜すること

と
第四條　基督信徒の道に進むこと　四一二
第五條　全世界の改心　四一四
第四項　教會の役員　四一四
第五項　教會の大禮　四一八
第一　「バプテスマ」　四二一
第一條　「バプテスマ」の意味　四二一
第二條　「バプテスマ」の性質　四二一
第三條　「バプテスマ」を受くる者　四二二
第二　主の晩餐　四二三
第六項　教會の働　四三二
第一條　教會と社會の關係　四三三
第二條　教會の働の基礎　四三七
第三條　基督の潛勢力　四四一
第四條　組織　四四五
第五條　教會附屬の働　四五〇
第六條　安息日學校　四五四
第七條　教會の親睦　四五六
第八條　教會の實務　四五六
第九條　個人の働　四五七
第十條　「リバイバル」　四六五
第十一條　祈禱會　四七六
第十二條　牧師　四八〇
第七項　安息日と教會　四八五
第八項　教會政治　四八八
第一條　世上各般の教會政治法　四八八
第二條　組合教會政治略說　四九一
第三條　組合教會政治の危險及利益　四九六
第四條　各基督教會の一致　四九八

神學之大原理目次終

第一章　神之支配

總論

神と宇宙との關係

人間は元充分に神を悟るに耐えざるを以て若し我々が神を想考するときには知らず識らず自身の有樣に至大尊嚴を加へたるが加きものと爲すに至る可し伊多利の畫伯ラッフェル (Raphael) が羅馬法王の禮拜堂の天井に神が光と暗とを分つの光景を圖したるを見るに同じく人間の如き形貌に擬して以て神を示せり（創世記一章四節を畫題とす）蓋し人間の意匠自ら是に出でたるものなり此關係に附きては先づ左の三件を丁するを要す（詳論はエ、エ、ハーチ氏の著書を見よ）

一、神を全く知ること能はず

神は絶對無限にして此の宇宙は有遇有限のものたり人間の智識亦有限界を脱する能はず彼の廣漠たる原頭の夕一穗の寒燈を點ずれば僅に尋尺の間を照すに過ぎず若し之に代ふるに玲瓏たる洋燈を以てすれば耿々として光影漸く擴張す可く更に電氣燈を揭ぐるに至れば鮮芒赫燿白晝の如し然りと雖も其全局より云ふときは尚は光明の達せざる暗夜の部分は際涯を知る能はざると殆んど等しきものあり我々の智識は啻に神に附きて然るのみならず理學及び哲學上に於ても知悉すること能はざる制限に遭にあらずや例令ば太陽系運動の規法は其幾分を窺ふべし即ち月の地球を中心として運行するが如き七星の太陽を中心として運行するが如き是なり然りと雖も此の太陽系と他の太陽系との相互に運行すること又は星雲系と星雲系とが互に運行すること及び

蒼天に懸る無數の星宿が宇宙の中心に從て運行すること等に至ては決して覺るべき所にあらず斯の如く我々は幾分か神につきて悟ることを得べしと雖も充分に知悉すること能はざるこそ却て當然なりと謂ふ可し「なんぢ神の深事を窮むるを得んや全能者を全く窮むることを得んやその高きことは天のごとし汝なにを爲し得んや其深きことは陰府のごとし汝なにを知らんやその量は地よりも長く海よりも濶し」（約百記十一章七、八、九節）

二、神は形體以上に存在す

形體物は神の本質に與して部分とならず又神の本質は宇宙の形體物と與して混同せず神は物質と全く異なりて之を保持し運動し生育せしむるものたり

三、神は宇宙に存在す

神は萬物の本原諸勢諸力の大原因たること植物の生子に於けるが如く神は宇宙の生子たるものなり而して神の運動は人間と全く異なれり人間は外部より或物を加へて作用を呈し神は內部に於て其作用を顯す故に宇宙は神に因て存在すること恰も天上の星宿がイーサル（Ether）に因て存在し雲煙の空氣に因て存在するが如く然り即ち諸勢力は悉く神より發生し來るものなりとすれば神之を利用するは勿論なりと謂ふべし羅馬の「セント、ペテロ」の大會堂は伊多利の大理石坑中より來り無數の役夫と運動とに由て落成せり然りと雖もミカイル、アンジエロー（Michael Angelo）は能く此等のものを支配し動作せしめて以て其用に供せり斯の如く神は諸物諸力を利用し其宇宙を自己の企圖に應じて造營し又保持すべし萬種の運動は悉く神の勢力に因ればなり此太陽は太陽系動力の本原なるが如く蒸氣船氣鑵の爐火が其船体動力の本原なるが如く神は遙に勝りて宇宙の本原たるなり左れば宇宙の萬象に於けるは吾人が外貌によりて衷心の喜悅恐怖悲痛等を表すと同じく天父の思想は物質上に表れ來り宛がら温々たる眉目を仰ぐが如し轉た思愛を感せずんばあらず彼の青々たる艸木の葉や爛熳たる紅白の花や油然たる長空の雲を以て皆神の思想と爲すの不可なきを見る但し其創造と保持とは自ら異ることを忘る可からず形體物は神の外部に屬するものにて神に因て出現し又神より受くる所の生命と勢力とに因りて存在を得るものなれば形體物そのものは神と全く異りと雖も神より離絶して自立することを得ず生命も亦神より出るものと雖も神の生命とは異りて唯だ彼より分ちて受けし所のものと云ふべし又創造の時代は既に經過したりと雖も（創世記二章二節を見よ）其之を保持することに至ては曾て間斷あることなし（詩篇百四篇及び百四十七篇以賽亞書四十二章五節を見る可し）誠に創世記第一章十一、十二節及び二十一、二十五、三十一節を閲し來れば神の企圖なる此の宇宙の大目的の存する所を識る可し即ち神の性質に象りて造られたる我々人間こそ其主眼の位置に立つべき特榮を辱ふせるものなり勿論一般の宇宙に於ても同樣に神は自己の能力を加へ其榮光智慧慈愛を表し以て聖悅に應はしむるものにてあるなり（詩篇百四篇三十一節羅馬書一章十九、二十節）而かし靈體物の罪惡によりて此の大目的は幾分か齟齬したりと見ゆれども遂に能く之れを成就し得べし（民數記略十四章二十一節詩篇七十二篇十九節を見よ）蓋は神之を達せんがために萬國を其恩澤に潤しむる所の一人の民を特撰したるに因るなり（創世記十二章三節全十八章十八節全廿二章十八節を見べし）

神の支配を概言すれば遍く宇宙全般に亘るを以て形躰物と靈躰物とを問はず預め定めたる企圖に應じて制裁を加ふるものとす今此の所論を分ちて左の二種とすべし

一　形體上の支配　　二　靈體上の支配

第一項　物質界と心靈界との支配の區別

神の形體上と靈體上とを支配するや其間に大なる區別を措き凡ての無機物に就ては平等一樣の方法を以て直接に全く之を支配し得べく而して此の物質は決して神と共力すること能はず又動物の如きも一定の法則を以て全く之を支配し得べし其本能に由りて幾分か神と共力し能ふと雖も彼れ自身は更に何たるを識らずして神旨を行ふのみ其れより靈體上に進めば支配の方法全く一變し隨て一樣なること無し神の靈體物を處するや先づ各自の本心を動かし其勸めにより動機に感じ自由に認識せしめたる上に於て導を與へらる即ち凡の天使及び神を信じて服從する人間は此支配の範圍内に立てり又不信の徒と雖も幾分か同樣に本心の勸めに從つて支配を受るものと見えたり左すれば物質界及び動物界に在ては全く支配の至らざる所なく能く其企圖と志望とに違背せず而かし靈體物中には或る部分神の支配を悅ばず却て之に逆ふものあり而して靈體上より云へば神は其嗜好を選ふし强て支配することを屑とせず（提摩太前書二章四節、彼得後書三章九節を見る可し）其他聖書を引照すれば神の志望は凡そ人類が悔改めて救拯に與ることを欲すると見ゆれども人類中其多分は救拯に漏るゝの止を得ざるに至れり之に由て神は恩愛の道を以て凡の靈体を有するものを支配することは固より希望なりと雖も到底行はれ難ければ更に異なる方法に由り彼の逆ふものを處せざるを得ず（出埃及記なるパロ王及び猶太書六節の迷ひたる天使の例を見るべし）神は權威を以て其逆者を留置し或は束縛して支配を加ふるの外施す所なきに似たり左の想像圖に就きて考ふれば幾分か悟る所あるべし

此の圖せる所を見よ右方の一半を形體上の部分とすれば前述の如く神の志望と實際とが並び行はるゝ所にして即はち平等一樣なる支配の遍き限界なりとす而して左方の一半を靈體上の部分とすれば其理想上の志望と實際上の支配とは充全に行はれ難くして志望以外の運動に出づるものあるなり其能く神に忠事し違ふことをせざるものに在ては恩愛を示し動機に由りて理想の範圍内に支配せらる可く彼の神に逆ひ動機の慫慂に從はざる限りは假令惡魔にまれ人間にまれ幾分か權力の制裁を以て支配せらるゝなり人間は物質を用ゐて危害を義人に加ふること尠とせず假令ばギットーが大統領ガフヰールド氏を銃殺せしが如し神は平常道理外の奇跡を以て此の危害を防がずと雖も時により其安然を保護するの例なきに非ず今其二三を擧ぐれば米國獨立戰爭の未だ起らざる以前ワシントンの尙は一小吏たりし頃土人の騷亂を起すに漕ふ適々森林を逍遙す一土人あり銃に丸し之を狙擊せんとしたれども遂に發射せざれば彼れ大に懼れて謂らく神必ず此人を害することを許さるなりと則ち銃を措きワシントンの前に跪き深く其罪を謝し爾來從者として仕へんことを請へりとぞ又米國南北戰爭の時北軍の旗持某は最も苦戰の際軍旗を持して他の兵士に劣らず數人の死骸を蹈起へて進みしが敵兵五千ばかり三百尺の彼處より大小の彈丸を注ぐこと霰の如く味方の兵多く身を樹蔭に寄せたり某も亦始めには旗を掲げて大樹の蔭に立ちしが顧みれば數多の我兵其後に在り某は其持てる旗の爲に敵の銃口をして

背なる我兵士に向はしめんことを恐れ更に二三十尺前進して一樹の蔭に立てり然るに後に在る我軍より放つ銃丸風を奪て頻りに左右を經過し殆んど同士擊に遭はんとす依て退ひて丘上樹蔭なき所に屹立して動かず此時敵の銃口悉く軍旗に塊集し怒號し來る所の彈丸は恰も白雨の注ぐが如く或は地を穿ち或は外套を貫き或は耳朶を掠ひ旗は破れて襤褸の如くなりしが僅かに兩膝に微傷を負ひたるのみにして一命に恙なきを得たり又動物の如きは常に其本能に從て動作すと雖も神は時として常理外の方法を以て本能に逆ふたる支配を爲すの例あり預言者ダニールは不法の禁令より讒を得獅子の穴に投せられ鋭利の爪牙に接すること終夜にして害を受けず（但以理書六章を見るべし）又預言者エリヤは食物の供給なき地に身を措しが烏鴉あり朝暮肉及び「パン」を運び來りて彼を養ひ飢饑の憂なからしめたり（列王紀畧上十七章一節以下七節までを見るべし）

第二項　物質界の支配—動物も此中に在り

第一條　神は宇宙全般を支配す

一目　神は宇宙の創造者たれば亦之を支配するは當然なる可し若し然らずとせば奚んぞ之を造るを要せんや

二目　神の完全なる性質よりするも萬物を支配せらるゝは當然なる可し彼既に宇宙の造主たり其全智全能は以て支配を專にするに足り且つ當に之れある可きの必要を感ずるなり而して神の外能く此任に耐ゆるものなし故に神にして若し其任に當らざりせば或は智慧或は德性に欠くる所ありと謂ふも不可なけん而かし先著基督教之基本に於て神性論中神は凡の智慧凡の德性を圓滿に具有するものなることを識るを得たり

三目　宇宙に秩序あることより証す基督教之基本第五章の宇宙に秩序的運動あることの論說を見るべし神も

し之が支配者たるにあらずんば如何で此整然を保つを得んや

四目　進化の法則より証す此法則を調査するに自ら一定の方向を有し又常に劣等なるものより高尚なるものに向て變遷すと見へたり神もし之を支配するにあらずんば如何で斯の如く同一の規律を保つを得んや

五目　聖書より証す神の支配が宇宙全般に及ぶことは實に聖書の趣なり特例（尼希米亞記九章六節汝は唯なんぢのみエホバにまします汝は天と諸天の天およびその萬象地とその上の一切の物ならびに海とその中の一切の物を造り之をことごとく保存せたまふなり天軍なんぢを拜す）（約百記十二章十節以下一切の生物の生氣および一切の人の靈魂ともに彼の手の中にあり耳は說話を辨へざらんや、その狀あだかも口の食物を味はふがごとし、老たる者の中には智慧あり、壽長者の中には顯悟あり、智慧と權能は神に在り、智謀と顯悟も彼に屬す視よ彼毀てば再び建ること能はず、彼人を閉こむれば開き出すことを得ず視よ彼水を止むれば則ち涸れ、水を出せば則ち地を滅ぼす權能と顯悟は彼に在り、惑はさるゝものも惑はす者も共に彼に屬す彼は議士を裸體にして擄へゆき、審判人をして愚なるものとならしめ王等の權威を解て反て之が腰に繩をかけ祭司等を裸體にして擄へゆき、權力ある者を滅ぼし言爽なる者の言語を取除き、老たる者の丁知を奪ひ侯伯たる者等に耻辱を蒙らせ、强き者の帶を解き暗中より隱れたる事等を顯はし、死の蔭を光明に出し國々を大にし、また之を滅ぼし、國々を廣くしまた之を舊に歸し地の民の長たる者等の丁知を奪ひ、これを路なき荒野に吟行はしむ彼らは光明なき暗にたどる、彼また彼らを醉る人のごとくによろめかしむ（詩篇二十九篇十節エホバは洪水のうへに坐したまへり、エホバは寶坐にざして永遠に王なり。同九十五篇四五節地のふかき處みなその手にあり山のいたゞきもまた神のものなりうみは神のものその造りたまふところ旱ける地もまた其手に

て造りたまへり。同百三篇十九節エホバその寶坐をもろもろの天にかたく置たまへり、その政權はよろづのものゝうへにあり。同百四篇二十四節エホバよなんぢの事跡はいかに多なる、これらは皆なんぢの智慧にてつくりたまへり、汝のもろもろの富は地にみつかしこに大なるひろき海あり、そのなかに數しられぬ個ふもの小なる大なる生るものあり舟そのうへをはしり汝のつくりたまへる鱷そのうちにあそびたはぶる彼ら皆なんぢを俟望む、なんぢ宜時にくひものを之にあたへたまふ物をひろふ、なんぢ手をひらきたまへばかれら嘉物にあきたりぬ、なんぢ面をおほひたまへば彼等はあわてふためく汝かれらの氣息をとりたまへばかれらは死て塵にかへるなんぢ靈をいだしたまへば百物みな造らる、なんぢ地のおもてを新にしたまふ願くはエホバの榮光とこしへにあらんことを、エホバそのみわざを喜びたまはんことを、エホバ地をみたまへば地ふるひ、山にふれたまへば山は煙をいだす、同百四十七篇エホバをほめたたへよ、われらの神をほめうたふは善ことなり樂しきことなり稱まつるはよろしきに適へりエホバはエルサレムをきづき「イスラエル」のさすらへる者をあつめたまふエホバは心のくだけたるものを醫し、その傷をつゝみたまふエホバはもろ〳〵の星の數をかぞへてすべてこれに名をあたへたまふ、われらの主はおほいなりその能力もまた大なり、その智慧はきはまりなしエホバは柔和なるものをさゝへ惡きものを地にひきをとしたまふエホバに感謝してうたへ琴にあはせてわれらの神をほめうたへエホバは雲をもて天をおほひ地のために雨をそなへもろ〳〵の山に草をはえしめ、くひものを獸にあたへ並なく小鴉にあたへたまふエホバは馬のちからを喜びたまはず人の足をよみしたまはずエホバはおのれを畏るゝものとおのれの憐憫をのぞむものとを好したまふエルサレムよエホバをほめたゝへよ、シオンよなんぢの神をほめたゝへよ、エホバはなんぢの門の關木をかたうし汝のうちなる子孫をさきはひたまひたればなりエホバは汝のすべての境にやはらぎをあたへ、いと嘉麥をもて汝をあかしめたまふエホバはそのいましめを地にくだしたまふ、その聖言はいとすみやかにはしるエホバは雪をひつじの毛のごとくふらせ霜を灰のごとくにまきたまふエホバは氷をつちくれのごとくに擲ちたまふ、たれかその寒冷にたふることをえんやエホバ聖言をくだしてこれを消しその風をふかしめたまへばもろ〳〵の水はながるエホバはそのみことばをヤコブに示しそのもろ〳〵の律法とその審判とを「イスラエル」にしめしたまふエホバはいづれの國をも如此あしらいたまひしにあらずエホバのもろ〳〵の審判をかれはしらざるなり、エホバをほめたゝへよ(以賽亞書四十五章一、二、三及び七節われエホバわが受膏者クロスの右手をとりてもろ〳〵の國をそのまへに降らしめ、もろ〳〵の王の腰をとき扉をその前にひらかせて門をとづるものなからしめん、われ汝のまへにゆきて崎嶇をたひらかにし銅の門をこぼち、くろがねの關木をたちきるべし、われなんぢに暗ところの財寶とひそかなるところに藏せるたからとを予へなんぢに我はエホバなんぢの名をよべるイスラエルの神なるを知しめん、われは光をつくり又くらきを創造す、われは平和をつくりまた禍害を創造す我はエホバなり我すべてこれらの事をなすなり

第二條　神の支配は微少なることにも及べり

其證據

一目　此の說には反對論を唱ふるものあるを聞かず若し微少なるものは神の支配を及ぼすだけの價値なしとすれば何が爲に之を造るの勞を取れりとするか已に造るの價値ありとすれば亦之を支配するの價値を有するは當然と謂ふ可し試に顯微鏡を以て微少物を調査するに愈々微少なるに隨て愈々精巧美妙を極めり之に反し。

て其人工に係るものは一見美なるが如しと雖も顯微鏡の照す所となり五百倍或は千倍と次第に高度を加へて調査すれば粗惡拙劣殆ど看るに耐へざるものあり此の比較は以て神の大能秋毫の末に及ぶを察するに足らん

二目　物の大は則はち其小より成立ち又大なる物は此小なるものと甚だ密着の關係を有するにあらずや宇宙の大も粒々より成りたるに外ならず引力の如き大作用と雖も基づく所は分子と分子とよりて生ずるものなり大海を覆へすが如き大瀑布ナイヤガラの壯觀も滴々より來り其一滴中亦幾百萬の分子を含有するを想ふべし理學者の說に緣れば一「インチ」立方の空氣中の分子は30000,0000,0000,0000,0000,0000, の數なりと云へり又麝香凡そ二厘目を取て一室中に措けば所在の物品悉く其香臭に燻するに至る斯の如きもの二十年にして後精密の秤を以て量目を驗するに以前より更に減少したるを覺ゆる能はずと又た蜘蛛網六十匁の糸線は地球を一千回繞らすの延長あり溜水一滴の中には五億ほどの微蟲を宿せり又微蟲の增殖することも甚だ驚くべきものあり「サイクロプス」(Cyclops) 一匹より四十個月間に四十五億ほどの同類を生じ又他の或類に至ては僅に四日間に殆んど二千億ほどの增殖を爲すと云へり其微細如此と雖も神果して此の宇宙を支配せらるゝときは同じく肉眼不達の微分子にまで及ばざるべからず回々教の祖師マホメットの傳記を見るに彼の尙ほ勢力の乏しきに當り敵の迫る所となり遁れて一岩洞の中に匿る適々蜘蛛の外より洞口を閉づるあり追者來り見たれども人の入るものにあらずとし搜さずして過ぐ爲めに危急の一命を全ふするを得たり此の一事によりて一大新宗教現出し世界の歷史に大變動を與ふることゝはなれり「又英國へステンクスの戰爭中一兵卒の放たる流矢は端なく英王ハラードの眼に當りて死に至らしめり是より勝利はウヰリヤム大王に歸し爾來系統今日まで英國に君臨するに至れり「又十六世紀の頃前者無敵と誇稱したるイスパニヤの艦隊 (Spanish Armada) は大舉して英國を襲ひ眼中ブリテン無きの有樣なりしが暴風の覆滅する所となりて形跡の見るべきなきに至れり彼の空前の壯圖を懷て天涯万里の航海を企てしクロンプスの船は始め恰も今の合衆國に當れる方向に進みつゝありしが一群の鳩南空を指して飛往を望見して必ず陸地の處在ならんと俄に水路を轉じて其行跡を追ひ遂に西印度島を發見するに至れり此の時もし鳩の導なかりせば船は北方沿岸に達して其土地は則はちスペインの所領に歸し後年淸敎徒を移住せしめ以て大國民の基を開かしむるの運に至らざりしなる可し

又十八世紀の頃佛國の軍艦が米國ニューインランド州に向て戰端を開きし時暴風に逢ふて覆沒せり

又南北戰爭の未だ戟戈を交へざるに當り南方不穩の擧動に對し硬軟兩れの手段に出づべきか北方の輿論二派に分れ容易に決すべくも見へざりしがサムター城塞 Fort Sumpter ——に在る南方の軍先づ七發の巨砲を放てり其破聲の響と共に大に北方の人心を激動し二派忽ち聯合し異口同音に斷然鐵火に訴て反賊を鎭定すべし是吾人の責任なりと呼ばしめたり

又ナポレオンは每日時刻を期して郊外に運動するを常とせしが兇徒あり彼を斃さんと企て或日街路の地中に硝藥を籠め其馬車の過ぐる刻限を計りて破裂せしむるの裝置なりしがナポレオンの此に近くや蒼蠅飛で馭者の鼻上に止まる馭者は氣色の惡きに耐へず手を伸べて拂はんとし思はず手綱を緩むれば馬は步調を亂して駈け出し遙か彼方に達したる頃機に遲れて天を突くの猛火は地を破て轟然たりし倘し此の小羽蟲なかりせば歐洲の局面は彼の如くあらず從て歷史上に大關係を來たせしならん

以上數例を觀察し來れば大なるものが小なるものと甚だ密着の關係を有するものなることを知る可し又列王紀上二十二章三十四節（以上帖記六章一節。使徒行傳二十三章の十六節を見る可し）

三目　聖書より擧証す神は天空の小禽頭髮の毫末にまで其支配を及ぼすことをせり（馬太傳六章二十六節より三十節まで全十章二十九節。路加傳十二章二十四節より二十八節。詩篇百四十七篇九節を見る可し）

第三條　神の支配は天然法によりて全般一樣に行はる

宇宙法則の一樣なることは凡ての學者共に承認する所なりと雖も或者は天然法則はち神なりと主張せり又神の支配の方法につき二箇の反對說あり一は神は全く物質の外に在りと云ひ太初に宇宙を造り同時に天然法を與へしのみにて以來全く直接の關係を有せず宇宙は恰かも時器の如く天然の法則に從て自ら運動するなりと若し此の說に從えば神は折々宇宙の原動力たる彈機を卷くにあらざれば其作用を失ふと云ふに至る所謂る「デーズム」(Deism)是なり又一は神が萬有の中に在りて其作用を顯すなりと然らば萬物に一定の法則の存するは云ふまでもなく神已に全智全能ならば全般一樣の統轄を爲すも亦當然なりと謂ふ可し之を聖書に徵するに能く第二說の趣意に恰當せり（詩篇十八篇七節より十五節まで。全七十七篇十七節より十九節まで。全百三篇九節。全百四篇二、三節及び二十四節より三十四節。使徒行傳十七章二十七、八節。以弗所一章二十三節。哥羅西一章十七節を見る可し）但し第二說をして極端に走らしむれば所謂る「パンチーズム」(Pantheism)と爲るべし故に第一、二共に極端の說を取るべからず爰に最も善く說明したる者を云へば神は萬物の上に在り又萬物の下に在り神は萬物の外に在り又萬物の內に在り內に在りと雖も其包む所となるにあらず外に在りと雖も敢て之と離るゝにあらず上に在りと雖も獨り高く坐するにあらず下に在りと雖も敢て屈して伏するにあらず上に在て之を治め下に在つて之を保ち且つ萬物の中に在て之を生かし之を運動せしめ又其大目的を成就せしめんが爲に變遷進化せしむるものなりとの說是なり試に物質力を調査すれば實に奇妙なる關係あるを發見す可し例令ば引力は兩箇距離の比例の反對に從て作用を呈し化學的和合力は其距離の立方の反對に從て作用を示し抵抗力は其距離の五乘に反對せり又各種の結晶體を驗するに其現象は各固有の法則に從て結晶せり例せば硫黃は八面金は六面銀は八面「トタン」は十二面食鹽は六面の晶を爲すの類なり此等は以て神の働に於ける方法の一班を窺ふに足るべし即ち神は力を以て凡の物質に在て働く所のものなれば神が天然法に從て其作用爲すことは平常普通の方法に屬し彼の奇跡なるものは常理外に於ける一種の作用たるなり

第三項　心靈界の支配則ち道德的支配

甲の部　理論

第一條　道德性あるもの、義務の性質、基礎、及び限界

一目　義務の性質を考ふるに苟も道德性あるものは必ず此の感覺あり而かも人類一般に供有するものにして他の動物に比して最も異なるの點專ら之れに在りとす

二目　義務の因て生ずる基礎につきては古來諸說紛々たり第一は人爲の法律則ち是なりと云ふ而かし此の所說に從へば倘し人爲の法律なき時には義務も亦之れ無しと謂ふべきか第二は神の律法則ち是なりと云ふ而かし神は何が爲に其律法を設けしか全能全智者は未だ相當の理由なくして斯ることを爲さゞるなり第二は廣益となるべき事則ち是なりと云ふ而かし廣益となるべきことは何故に爲すべきものなるや第四は第三說と聯絡を有し正義則ち是なりと云ふ而かし義は何故に義と稱し得らるべきか第五は此の基礎を事物自然の理に歸せり而かし自然の理は何物に基き何を以て礎とするか無神論者なれば物質を以て無限の始めより存在するものと

し之を神とする故に自然の理を以て基礎とするも敢て不可なきが如しと雖も有神論者に至ては則ち神は萬物と其關係の造主なりとせり左れば所謂る自然の理は神と甚だ密接の關係はなきか第六は神の性質則ち其基礎なりと云ふ神は自己の性質に象りて萬有を造りたるに由り事物の自然も又義務の礎も皆神の性質に基きたるものと見へたり故に若し神の性質は萬有自然の中に包含せりと云はゞ義務の基礎は第五說の如しとするも敢て不可あるなし（約百記十一章七、八、九節。羅馬書十一章三十六節そは萬物は彼より出かれに倚りかれに歸ればなり願くは榮神にあれアーメン）左すれば道德上より云へば神の義務と人の義務とは互に類似したる者と謂ふ可し神は靈體ある者を創造し特に之を自己の性質に象りたる故に此靈體物の義務も其造主の義務も自ら異なる所なしと見へたり故に義務の基礎は共に自然の理なるものに置けり而かし人間の性質も神の性質も共に此自然の理の中に包含せることを忘るべからず大學教授ハリス氏は自著有神論の基本中に（Prof. Harris' Fundamental Basis of Theism）義務を以て神の限りなき智慧に基けりとし此宇宙の大原因は生ける「ボルソナ」なる自由自在絶對の神なりと爲す而して凡の眞理凡の律法凡の理想凡の智慧は悉く根源を神に置けり所謂自然の理とは則ち此等の者を云ふ而して神は其智慧慈愛に從ひ宇宙に於て絶へず此等の者を示現せらるゝなり

三目　道德性あるものゝ義務の限界

義務の限界は各自力量に適應する所を以て度とす縱令ば比叡山を移して琵琶湖に投せよとの命令ありとすれば其力量の及ぶだけの土石を採て湖中に投ずるの義務ありとす又キリストの最後の命令の如き（爾曹ゆきて萬國の民にバプテスマを施し之を父と子と聖靈の名に入て弟子とし且わが凡て爾曹に命せし言を守れと彼等に教へよ云々。馬太傳廿八章十九、廿節）固より吾人は其世界億兆の民に傳道すると能はずと雖も吾人の及ぶだけの能力智慧財寶を傾けて從事すべきの義務あるが如し支那に趁跋なる一老媼あり自ら謂らく隣佑鄉黨は我が傳道し得べきなりと雖も到底万里の行に耐へざれば基督の命令を奉ずること能はず故に其教會員たるの價値なきものなりとせり是れ義務の限界を謬りたる一例とす而かし此命令に關する信徒の義務は其趣意を大目的と爲し以て百般の事に從ふべし學窓に學業を脩るものも市場に商賣を營むものも國政に關與するものも農工の事業に勞役するものも其他如何なる地に往き如何なる境遇に處し如何なる業務を任ずるにせよ又其爲す所の細末の點までも盡く此大目的を成就することを旨として決定せずんばある可からず彼の（爾心を盡し意を盡し主なる爾の神を愛すべし。己の如く爾の隣を愛すべし。馬太傳二十二章三十七節及び三十九節）との如きは聖靈の扶けなくば人間として此の二個の命令を全く成就するものは未だこれ無しと雖もこの爲さぬてふことは爲し能はぬてふことには非ず唯爲し能ふの力ありと雖も之を用ゆる自己に於て足らざる所あるが故のみ之れと同じく聖靈の扶けなくば再生も亦望むべからず然りと雖も再生を得ざるは罪ある人間として正に爲さゞる可からざる事を自ら爲すを好まざるの過に座するなり（爾曹わが所に生を得んがために來るを欲ふ。約翰傳五章四十節）蓋し彼の爲さぬてふことを屢々重ねて其僻習を强固にするときは即ち爲し能はぬてふことに類似するに至る可し

第二條　道德上働きの性質

此働は元來身體の運動に屬せざるを以て禽獸及び白痴赤兒等の決して與るを得ざるものとす則ち智慧あり德性あり又善惡を辨識する能力を俱ふるものが其義務と認めて自由の撰擇に出でたるものを指し即ち道德上の働とは云ふなり故に夢の如き或は自然に浮ぶ思想の如きは道德上の働として論せず必畢此等は平素に於ける

其結果たるのみ倘し故意に惡念邪情を挾むに至ては則ち罪たるを免れず或人の言の如く不意に飛鳥の來て片時頭頂に止まることは防ぐ能はずと雖も其棲巢を營むに至ては之を防ぐことを得べし吾人の思想に於ける亦然らざるを得ざるなり又他の事件に於ては能く道德上の働に耐ゆるものと雖も其事を爲すべき義務の感情更に催さゝる場合には之を行はざるも罪とせず假令ば幼稚の時慈嚴の膝下を遠く離れたるものが成人に至り適々父母に邂逅すと雖も其親たることを知らずして相當の待遇を缺けばとて罪とせざるが如し何んとなれば未だ其父母たるを知らざればなり但し子女たるもの平生更に親を慕ふ心もなく或は所在を尋ねんとも爲さゝるに於ては即ち罪なりとす我々人間と天父との關係恰も如斯ものあり未だ全く天父を知らざる當時に在ては之を禮拜せざるも强ち罪と云はず然れども天父の存在を想ふて尋ね求めざるの罪は決して推諉する能はざるなりサウル大王が戰爭の際終日斷食すべきことを命令したるとき其子ヨナタンは禁令の出でたるを知らずして蜂蜜を喰へたるが如き（撒母耳前書十四章を見よ）或は使徒パウロが祭司長に向て粉堊たる壁よ神は爾を擊ん云々と詈りたるが如き未だ其祭司長たることを知らざるに出でたるなり（使徒行傳二十三章一節より五節を見よ）故にパウロとヨナタンの言行は共に罪として論せざるなり

第三條　本心の性質と働き

一目　本心の性質

人間の心は能く善惡を辨別し又義務を感覺す而して道德心は智慧の判斷に訴て善を勸め惡を戒むるなり彼の智慧經驗及び判斷力は以て事物の善惡を明晰にするの用に供し道德心は奬勵と警戒とを命令するものとす

二目　道德心の働き

（一）善を爲すことゝ惡を爲すことゝは全く反對の區別あるを識認すること
（二）善は爲す可し惡は爲す可からずと感覺すること
（三）義務と知て其事を爲せば自ら賞せらるゝ所あり爲さゝれば自ら責めらるゝ所あること
（四）善惡の行爲に從て喜憂苦樂を感すること
（五）義務と知て其事を爲せば神たるものゝ賞る所となりて恩賜を得べく又爲さゝるときは同じく其責むる所となりて譴罰の免れ難きを感覺するものなり今日まで道德心につき世の論評するものを視るに往々道德心の區域と智慧判斷との區域を明白にせざるよりして種々の混雜を惹起すことゝはなれり若し如斯此等の區域を分別して論せざるときは甚だしき誤謬に陷り易きものあり道德心の働は其有する智識の情況如何に因るものとす元來道德心は某の行爲は善なり又惡なりと判定を下さず個々別々に智慧經驗又智識に由りて彼是の善惡を判斷するに過ぎずこの故に本心は如何なる時にも誤ることなく善を爲す可し惡を爲す可からずと勸めて止まず抑も道德心は智慧經驗智識及び判斷力の爲に光明となる可しと雖も此心は決して何物が善又惡と是非の判定を下すものにあらざることを記憶せざる可からず之が爲に人々の別と邦土の異るとに由り某の事件を以て或は善なりとし或は惡なりと斷定し時に彼是相反することあり而かし道德心の勸は如何なる時代如何なる人種如何なる邦土如何なる人物に拘はらず古今同一轍に出づるものにて彼の善を爲す可し惡を爲す可からずとの勸告即ち是なり例令ば印度人の母親は其道德心の勸に從て己の兒女をガンジュス河に投するものあるが如し是智識の足らざるより誤てる判斷を下し其所業を善事なりと思ふが故なり而かし我々の本心に於ては如斯ことを大に咎め決して爲すべきにあらざることを勸むるにあらずや然らば人間たるものは如何なる時にも

道德心の勸むる所に服從す可き筈なるか又其勸に從ふことは善事なるか然り固より不良のことに非すと雖も其何事を以て善とし又何物を以て惡とするかの點に附きては能く之を考察測量し其判斷を下すに當り充分智慧と智識の力に訴ひ且本心の光明に照して後斷定すべきものたり倘し之を輕忽にせば其判斷の誤なるは勿論なるべく隨て罪の判斷なりと謂はざるを得ず又人間の心は平素道德心の勸むる所に逆ひ頑固を極むるに至ては其勸の小部分の外感覺を與へすと雖も本心は尙存在し常に活動しつゝあるものにて而も各自の心中に於て永遠限りなく生存して働かんとするものなり故に彼の來世に於ても或は惡魔或は極惡人に於ても此本心は依然生存して其感覺を誤ることなく又衰弱することなく活動して止まざる可し惡者それ自身は何程衰ふも又何程道德心に逆ふ事をするとも縱令足下に蹈附るとも凜乎儼然たる道德心は何時も心の爲さゞりし所の義務を追懷せしめ又受んと欲せば受け得べかりし永遠の生命及び神の榮光慈愛をも感覺せしむ可し聖書に所謂つきざる蟲きえざる火の原因たるものは即ち道德心の働きなりと想はるゝ也（馬可傳九章四十八節）

第四條　意志の性質と働き

意志の性質は撰擇と執意を爲すの力なり此の働に必要なるもの二種あり即ち第一は爲す事柄第二は爲すの旨意とす旨意なければ自己は執意を爲すことなければなり意志の撰擇とは即ち旨意と旨意とを比較し其輕重を計り孰れの旨意に從て撰擇す可きかを決斷することなり又執意とは執意を爲すことにて即ち撰擇に從て之を成就することを云ふ假令ば一青年あり同志社に入學せんとの志望を懷き先其利害得失に關する二箇の旨意を計較す而して入學するを以て得策なりと判斷せば父母の許諾を請ひ學資を求むべし斯て凡の準備整へ西京に來り入校するを得るに及て此意志の撰擇は完く成効を告たりとす又旨意に二種あり一は欲望に屬し一は義務に屬す時に彼是相合することあり或は相反することあり青年は頻に學業を修んと希望し兩親も亦之を承諾する前例の如きは二者相合ふことを得しものとす又青年は如何に熱望すと雖も老親奉養の義務ありて膝下を去り遊學の途に就くを得ざることあり斯る場合には二者相反するものとす

第一問　心は如何なる時にも其最大のものに向て撰擇を爲すものなりや

各自自己に於て孰れの旨意が最大なるかを辨別して後之を撰擇する心は旨意を見て擇む所を決すると雖も此働きの力たるものは旨意にあらずして自己にあり故に事實上より云へば甚だ劣等の旨意に從て撰擇することあるを免れず青年學生の校舍に在る能く校則を守り其課業を勉め高尙の智識品格を養生するが最大の旨意なるに却て不良の友人に誘はれ酒色の快樂に耽る者あるの類也即ち其誘引の始に於て先づ孰れの旨意が其身に關し最大なるやを取捨決定するの力を具有せりそは人間の心は機械的作用にあらず自由性を有する者なれば也

第二問　意志は自由なるものなりや

其定義　意志の自由とは他より壓制せらるゝこと無く其好む所を撰擇するの力なり即ち現實に擇むものを擇み又現實に擇ばざるものをも擇む力なりとす

前例青年のことを假りて辯明すれば彼もし學生の眞面目を保たんと欲するも心のまゝなり又酒色の快樂を貪るの不正なるを知て尙之を爲すも心のまゝなるが如し

人間自由の證

一目　人間が自由なりとは一般普通の所說なりとす

二目　人間の本心は實に此說を承認し各自己の自由なることを疑ふものなし已に自由なるが故に己の義務を

感ずるに至るなり

三目　倘し此説を拒みて論せんとするときは結局宿命説となるを以て寧ろ人間の自由なることを反證するものなり何んとなれば宿命説は人の行爲を機械的となし義務なるものを擧て滅すに至らん機械的作用中に義務のあるべき筈なきを以てなり而しながら前述する如く實際上吾人は慥に己の自由なることを感じ又己の義務をも感ずるにあらずや

四目　一見或は自由に制限あるが如くなれども其制限は未だ眞の制限と謂ふ可からず或る傾向は甚だ有力なりと雖も必ずしも之に從ふ可きにあらず蓋は吾人專心慕ふて止まざることにても同時に其正反對を擇むの力を有するを以て知る可し境遇事情等の制裁は未だ自由を左右する程の妨害とはならず何んとなれば心は依然として現實に擇むことの反對を擇むの力あるを以てなり

五目　人間を自由なりとするは聖書の趣に合へり其記する所の命令訓誡及び賞罰は悉く自由なる者に適用しあるを觀る可し

第三問　人間の自由は神の支配に逆ふ所なきか

既に前述する如く神は形體上を支配すると同一の方法を以て靈體上に施さず其己れに忠實なる者を支配さるゝや常に旨意を以て導くことを爲せり之あるが爲に諸靈物は此旨意を見もし感じもして神の導く所に從ふに至る但し當時と雖も倘し之に逆はんとすれば逆ひ得べし而して尚忠實ならんことを求むるのみ又一方に於ては其導に逆ひ反對の道に歩むもの尠とせず蓋し滔々たる不信徒社會の實況なりとす左すれば神に忠實なるものに在ては現實の撰擇は其支配に適ひ故らに反對を撰擇するの力は人間の自由に適ふものなり尚神の企圖の論に詳説す可し

乙の部　實際論

神は道德性を有するものを支配すること

第一條　神は其支配を行ふ

一目　道德性あるもの丶必要より論證す

若し神の支配の行はれざるときは忽ち混雜遺憾衰頽滅亡等の來ることを免れず

二目　神の性質より論證す

神已に道德性を有するもの丶造主たれば支配者たる特權をも有すべく又唯神のみ能く其必要に應じて全智全能を用ゐ得べし故にもし凡のもの丶望を空ふして施す所なしとせば未だ善德あるものと謂ふ可からず且支配の必要あるに拘はらず之に應ずるの道なしとせば何故に此靈體物を造りたるや更に解せざるなり

三目　人間の道德心の性質より論證す

此心は善惡を辨識するの力あり善を爲す可し惡を爲す可からずとの命令力あり又善惡の行爲に從て或は賞し或は責むることを爲せり加旃來世の豫報を爲して其賞罰あることを感せしむ試に蒸氣船の「エンヂン」(Engine)と稱する機關を調査せよ火爐氣鑵等あり又は進退動止の作用に適せる器具等を具へり吾人は之を看て其必ず機關司の支配を受る爲に製造せられたるものと判定するを遲疑せざる可し之と等しく人間の性質を考察する時は必ず道德的勸誘の支配を受くる爲に造られたるものなりと斷定せざるを得ず而かし人間は固より蒸氣機關と日を同ふして語るべきものに非ず苟も自己承認の上ならでは其働もなく責任もなし神は道德的理法に應

として旨意即ち動機を用ひ聖靈を以て導を與ふと雖も吾人は能く之に從ひ或は之に逆ふの力を有せり彼の忠實に神に事ふるものに至ては常に其導の中に在て運動するものとす迷ふたる天使或は人間の中には道德心の勸め聖靈の導に逆ひ常に神に背くもの尠からず已に前述する如く神は斯るものを支配するに至ては更に異なる方法を以てせらるゝなり

四目　賞罰より論證す

獨乙のシューラーは世界の歷史は即ち譴罰の歷史なりと云へり看よ一個人として亦一國民として此世ながらに概ね其所業に應じて相當の報を受くるを免れず大なる不義を行ひ酷き壓制を行ふときは非常の困難痛苦衰頽等の慘狀を招くに至る可し假令ば羅馬帝國の如し彼れ武力の壓制を逞ふし頻に諸國を討滅し幾千萬の生靈を土炭に陷れ或は基督信徒に對し殘虐到らざるなき迫害を加へて殺戮を恣にしたりしが後年遂に北狄蠻人の蹂躪する所となりて土崩瓦解如何ともすべからざるの運に歸せり

ニーロ帝は羅馬歷朝の最も殘忍無道を極めしものなるが看るも悚然たる煩悶苦惱の中に自殺の最後をなせり羅馬法王の如きも敢て威權を貪り自らを神の代理者と稱し心に任せて各國帝王の廢立進退を爲し或は敬虔なる基督信徒を苦しめて殺害を行ふなど頗る暴橫を極めしが今や其位より墜され艱難辛苦の狀昔日と天壤唯ならざるものあり

佛國に於ては一千五百七十二年八月二十四日「セント、バルトロミユー」の祝日 (Saint Bartholomews' day) を期し謀計を設て突然新敎の學者牧師たる者を殺し且同敎數十萬の信徒を迫害し或は國外に放逐したることあり又十八世紀の終り頃同國國會は上帝も來世も無きものなりとの議決を爲せしが慘怛たる殺氣は忽ち四面を蔽ひ醒風血雨天日暗く無情の斷頭機は頻に旋轉し被害者の肉未だ冷ならざるに加害者又其跡を等ふす如斯もの前後十年世に怖ろしき革命の大悲劇を演ずるの結局とはなれり其後今日に至る迄佛國は屢々政治上の革命に遇ひ殆ど安然の地位を失ふたる有樣は隱なき事實なりとす

北米合衆國の國體は萬民同等同位均しく生命自由幸福を全す可しとふ基礎の上に置かれながら四百餘萬の奴隸を使役したり之が爲め遂に未曾有の內亂を惹起し爰に南北兵を搆へ其一千餘個所の戰地に於て鉄火に斃れ血を流し骨を曝せし壯丁の數は平均一家一人づゝに當り或は敬愛する良人の生命を以て或は慈愛する子弟の生命を以て此の國罪を贖ふの已を得ざるに至れり

五目　聖書より擧証す

凡て神の命令は人の禍福に關はれり即ち人の道德性を支配せらるゝ所の點此に在りとす

汝等我をこゝに賣しをもて憂ふるなかれ身を恨るなかれ神生命をすくはしめんとて我を汝等の前につかはしたまへるなり、この二年のあひだ饑饉國の中にありしが尙五年の間耕すこともなかるべし神汝等の後を地につたへんため又大なる救をもて汝らの生命を救はんために我を汝等の前に遣したまへり然ば我を此につかはしたる者は汝等にはあらず神なり神われをもてパロの父となしその全家の主となしエジプト全國の宰となしたまへり

創世記四十五章五節より八節又た申命記廿八章四十九、五十節即ちエホバ遠方より地の極所より一の民を鷲の飛がごとくに汝に攻きたらしめたまはん是は汝がその言語を知ざる民その面の猛惡なる民にして老たる者の身を顧みず幼稚者を憐まずエホバは殺し又生したまひ陰府に下しまた上らしめたまふエホバは貧からしめ

又富しめたまひ卑くしまた高くしたまふ茫弱者を塵の中より擧げ窮乏者を埃の中より升せて王公の中に坐せしめ榮光の位をつがしめたまふ地の柱はエホバの所屬なりエホバ其上に世界を置きたまへりエホバ其聖徒の足を守りたまはん惡き者は黑暗にありて默すべし其は人力をもて勝つべからざればなりエホバと爭ふ者は破碎かれんエホバ天より雷を彼等の上にくだし地の極を審き其王に力を與へ其膏そゝぎし者の角を高くしたまはん（撒母耳前書二章六節より十節）アマジヤエドム人を戮して歸る時にセイル人の神々を携さへ來り之を安置して己を神となしその前に禮拜をなし之に香を焚り是をもてエホバアマジヤにむかひて怒を發し預言者をこれに遣はして言しめ給ひけるに彼民の神々は己の民を汝の手より救ふことを得ざりし者なるに汝なにとて之を求むるや彼かく王に語れる時王これにむかひ我儕汝を王の議官となせしや、止よ汝なんぞ擊殺されんとするやと言ければ預言者すなはち止て言り我知る汝この事を行ひて君諫を聽いれざるによりて神なんぢを滅ぼさんと決めたまふと斯てユダの王アマジヤ相議りて人をエヒウの子エホアハズの子なるイスラエルの王ヨアシに遣はし、來れ我儕たがひに面をあはせんと言しめければイスラエルの王ヨアシユダの王アマジヤに言おくりけるはレバノンの荊棘かつてレバノンの檜樹に汝の女子を我子の妻に與へよと言おくりたるとき有しにレバノンの野獸とほりてその荊棘を踏たふせり汝はエドム人を擊破れりと謂ひ心にたかぶりて誇る、然ば汝家に安んじ居れ、何ぞ禍を惹おこして自己もユダもともに亡びんとするやと然るにアマジヤ聽ことをせざりき、此事は神より出たる者にて彼らをその敵の手に付さんがためなり是は彼らエドムの神々を求めしに因る（歷代志畧下二十五章十四節より二十節）あしきものは劒をぬき弓をはりて苦しむものと貧しきものとをたふし行ひなほきものを殺さんとせり、されどその劒はおのが胸をさし、その弓はをらるべし人のあゆみはエホバによりて定めらる、そのゆく途をエホバよろこびたまへり（詩篇三十七篇十四、五節及び二十三節）又かれらの前にひとりを遣したまへり、ヨセフはうられて僕となりぬ、かれら足械をもてヨセフの足をそこなひくろがねの鏈をもてその靈魂をつなげり斯てそのことばの驗をうるまでに及ぶエホバのみことば彼をこゝろみたまへり（詩百五篇十七節より十九節）二種の碼碼はエホバに憎まる虛僞の權衡は善らず（箴言二十章二十四節）王の心はエホバの手の中にありて恰かも水の流れのごとし彼その聖旨のまゝに之を導きたまふ人の道はおのれの目に正しとみゆ、されどエホバは人の心をはかりたまふ（箴言廿一章一、二節）神はその聖をもていひたまへり、われ甚くよろこばん、われシケムをわかちスコテの谷をはからんギレアデはわがものマナセはわが有なり、エフライムも亦わが首のまもりなりユダはわが杖モアブはわが足盥なり、エドムにはわが履をなげんペリシテよわが故によりて聲をあげよと（詩篇六十篇六節より八節）嗚アッスリヤ人なんぢはわが怒の杖なりその手の笞はわが忿恚なり、われ彼をつかはして邪曲なる國をせめ我かれに命じて我がいかれる民をせめてその所有をかすめその財寶をうばはしめ、かれらを街の泥のごとく蹂躪らしめん、されどアッスリヤ人のこゝろざしは斯のごとくならず、その心の念もまた斯のごとくならず、そのこゝろは敗壞をこのみ、あまたの國をほろぼし絕ん、かれ云わが諸侯はみな王にあらずや（以賽亞書十章五節より八節）エホバよわれ知る人の途は自己によらず且歩行む人は自らその歩履を定むること能はざるなり（耶利米亞記十章廿三節）汝はわが鎚にして戰の器具なりわれ汝をもて諸の邦を碎き汝をもて萬國を滅さん（同五十一章廿節）視よ我カルデア人を興さんとす是すなはち猛くまた荒き國人にして地を縱橫に行めぐり己の有ならざる住處を寄ふ者なり（吧巴谷書一章六節）。

第二條　神は人間の撰擇と執意まで支配すと雖も人間は尙自由たるなり

已に前述する如く神は道德性を有するものを支配するには動機を以てす此故に神は惡を爲すためには人を導かず而かし不義の人と雖も其爲す所もし善事に關するときは同じく動機を以て之を導かるゝなり

一目　神もし智慧あり又善惡を辨識する者を支配せんとならば先動機の感覺を起して之を導の外手段なきに似たり且此支配は先見のみに止まらず固より何事を爲さしめんと預め定たる後に導を與へらるべし神は自ら企圖する所なく只管人間の決斷にのみ任せて定むることを爲すものにあらざるなり

二目　事實を質すときにも同樣にて人間は道德心より常に導を受けり聖書の勸誘は何所も人間の本心と撰擇と執意の三者に對して記載せられたるを見るなり

三目　聖書より舉證す

噫エルサレムよエルサレムよ預言者を殺し爾に遣されし者を石にて擊る者よ母鷄の雛を翼の下に集むる如く我なんぢの赤子を集んと爲しこと幾回ぞや爾曹は欲まず視よ爾曹の家は城と爲て遺さるべし誠に我なんぢらに告ん主の名に託て來る者は福なりと爾曹いはん時いたる迄は我を見ざる可し（路加傳十三章三十四、五節）

然るにヘシボンの王シホンは我らの通ることを容さゞりき是は汝の神エホバ彼を汝の手に付さんとてその氣を頑梗しその心を剛愎にしたまひたればなり今日見るが如し（申命記二章三十節）視よ我今日生命と福德および死と災禍を汝の前に置り即ち我今日汝にむかひて汝の神エホバを愛しその道に歩みその誡命と法度と律法とを守ることを命ずるなり然なさば汝生ながらへてその數衆くならんまた汝の神エホバ汝が往て獲るところの地にて汝を祝福たまふべし然ど汝もし心をひるがへして聽從がはず誘はれて他の神々を拜みまたこれに

事へなば我今日汝らに告ぐ汝らは必ず滅びん汝らはヨルダンを渡りゆきて獲るところの地にて汝らの日を永うすることを得ざらん我今日天と地を呼て証となす我は生命と死および祝福と呪詛を汝らの前に置り汝生命をえらぶべし然せば汝と汝の子孫生存らふることを得ん即ち即の神エホバを愛してその言を聽き且これに附從がふべし斯する時は汝生命を得かつその日を永うすることを得エホバが汝の先祖アブラハムイサクヤコブに與へんと誓ひたまひし地に住ことを得ん（申命記三十章十五節より廿節）ギベオンの民ヒビ人を除くの外はイスラエルの子孫と好をなし邑なかりき皆戰爭をなしてこれを攻どりしなりそも〳〵彼らが心を剛愎にしてイスラエルに攻よせしはエホバの然らしめたまひし者なり彼らは詛はれし者となり憐憫を乞ふことをせず滅ぼされんがためなりき是全くエホバのモーセに命じたまひしが如し（約書亞記十一章十九、二十節）是に於てエホバエドム人ハダデを興してソロモンの敵と爲したまふ彼はエドム王の裔なり曩にダビデエドムに事ありし時軍の長ヨアブ上りて其戰死せし者を葬りエドムの男を盡く撃殺しける時に方りて（ヨアブはエドムの男を盡く絶まで居りイスラエルの群衆と偕に六月其處に止れり）ハダデ其父の僕なる數人のエドム人と共に逃てエジプトに往んとせり時にハダデは尙小童子なりき彼等ミデアンを起出てパランに至りパランより人を伴ひてエジプトに往きエジプトの王パロに詣るにパロ彼に家を與へ食量を定め且土地を與へたりハダデ大にパロの心にかなひしかばパロ己の妻の妹卽ち王妃タペネスの妹を彼に妻せりタペネスの妹彼に男子ゲヌバテを生ければ夕ペネス之をパロの家の中にて乳離せしむゲヌバテパロの家にてパロの子の中にありきハダデエジプトに在てダビデの其先祖と偕に寢りたるとまた軍の長ヨアブの死たるを聞しかばハダデパロに言けるは我を去しめて我國に往しめよとパロ彼にいひけるは爾我とゝもにありて何の缺たる處ありてか爾の國に往ん事を求

むる彼言ふ何も無し然ぞもねがはくは我を去らしめよ神又エリアダの子レゾンを興してソロモンの敵となせり彼は其主人ゾバの王ハダデゼルの許を逃さりたる者なり（列王紀略上十一章十四節より二十三節）エホバカルデアの軍兵スリアの軍兵モアブの軍兵アンモンの軍兵をしてエホヤキムの所に攻さたらしめ給へり即ちユダを滅さんがためにこれをユダに遣はしたまふエホバがその僕なる預言者等によりて言たまひし言語のごとしこの事は全くエホバの命によりてユダにのぞみし者にてユダをエホバの目の前より拂ひ除かんがためなりき是はマナセがその凡てなす所において罪を犯したるにより（列王紀略下二十四章二、三節我らの先祖の神エホバは讃べき哉斯王の心にエルサレムなるエホバの室を飾る意を起させ（以士喇書七章二十七節）人は心におのれの途を考へはかる、されぞその歩履を導くものはエホバなり（箴言十六章九節。出埃及七章三及び十三節。同八章十五節。同九章十二、十六、三十四節。同十章二十、二十七節。同十一章十節。羅馬書九章十七節。申命記二章三十節。同三十章十五節より二十節。撒母耳上六章六節。約翰傳五章四節。默示錄二十二章十七節を見る可し）

以上例中の人々は皆自由性に從て自ら爲さんと欲する所を爲したり而かし神は尙之を支配したりパロ始め其他のもの彼自身は決して自由たることを疑ふものにあらず而して神は之を其の支配の中に置たりとす左らば如何にして此二者を調和せしむるを得べきか神に於ては人間の自由を妨ぐることなく之が導を與へて以て支配を加へらる而して人間に於ては常に現實に擇ばざることを擇むの力を有せり既に前述する如く現實に係る撰擇は神の支配に合ひ其相反する力を用ゆる所は人間の自由に適へりとす人は何事を擇むに於ても同時に其反對を擇むの力あることを自覺するにあらずや又神は惡き者に對し倘動機を以て導くこと能はざる場合には不得已之を束縛して支配せらる可し例令ばパロ及び近世のナポレオン大帝の如き是なり彼等は己の希望を成就すると能はざりしと雖も心の有樣より云へば曾て自由たるを失はずパロの紅海に溺るゝ死に至るまで尙其心はイスラエル民族を殲滅するの希望あり撰擇あり唯此目的を達する能はざる束縛ありて心に任せざりしのみナポレオンは形骸より云へば絕海の孤嶋セントヘレナの束縛中に呻吟すと雖も雄心鬱勃全歐洲を一統し自ら君臨せんとする希望もあり撰擇もあり唯之を遂ぐるの道を得ざるに由りしのみ又哥林多前書十五章二十四節以下二十八節に見ゆる所の神凡のものを基督の足下に置くときにも彼の惡者は惡を爲すの力こそ失せたれ心中自由に之を希望し之を撰擇する力を存するなり

第一問　人間は聖靈の導を防ぐの力あるか

然り多の人は聖靈の導を拒み滅亡に陷るの不幸を招けり而かし人間は新に生るゝ時即ち聖靈によりて再生を得たるときは其導を防ぐの力を有すと雖も實際斯る場合に於て此力を用ゆることを爲さざるものなり

第三條　神の支配の公平なること

一目　神は圓滿の德性を備へらるゝもの故に其支配に於て決して不公平あることなし

二目　事實に就て質すも同樣に思はざるを得ず之は未だ曾て神より不義を加へられたるものはあらざるなり此世界に於ては義人必ずしも榮ゆるにあらず世の擯斥する所となり苦難の間に老ゆることあり不義者必ずしも屈せらるゝにあらず衆庶の推尊する所となり榮譽の地位に立つもの尠しとせず然れども此世は賞罰の世界にあらず其審判の行はれ義と不義とに對する信賞必罰は即ち來世に在ることを忘る可からず

三目　聖書より擧證す

エホバの法はまたくして靈魂をいきかへらしめエホバの證詞はかたくして愚なるものを智からしむエホバの訓諭はなほくして心をよろこばしめエホバの誡命はきよくして眼をあきらかならしむエホバを惶みおそるゝ道はきよくして世々にたゆることなくエホバのさばきは眞實にしてことごとく正し（詩篇十九篇七節より九節）もろ〳〵の國のなかにいへエホバは統御たまふ世界もかたくたちて動かさるゝとなしエホバは正直をもてすべての民をさばきたまはんとエホバ來りたまふ地をさばかんと來りたまふ義をもて世界をさばきその眞實をもてもろ〳〵の民をさばきたまはん（同九十六篇十、十三節）エホバ地をさばかんために來りたまへばなりエホバ義をもて世界をさばき公平をもてもろ〳〵の民をさばきたまはん（同九十八篇九節）王のちからは審判をこのみたまふ汝はかたく公平をたてヤコブのなかに審判と公義とをおこなひたまふ（同九十九篇四節）エホバよなんぢは義くなんぢの審判はなほし（同百十九篇百三十七節）なんぢの義はとこしへの義なり汝のりは眞理なり（同篇百四十二節）それ律法は聖し誡も聖く公義かつ善なり（羅馬書七章十二節）

第一問　功勞に過て人を惠むことは正義なりとするか

若し無理不法の所爲なき限りは正義たることを失はず其功勞に過て人を惠むときは已に正義世界の沙汰に非ずして最早恩惠世界の事なりとす故に恩惠の場所に在ては無論功勞に過ぎたる待遇を施すことを爲すなり馬太傳二十章一節以下十六節に記する所の基督の譬話を見る可し

第二問　罪人たる者は元來自ら犯罪を止むる力なきに神は止むべしと命ずるにあらざるか

否罪人は犯罪を止むるの力を有せりと雖も之を使用することを爲さゞるなり

第三問　神は故らに人間を罪人に造り而して之を罰するにはあらざるか

人間は此世に生れ出たる時未だ實際罪人にあらず其善惡を辨識し惡を爲すことを撰擇するまでは罪人の名を帶ばしむるを得ず

第四問　神もし人間に罪を犯し能ふ所の性質を附與して之を造りたりとせば如何

神は決して惡き性質を附與せず却て潔且義なる性質を以てせり其惡き性質は人間自ら搆造したる所なり尙此問題は罪の論に詳說す可し

第四條　神は特權を以て支配す

神の支配は最高無上の權威にして他に待つ所在て後然るものに非ず而かし其支配は決して無理壓制にあらず能く智慧正義道理の宜に適ふて逆ふことなし又神は權威を專にするを好んで猥に譴罰を加ふるものに非ざるなり自由自在の絕對者たり萬有の造主たる神にして彼の如き權威を有し他に待つ所なしとするは理の當然にあらずや

其證

一目　神が特權を以て支配せらるゝことは能く正理に適へり卽ち神が道德心に對し諸の動機を以て靈體物を支配せらるゝとすれば種々の旨意を人の心中に生せしむると否とは其自在にする所なり又束縛を加へて支配すると否とも同樣なりとす

二目　神は完全なる能力と智慧とを備るものなれば强力なる動機或は束縛を以て靈體物を支配せらるゝなり

三目　觀察或は經驗上より擧證す卽ち人間の生死命運事故遭際等を看じ來れば神の特權の現著なるを感せずんば非ずアブラハムの跡新島先生の事を見よ思半に過ぐるものあらん

四目　聖書より擧証す

抑わが汝をたてたるは卽ちなんぢをしてわが權能を見さしめわが名を全地に傳へんためなり（出埃及記九章十六節）ヱホバ言たまはく我わが諸の善を汝の前に通らしめヱホバの名を汝の前に宣ん我は惠んとする者を惠み憐まんとする者を憐むなり、同三十三章十九節然どわれらの神は天にいます、神はみこゝろのまゝにすべての事をおこなひ給へり（詩篇百十五篇三節）ヱホバその聖旨にかなふことを天にも地にも海にも淵にもみなことごとく行ひたまふなり、同百三十五篇六節尙以賽亞書四十四章二十四節より二十八節同四十五章五節より十三節同六十四章八節但以理書四章三十四、五節羅馬書九章十六節より二十一節同十一章三十六節以弗所書一章五十一節腓立比書二章十三節を見る可し

第一問　人間は神に逆ふことはなきか

然り神の許すだけの範圍に於て逆ふことを爲せり而かし神は其逆ふ所以のものを以て遂に却て衆庶の便益をなさしむるに至れり例令ばパロの所業に於けるが如く（出埃及記九章十六節）ヨセフの運命に於るが如し（創世記四十五章五節より八節同五十章二十節を見る可し）

第五條　此支配は偶然に出でたるにあらず神の始よりの企圖に應ふものなり

其證

一目　神の働が能く其企圖に應ふことは誠に然る可きことにあらずや左らば此企たる永遠の始より定められたるものと謂を適當なりとす

二目　神の性質より論證す

若しそれ神の智慧より云へば慮りなくして事を行ふは智と謂ふ可からず苟も之を備ふるときは必ず常に先企圖する所在て後事に從ふ可きなり又智識より云へば當初に企圖を定めずんば未來の事を知て支配すること能はざるなり其德より云へば唯神のみ能く企圖と思慮とを以て凡の者の便益となるために支配することを得べし然るに神もし爰に出ですとせば大に德性に缺ぐる所ありと謂はざるを得ず故に全能全智至愛の神は必ず其企圖を永遠の始より定め置かる可き筈なりとす

三目　全き支配を行はんと欲せば豫め其企圖なくんば能はざる所なり

四目　聖書より擧證す

汝等いにしへより以來のことをおもひいでよ、われは神なり我のほかに神なし、われは神なり我のごとき者なし、われは終のことを始よりつげ、いまだ成らざることを昔よりつげ、わが謀略はかならず立といひ、すべて我がよろこぶことを成んといへり、われ東より鷲をまねき遠國よりわが定めおける人をまねかん我このことを語りたれば必らず來らすべし我このことを謀りたればかならず成すべし（以賽亞書四十六章九節より十一節）ヱホバの謀略はとこしへに立ちそのみこゝろのおもひは世々にたつ（詩篇三十三篇十一節）人の心には多くの計畫ありされど惟ヱホバの旨のみ立べし（箴言十九章二十一節）それ神我儕をして其前に聖く疵なからしめん爲に世基を置ざりし先より我儕をキリストの中に簡びその意のまゝにイエスキリストに由て我儕を己の子と爲んことを愛を以て預じめ定たりその恩の榮を讃しめんため也すなはち愛する者に在われらに賜ふ所の恩なりその恩の豊なるに由て彼にある我儕その血により贖すなはち罪の赦を得なり神さま〳〵の智慧と聰明を予へて此恩を我儕に充しめ我儕に其旨の奥義を意のまゝに示せりこれ自ら定め給ひし所なり

即ち期の滿るときに至りて或は天に在あるひは地にある萬物をキリストに歸せしめんが爲に定め給ひし所なり萬事を其意のまゝに行ふ者おのれの旨に循ひて預じめ我儕を定めキリストに在て嗣子と爲ことを得しむこれ前にキリストを頌める我儕をして彼の榮の讃美らるゝ事を爲しめんため也（以弗所書一章四節より十二節）これ教會を以て天の處にある政を執る者と權威を有る者に神の智慧を知しめん爲なり此は神世々の先より定め給ひし旨に循へる也この旨は我儕の主キリストイエスに由て成就せり（同三章十、十一節）彼我儕を救ひ聖召を以て召給へり是われらの行に由に非ず惟神おのが旨と世の成ざりし先よりキリストイエスの中に我儕に賜ひし恩惠に由なり（提摩太後書一章九節）キリスト世の基を置ざりし先に定られ此末時に顯はれ給へり（彼得前書一章二十節）神は世の始より其すべての所作を知たまへり（使徒行傳十五章十八節）

又間接に証明を與ふる箇所を擧ぐれば左の如し

（約百記二十三篇十三、四節。以賽亞書四十三章十三節。但以理書四章三十四、五節。耶利米書一章五節。羅馬書八章二十八節より三十節。哥林多前書二章七、八節を見よ）

又此事は凡の預言に含有せり

（約百記十四章五節。約翰傳六章三十七節。同十七章二節。路加傳二十二章二十二節。使徒行傳二章二十三節。同四章二十七、八節。同十七章二十六節を見る可し）

神の企圖は其自ら力を用ゆる所の事變のみならず義者と不義者とを問はず苟も其爲し得る凡の事變に及ぼせり神は先見を以て此等の事を知り又之に相當せる企圖あり而して其事をして遂に凡のもの、便益とならしむる爲に之を支配せらるゝなり但し神の自ら爲すこと或は義き人々を導て爲すこと、靈體物が其本心に逆ひ又神の導に逆ひ爲す所の惡事とは判然區劃を立てざるべからず原來此等のものは孰も其預定と企圖との中に含有せるものなり神は其聖旨に合ふ所の事變を預定し又凡の事變を知れり故に凡の事變は已に定りし而して凡そ事變は悉く神に由らざりき或部分は神に歸し或部分は神に逆ふ所のもの、自由なる所爲に歸せり其は神預め此所爲を知りしを以てなり彼是共に神意なりと雖も一は神の自動的預定に屬し（Active foreordination）一は其受動的預定に屬せり（Passive foreordination）此點は尙神の撰擇の論中に詳說す可し

第一問　左すれば神は罪の本原にあらざるか

神は强て罪を防ざるを以て此宇宙は將に罪惡の起らんとする傾向ある所なり而して神は其宇宙の本原なるのみ罪は即ち彼の迷ふたる靈體物を以て本原となすなり

第二問　神に祈禱することは無益にあらざるか

祈禱も應答も共にその企圖中に含有し在るなり此點は尙神の撰擇の論に詳說す可し

第三問　惡き者の所爲は神の企圖中に含有し在るか

然り前述する如く惡きもの、所爲と雖も其企圖中のものたり而かし神は其所爲の原因にあらず惡きものそれ自身は即ち己の不義の所爲の本原たるなり神は先見を以て此不義の所爲を知り且幾何の度まで放任して制限せざるか又何時に至て此等を束縛する乎てふことも亦企圖中に在りとす故に神は此の惡きものにても幾分かを之を己の器として其企圖を成就せらるゝなり（申命記二十八章四十九節。以賽亞書五章二十六節。同七章十七節より二十節。同十三章一節より五節及十七節同四十四章二十八節。同四十五章一節より四節。以上刺書一章一節より四節。耶利米五章十五、六節。同五十一章十一節。但以理書十一章十二節。哈巴谷書一章六節より

り十節を見る可し）

以上例中クロスの事を調ぶれば彼元來エホバなる神に忠實を致すの心なく惟己の名譽を欲するものにてありしと雖も神は即ち心を用ゐて己の器とし久しくバビロンに囚虜たりしユダヤ人を其鄉國に還しそれをして再びエルサレムを築き聖殿を建立せしめたり

第二章　罪之說

第一項　罪の定義

新約全書中を調査するに此罪に附き數種の言詞の用ゐられたるを發見す可し今原語卽ち「グリーキ」語の例を擧ぐれば左の如し

「ハマタノ」(Hamartano.)目的に外るゝの義なり

路加傳十五章十八節。羅馬書二章十二節。彼得後書二章四節。約翰壹書二章一節を見るべし

名詞にして「ハマシャ」(Hamartia.)

馬太傳一章二十一節。約翰傳一章二十九節。羅馬書四章七節。希伯來書一章三節。約翰壹書一章七節。同五章十七節を見るべし

「アノミヤ」(Anomia.) 律法を犯すことなり

約翰壹書三章四節を見るべし

「アデキヤ」(Adikia.)不義なり

羅馬書一章二十九節。約翰壹書一章九節。同五章十七節を見るべし

罪の意義如斯なることを知るときは獸畜に犯罪の跡なきことを斷言し得べし何んとなれば彼等は己の天性當然の目的に外るゝことなく又律法を犯すことなく不義を爲すことなければなり之に反して人間は其本心の動

を奉せず自己が由て以て榮ゆるの道に違ひ或は其爲す可きことを拋擲し却て爲すべからざる不義を行ふなど歷々として蔽ふ可らざるものあり

罪とは神の方より云へば神を離るゝことなり

羅馬書一章十八節以下三十二節。以結西二十章十六節。耶利米十六章十二節。約翰傳十四章十七節。羅馬書八章七節。哥林多前書二章十四五節を見る可し

人間の方より云へば私慾なり即ち自身を利益するとのみを大目的とし愛を己に厚ふして他に薄ふするを云ふ

羅馬書十五章五節。哥林多後書五章十五節。以弗所書二章三節。提摩太後書三章一、二節。路加傳六章三十二、三、四節。加拉太六章二節。腓立比書二章四節

人間當然の目的は忠實を致すの心を以て神を愛し神に愛せられ同類互に相愛し相扶け限りなく神と合同一致して發達するにあり然るに迷ふたる人間は全く此目的の外に出で只管自身を利益するとのみ是勉めて神をも人をも忘るゝに至る而して其着目する所專ら現世に止り重んずる所も此世の財寶快樂に在り貴む所も此世の權威名譽に存せり倘しそれ當然の分を守る人間に於ては神及び永遠無限の生命を貴重すべきものなりと雖も如何せん迷ふたる人間は惟だ自身及び此世のみに重を措けり故に彼等は此世の人たる價値の外神の人或は天國民の尊稱を有せず隨て其求むる所も世の田園金銀親族政治美術學藝等に過ぎず曾て神の國の爲め其榮の爲め一般人類の爲めに力を盡し心を盡して働くことをせず否思ひ及ばざるなり斯の如き私慾の顯現するものを大別して二種となす一は即ち肉慾に屬し一は即ち智慾に屬す其肉慾に現出するときは大に人間の價格を減殺せしめ殆んど獸畜と伍を共にするに至る智慾に現出する時は甚だしき傲慢自負の心を生じ愈々增長すれば「サタン」及び其使者と等きに至る可し之に由て之を見れば罪は肉慾及び智慾即ち傲慢より生出し來るものたり而して就中傲慢を最も危險なりとす何んとなれば肉慾に於て人皆之れあるを知り又之が支配する所となりて罪を犯すことを知ると雖も智慾即ち傲慢に至りては既に羽翼の成るに拘はらず或は尚ほ自ら思ひ知らずして益々强健を加ふるに至るも知る可からざればなり且つ肉体は罪を犯す際と雖も制限を加へて之を防ぎ肉慾をして飽くなきに至らしめず看よ肉慾に輸くるときは却て不快を感じ樂まざるにあらずや然るに智慾に至ては全く之と反對にて名譽にまれ權威財寶にまれ得る所あれば得るに隨て益々願望を强くし底止する所を知らず例令ば千金の家は更に萬金を望み既に之を得れば尚ほ百萬金を希ひ屠一屠何千萬金を積も未だ其心に滿足を覺へたる者一として有ることなきが如し權威を有する者も亦然りアレキサンダー大王は大方當時の世界を征服して其版圖に歸せしめ最早軍旅を起して發向する國土なきを見て長嘆流涕せりと又ナポレオン大帝は世界富强の中心たる歐洲の大半を服從せしめながら未だ滿足の色を示さず更に全歐洲を統一せんことを熱望して止まざりし既に隴を得て又蜀を望むは自然の勢なりとす

私慾は數多の形狀を呈し數多の結果を出すものなり

一、慾即ち自己の利を欲するの心

雅各書一章十四五節。同四章一、二及五節。加拉太五章十七節以下二十一節。以弗所二章一節以下三節。哥羅西書三章五節。彼得後書一章四節。約翰壹書二章十六節

二、貪婪即ち自己を歎ばさん爲めに供する力を欲するの心例令ば財產智識暴虐なる支配權及び多妻を有することと

約百記二十九章十八節。詩篇十篇三節。同三十篇六節。同三十九篇六節。同四十九篇十一節以下十八節。同五十二篇七節。同六十二篇十節。箴言一章十九節。同十三章七節。同二十八章八節十六節二十、二十二節。以賽亞書五章八節。同五十七章十三節。耶利米書六章十三節。以西結二十二章十二節。同三十三章三十一節。哈巴谷二章六節。馬太傳十三章二十二節。同二十二章五節。路加傳十二章十五節。以弗所書五章三節。腓立比書三章十九節。哥羅西書三章二、五、六節。提摩太前書六章九、十、十一、十七節。提摩太後書三章二節。希伯來書十三章五節。雅各書四章十三節以下十七節。同五章一、二、三節。彼得後書二章三節。約翰壹書二章十五節を見る可し

アカンのこと、約書亞記七章二十一節。アハブのこと、列王紀畧上二十一章二節以下十六節。ゲハジのこと、列王紀畧下五章二十節以下二十七節。シモンのこと、使徒行傳八章十八節以下二十三節。バラムのこと、彼得後書二章十五節。

三、傲慢即ち外部に在ては財寶爵位官職より生ずる傲慢内部に在ては智慧智職或は養德の長者と自信するより生ずる傲慢なりとす

利未記二十六章十九節。申命記八章十三節以下十七節。詩篇十篇二節。同十二篇三、四節。同四十九篇十一節。同五十二篇七節。同七十三篇六節。同百一篇五節。箴言十五章五節及十二節。同十六章五節十八、十九節。同十七章十九節。同二十一章四節。以賽亞書二章十一節。同五章八節。同十章七、八節十四節以下十六節。耶利米書五十章三十一節。以西結書二十八章二、三節。阿巴底三、四節。哈巴谷二章四、五、九節。馬太傳二十三章八節以下十二節。馬可傳九章三十五節。同十二章三十八節。羅馬書一章二十二節三十節。同十二章三節以下十六節。哥林多後書十章五節。加拉太書六章三節。提摩太後書三章二節以下四節。默示錄三章十七節を見る可し

アロンとミリアムのこと、民數記略十二章一節以下十節。コラのこと、民數記畧十六章。テブカデヲザルのこと、但以理書四章三十節以下三十七節。ヘロデのこと。使徒行傳十二章二十一節以下二十三節。

四、不義即ち他人の利益を忘るゝの容易なること

何西書十二章七節。亞歷士書八章五節。馬太傳二章十六節

五、憎惡。仇恨忿怒妒忌刻薄不情神を憎むこと

申命記三十二章三十三節。詩篇十篇七節同六十四篇三節以下六節。同七十四篇二十節。箴言十章十二節。同二十一章十節。同三十章十四節。羅馬書一章二十節以下三十二節。加拉太書五章十九節以下二十一節。以弗所書四章三十一節。哥羅西書三章八節。提多書三章三節。彼得前書二章一節。約翰壹書二章九節。同三章十五節

六、愚なること

詩篇四十九篇十節以下十三節。箴言五章二十二、三節。以賽亞九章十七節。耶利米書四章二十二節。箴言三十章十二節

七、自ら欺くこと

創世記三章十三節。約百記二十九章十八節。詩篇十篇六節。同三十篇六節。箴言十二章十五、十八節。提摩太前書二章十四節。帖撒羅前書五章三節。馬太傳七章二十二節。羅馬書七章十一節。哥林多後書十一章十

四節。帖撒羅後書二章九節以下十二節。雅各書四章十三節以下十五節。默示錄十二章九節。同十三章十四節を見るべし

眞誠に自を愛すること、私慾とは全く相反せり私慾の人は何時も不滿足の念を脫する能はず何んとなれば彼等は俗に狐火と稱する光明を追捕せんとして走り冤中の色彩を掬せんとして走る兒童と一般のみ實に狐火冤彩の如き者を大目的として求むるが故に奔走周旋遂に得る能はざるなり又其物を求むるや所謂向見すの愚昧手段に出づるより却て其物を滅亡せしむると頑童が皷音の出所を求めんとして玩具を破却するが如き者なり

八、不安心

羅馬書七章十四節以下二十三節。約百記十五章二十節。以賽亞書四十八章二十二節。同五十七章二十、二十一節。羅馬書三章十六、七節。馬太傳十二章四十三節

九、奴隸の有樣

約翰傳八章三十四節。羅馬書六章十六、七節。哥林多後書三章十七節

十、假設の安心

路加傳十二章十六節以下二十二節。仝十七章二十八節以下三十節。以弗所書五章四節。帖撒羅前書五章六節。雅各書四章十三、四、五節。默示錄三章十七節

十一、心の曇れること——心の暗黑——罪は心を暗ませり

路加傳四章十八節。同十一章三十五節。約翰傳九章三十九節以下四十一節。哥林多後書四章四節。以弗所書四章十七節以下十九節。同五章十一節。哥羅西一章十三節。帖撒羅前書五章四節。提摩太前書四章一、二節。提多書一章十五節。撒母耳後書十二章一節以下十二節。箴言四章十九節。同八章三十六節。以亞賽書四十二章七節。同六十章二節を見る可し

十二、僞善者となること

是は外人より善良者と見られんことを希ふの心なり

詩篇五十篇十六節。同七十八篇三十六節。箴言二十一章二十七節。以賽亞書一章十三節以下十五節。同二十九章十三節以下十六節。同四十八章一節。同五十八章一節以下五節。耶利米書七章八節以下十節。以西結書二十章三十九節。米迦書三章十一節。馬太傳三章七節。同六章一節以下五節十六節。同七章五節二十一節以下二十三節。同二十三章一節以下七節及び二十三節以下三十三節。路加傳十一章四十二、三、四節五十二節。同十六章十五節。同二十章四十六、七節。提摩太前書四章二節。同後書三章五節十三節。提多書一章十六節。彼得後書二章二三節。猶太書十二、三節。使徒行傳五章一節以下十一節

十三、心の頑固になること

例之パロの如き或は以賽亞書六章九十節。同六十三章十節。箴言二十九章一節に記するが如し

又頑固なるときは遂に聖靈を瀆すの罪に陷り其極絕望を招くに至る可し

馬太傳十三章十四、五節。馬可傳三章二十八、九節。以弗所書四章三十節。帖撒羅書五章十九節。希伯來書六章四節以下六節約翰壹書五章十六節

斯る人は曾に外界の眞理に向て罪を犯すのみならず彼自身の本心に在る所の眞理即ち聖靈に逆へり故に此心は自ら頑固ならざるを得ざるなり

十四、苦惱

是は直接に罪より生ずるものにて其苦は次第に增加するに至る

撒母耳後書十一章十二節及び列王紀畧上十五章二十九、三十節を見るべし

良心は其犯罪を責めて假釋する所なし創世記四十二章二十一、二節の例を見るときは犯罪後二十年の星霜を經て尙ほ痛く良心の責むる所となれり

馬太傳十四章一、二節を見よ

神を懼るゝの心なり

羅馬書八章十五節。提摩太後書一章七節。雅各書二章十九節。創世記三章八節

其罪を屢々現世に罰せらるゝことあり

士師記一章七節。使徒行傳五章一節以下十一節。同十三章六節以下十二節

或はソドムゴモラの最後エルサレムの滅亡近世北米合衆國に於ける奴隷賣買に由て起れる內亂を以ての譬喩の類なり罪人は遂に望なく又神をも嫌ひ憎むに至る

耶利米書十七章九節。默示錄九章十九節以下二十一節及十六章二十一節を見る可し

來世に於て窮りなき苦痛を受くべきものとなる可し

馬太傳二十五章四十一節四十六節

今全体の罪につき評論すれば罪に輕重の差故意不故意の別ありと知られたり

馬太傳十一節二十四節。同十二章三十四節。約翰傳十九章十一節を見よ且つ提摩太前書一章十三節。同四章一、二節を較べ彼得後書三章三節。雅各書五章四節。馬太傳十二章三十一、二節を見るべし

罪人の心事を觀察すれば當に神に忠實を致すべくして却て之に反逆することゝなり廣益を計るの精神に代て私慾に汲々し仁愛の情を翻して憎惡を事とし平和は去て不安心となり歡樂は變じて悲歎となり希望は失せて絕望となり順逆轉倒是非所を異にするの有樣とはなれりグリーキの遺傳說に曰くヘルクリズ(Hercules.)の妻デジニーラ(Dejanira.)は嫉妬の餘り衣服一領を製し之に毒蛇の惡液を浸し以て其夫に贈れりヘルクリスは斯くとも知らず着服すれば忽ち毒氣の襲ふ所となり急ぎ脫却せんとしたれども最早皮肉を透して骨髓に徹し看る〳〵腐朽に歸せりとぞ罪の人心に於ける恰も斯の蛇毒の如し一たび觸れば益々猖獗を逞ふするに至る可し

第二項　何をか罪と稱するや

善惡を辨識する能力を有するものが其爲すべきを識りながら自由に惡を擇み或は善を擇ばずして働くことは即ち罪なりとす神の支配說中道德上に關する所論を見るべし

彼の思はざること知らざること或は壓制せられて爲すこと及び機械的の動作は共に罪と稱せず惟だ自己自ら爲す所の働のみ其罪なりとす故に善惡を辨識する能力を有せざるもの、擧動を罪せず又惡と知らずして爲す事は罪の限りにあらずと雖ども若し詮索せざるより不良の行爲あれば其詮索せざる所以を罪と爲すなり

一目　此說は能く道理に合當せり罪は聖書中固く禁止する所なるが其罪は必ず或働に附きて名稱するの辭たり又罪は必ず咎を受くべきものなるに拘はらず元來働なければ決して之を感せざるなり又罪は後悔して止ることを得べしと雖も元來其働なければ之を爲すことも得ざるなり

二目　此說は本心の働の理に合當せり吾人の本心は罪に於て鋭敏なりと雖も自ら爲したることの外は咎むることをせざるにあらずや

三目　此說は聖書の趣なり

一、聖書中罪に附き用ゆる所の言詞は皆働の辭即働詞たり又罪の動詞に於ては悉く自動詞にして他動詞に用ゐたる所なし例之ば

惡を爲す。馬太傳七章二十三節。罪を犯す。約翰壹書三章四節八節の類なり

二、聖書に於ては凡て罪につきての命令は善惡を辨識する能力を有するもの丶自由の働に對して云々せり

悔改めよ。馬可傳一章十五節。起よ。以弗所書五章十四節。信せよ。約翰傳一章十二節。歸れ。以西結書三十三章十一節。神を愛す可し。馬太傳二十二章三十七節。耐忍びて馳場を趨れ。希伯來書十二章一節。目を醒且つ祈れ。馬太傳二十六章四十一節

三、人間の責任は惟だ其働に限ることは聖書の趣なり

馬太傳二十五章三十四節以下四十六節。約翰傳五章二十九節。羅馬書二章十三節を見るべし

四、人間の責任は惟だ自己の働のみに由れり

申命記二十四章十六節。例王紀畧下十四章十六節。歷代志略下二十五章四節。以西結十八章十九、二十節。加拉太六章五節七節を見るべし

五、人間の責任は惟だ爲すべきことを識りて或は爲し或は爲さゞることに限れり

僕主人の心を知ながら預備せず亦その心に從ざる者は扑るゝこと多らん知ずして扑べき事を作し者は扑るゝ事も少からん多く予らるゝ者は多く求らるべし多く托れば之より多く求べし。路加傳十二章四十七、八節。イエス彼等に曰けるは爾曹もし瞽ならば罪なかるべし然ど今われら見と言しに因て爾曹の罪は存れり。約翰傳九章四十一節。我もし來て語ざりしならば彼等罪なからん然ど今は其罪いひひらく可やうなし我もし他の人の行はざりし事を彼等の中に行はざりしならば彼等罪なからん然ど我と吾父とを已に見かつ之を惡めり。約翰傳十五章二十二節二十四節。それ人の見ことを得ざる神の永能と其神性とは造られたる物により創世より以來さとり得て明かに見べし是故に人々推諉べきやうなし既に神を知て尙これを神と崇めず亦謝することをせず反て其思を亂し其愚なる心蒙昧なれり。羅馬書一章二十、二十一章。凡て此等を行ふ者は死罪に當るべき神の判定を知てなほ自ら行ふのみならず亦これを行ふ者をも喜べり。同三十二節。是故に律法の行に由て神の前に義と爲るもの一人だに有ことなし蓋律法に由て罪は知る也。同三章二十節。そは怒を來するものは律法なり律法なくば犯すことも有なし。同四章十五節。律法を立られし時より前に罪は世に有き律法なくば罪は人に歸することなし。同五章十三節。凡そ律法なくして罪を犯せる人は律法なくして亡び律法ありて罪を犯せる人は律法に照て審判を受べし神の前に義と爲るゝは律法をきく者に非ず義と爲るゝは律法を守る者なりそれ律法なきの異邦人もし本性のまゝ律法に載たる所を守らば律法なしと雖も己の律法たる也彼等その心に銘されたる律法の工を表彰し其良心これが証をなして其思念たがひに或は貶あるひは褒ることを爲りそれ審判は我が福音に云る如く神イエスキリストをもて人の隱微たる事を鞫かん日に成べし。同二章十二節以下十六節われ昔は謗讟たるもの窘迫たるもの狎侮たる者なりしが我信せざるとき知ずして之を行へる故になほ矜恤を受たり。提摩太前書一章十三節。人善を行ふ事を知て之を行は

ざるは罪なり。雅各書四章十七節

第三項　人間の罪の實際なること

第一條　罪は人間の有樣なり

日本の說話に曰く帶刀するときは自然之を拔かんと欲するの念を生ずとそれ斯の如く兎角人間は惡を爲すことに赴き易きものなり

證據

一目　經驗上よりするも人皆自ら其傾向ありと心に感せざるものなし

二目　人間社會を觀察し來れば罪惡を防ぐ方法の夥多なるを知るべし即ち刑法刑罰々金の如き或は戶締を爲すが如し而して尙は常に不充分なるを告ぐるにあらずや其れ如斯は如何なる時代何如なる人種如何なる邦土如何なる文明國と雖も同樣なりとす又諸種の宗敎の訓誡禮式挽回の供物等は一般人類の罪を證明するに足るものありとす

三目　聖書より擧證す

創世記六章十一、二節。同八章二十一節。詩篇十四篇一、二、三節。傳道書八章十一節。耶利米書十七章九節。米迦書七章二、三、四節。約翰傳三章三節以下五節。羅馬書三章十節以下二十節。同五章十二節。以弗所書二章一節以下五節

第二條　此傾向は人間一般生れながらに有するものと見へたり

一目　此傾向は生れながらにして然りと知らるゝ徵候あり即ち人類を一貫して普通なり而かも夙に之を現すものにて誕生後性質が變化する爲めに生ずるが如きにあらず自然的に起り來りて防ぐに術なく又必然起るべきものと豫め知らるゝなり

二目　聖書より擧證す

創世記五章三節。詩篇五十一篇五節。約翰傳三章六節。同八章四十四節。羅馬書五章十二節以下十四節。哥林多前書十五章二十一、二節。以弗所書二章三節を見るべし

第一問　此傾向は罪なるか

答　此傾向は罪にあらずと雖も之に負くるに至ては罪なりとす故に此傾向は唯だ犯罪の機會たるのみ

第二問　迷ふたる人間の性は全く惡なるか

答　否全く惡なるにあらず美なる人情々愛及び本心は其一般に有する所なり馬可傳十章十七節以下二十二節を見る可し但し兎角私慾に從ふの癖習あり嗜好に負くるの傾向あり而かして天下滔々の人常に其本心の勸告に違背し智慾或は肉慾の牽引する所となり首たる斯心は位を貶せられて殆んど塵埃の有樣を呈し迷ふたる人間の常として神より離れたる生涯を送るものなり

(一)

本心
智慧
肉慾

(二)

肉慾
智慧
本心

(三)

智慧
肉慾
本心

此圖する所に付て云へば第一は當然の分を守りて迷はざる人間を示せり斯る人は肉慾は智慧の下に服從し而して本心は此等二者の上に立て之を照し之を導き又支配するものたり、第二圖は迷ふたる人間を示せり斯る人は肉慾首位を占めて智慧に逆ひ又本心は降されて下層となるなり、第三圖は學問を貴重すと雖も本心を我が首位に置かざる者なり斯く一旦迷ふたる人間を救ひ如何にして原の有樣に立還らしむ可きかとの問題はど實地肝要なるは有ることなし之を行ふには即ち本心を我首位に置き又神と一致して其聖旨に歡で服從するにあるなり

第四項　罪を犯す傾向の原因

此傾向は幾分か始祖の罪に係はると雖も果して如何なる關係を有するか聖書之を明記せず

創世記五章三節。同八章二十一節。路加傳一章三十五節。約翰傳三章六節。羅馬書五章十二節以下十五節。哥林多前書七十四節。以弗所書二章三節を見るべし

此問題に付ては大なる論議起り諸說尙ほ今日に及べり

第一說人間は皆アダムに於て罪を犯せしとのこと此說中更に種々の細說あり例へば人間は皆アダムの中に於て知らずして其罪を犯せしなりと右の論者は希伯來書七章九十兩節（また十分の一を受る所のレビもアブラハムによりて十分の一を輸たりと言べし蓋メルキセデクが彼に遇るときレビも其父の腰に在ばなり）を引來りて論証するなり而し此所にレビは先祖アブラハムの腰に在て十分の一を輸しと云はず譬て言へば左樣になせしとの意味に見るを可とす又曰くアダムは吾人の代人たる場合に於て罪を犯せしなれば神は其罪を吾人に負せしむることは當然なりと以上第一說は全く前述せる所の罪の定義に違背せり吾人はアダムに於てもアダムに由りても罪を犯すこと能はず又神はアダムの罪を吾人に負せしむべき筈なし以西結書十八章二十節を見よ

第二說此傾向は遺傳法によりアダムの罪の結果なりと是普通の說にて此癖習はアダムの時より先祖代々傳來したるものなりと云へり然れども亦非難の點なき能はず何んとなれば人間の一方にのみ對すれば此說甚だ力ありて幾分か眞理に近しと雖も必竟狹隘の見を免れず元來說の當否を知らんと欲せば其果して凡ての事實に適應するや否を考察すべし而して若し能く矛盾する所なくば即ち正確の說なりとす然るに第二說は天使初罪の原因に當らず況んや他に此罪の事變事實に應ふ所說のあるに於ておや

第三說罪の危きは始祖に幾分の關係を有すと雖も宇宙間各々の迷ひに付ては彼是同一の原因はあらざる歟そは卽ち自由なるもの丶性質の然らしむる所にあらざるか氣儘氣隨の生活を希ふ心はあらざるか而して其傾向は唯だ善き動機と敎訓とに由らざれば防ぐこと能はざるなり始の天使も始の人間も其自由性の爲に犯罪の始末に至れりと謂はざる可からず小兒も一般に罪を犯すことは幾分か此理由に因らずんばあらず但し小兒は聖なる祖先より生來らず完全のものの中に成育せず皆迷易き境遇に居るを以て自身も極て迷易しと雖も縱令小兒は聖なる親より生れ且つ聖なるもの丶中に成育すとも必ずしも皆な迷ふことなく聖なる者となるや否やは未だ容易に斷言すべきにあらず若し小兒は幸に斯る好境遇に生れ育てらる丶を得るとせば大方は大抵氣儘氣隨の癖習に負けず迷ふことなき者となるやも計られず又もし德性を有する者が目今更に神の聖側に創造せらる丶とせば其者は直に罪の景況及び慘憺たる結果を見聞する事に由りて遂に一たびも罪に負けず聖なる者と

なる可し善良なる信徒の子女も幼時より兩親の祐導と教訓とを受け又聖靈に祐導せられて夙に基督を信じ正道を行ふ者となるなり故に第二說に加ふるに本說を以てせば始て正當の定說を得たりと信認せらるゝなり左すれば始めの天使中或部分は己の自由性を濫用して自儘勝手を行んと欲する心より犯罪に至り吾人の始祖アダムエバも同一に自由性を濫用し又惡靈の導く所となりて犯罪せるなり今日の小兒も亦趣を等ふし自由性を善からぬ方に用ゐて氣儘を慕ふ心より又惡き導者に誘るゝより祖先遺傳の傾向よりして罪を犯すに至るなり小兒の靈魂は如何にして造らるゝか

答　之につきて三說あり左の如し

一、此靈魂は皆前の世界に存在せしなり (Preexistence)

二、神は各々の小兒の生るゝと同時に靈魂を造り之を附與せり (Creationism)

三、父母は肉體をも靈魂をも合せて生むものなり (Traducianism)

以上の諸說を批評せんに第一說に就ては聖書中に更に證據する所なく又人間一般の有樣に就て調査するに人の子女たる者その性質智慧人情等甚だ父母に類似するものたり又第二說に就ても聖書中神は彼の如く父母に由らずして靈魂を造り其肉體に附與するの證據を發見する能はず且つ親子性質の親密なる關係の如きは此所說に違背せり又第三說に就ても若し神の助力に由ることなく肉體も靈魂をも專ら父母の生むものとせば大なる誤謬なり苟も神の扶助あるなければ父母は決して子女の身體すら生むこと能はず況して此高尚なる靈魂を生むことを得べけんや故に第三說に第二說を加へ之を合して考ふるとき始て眞說を得たりと謂ふ可し人の父母は實に神の器として子女を擧ぐるに過ぎず即ち其體も靈魂も共に神により成立ところのものなり

第五項　罪と神との關係

聖書を調査するとも此問題に付ては僅に其一班を窺ふに過ぎざれば之につき彼是論ずることは想像的の論法なり神の德性を見れば彼は決して罪の本原にあらず而し神は强て罪を防ぐことを爲さずと見へたり

第一說に曰く神は靈體物の敎育の爲に罪の存在を許容すと若し本說に從へば犯罪者は遂に悉く悔改めて救を完ふすと信ずるなり又罪なるものは敎育上是非とも缺ぐべからざる必要の機械とすることなるが是は全く基督の敎旨に違背せるを以て正當の說と謂ふ可からず本說を主張するものは概して皆聖書を神の眞理と信せざるの輩なり

第二說に曰く神は罪を防ぐ能力なしと此說又分れて二となる一は如何なる世界に於ても善惡を辨識するものゝ中に罪を防ぐ能力を有せずと云ひ一は神は今日の世界に於て自由性及び德性を有するものゝ中に罪を防ぐの能力なしと云ふ然れども神の完全なる能力に於て斯く能と云ひ不能と云ふ制限のある可き筈なし是本說の非難を避くる能はざる點なりとす

第三說に曰く神は罪を防ぐの能力を有すと雖も尙ほ之を防がざるは其防がざるを以て凡ての者の裨益となるに由り敢て之を行はざるなりと凡て爲し能ふ事は必ずしも爲す可きものにあらず例へば我同志社の中常に此問題に遭遇するにあらずや生徒は幾分か校則を犯すことを爲せり同志社は嚴重に之を遵奉せしむるの權威ありと雖も或點に付て權威を用ゐざるは利益なりと思はるゝことあり先づ綏嚴孰れの所置が果して全校の利となり又不利となるかを計考するときは或點に於ては權威を以て遵奉せしむるが益となり或點に於ては幾分の

犯則あるも迫らざるを以て却て益なりと思はるゝことあり

第一問　罪は一般の靈體物の益となる可きものなりや

答　然らず而かし罪を防がざることは凡てのもの、益となるなり

第二問　神は清潔なることよりも罪を好まるゝか

答　然らず神は罪を嫌惡すること最も劇しと雖も強て罪を防ぎ之を除去するよりも寧ろ神は此罪の存在せる宇宙を好しとせらるゝなり

第三問　神の樂は罪の爲め減少す可きか

答　然り左れども神及び一般のもの、樂は罪を防がぬことに由りて却て多きを致すべし故に罪を許すことは強て防ぐに勝るものなり

第四問　罪を防ぐよりも防がざるを以て何故益となすか

答　固より確乎たることを知るに由なしと雖も神の斯く爲す所以を見れば其益たると明白なり神には罪を防ぐの能力あり罪なき宇宙を造る能力あり又今日の宇宙に於ても罪の侵入せざる可く爲すの能力をも有するならん而かし神もし斯く爲すときには一般の靈體物の樂に減少を來すの患は無きか蓋は大方罪を犯す能力即ち罪を犯し能ふ性質は靈體物の最も高尚にして切要なる能力なれば若し之を除絶し或は稀少にすれば爲に人間の快樂は甚だ僅々となる可し元來自由の能力を有する者にあらざるよりは快樂を得ること能はざるなり爰に一例を設て言へば吾儕金物の商店に就て二小刀を購求せんとするに數十種陳列せる及物中唯だ一個のみ我心に適ふ所のもの在り然るに惜む可きは之に一點の銹を印せり斯る場合には如何になすべきや他の心に滿たざる物を以て之に換ふるか或は一點の銹を忍んで之を購ふべきか而し或人問て曰く若し刀物師ならば何故己の心の必要に應じ相當更に遺憾なきものを造らざるやと左れども若し最上等の鋼鐵は兎角銹を生じ易きものにてあらば如何之を措て第二三性に屬する鋼鐵を採用して刀刃と爲すべきか或は銹の生ずる危險あるも寧ろ最上等を以て造るべきか神の靈体物を創造するや二等以下に屬する物を好まず最上等の靈体物卽ち自由性も德性も共に完全なるものを嘉し其性質を採用して之を造りたるなり其れ如斯德性及び自由性を附與して造るに於ては此中幾分か罪てふ銹の生じ來ることは知りつゝ之を撰擇したるなり

第五問　神は惡を造りたるか

答　是は道理の許さゞる所なり完全の聖者が惡を造るべき謂れなし又惡てふものは名詞にあらず形容詞なり受造物の働を除き他に廣き宇宙間に曾て惡てふ分子の存在なく又善てふものも在ると無し故に靈体物其ものゝ働を除きては善惡共に存在す可きものにあらざるなり又諸惡の名稱を査ぶるも同樣なりとす例へば姦淫、凶殺、竊盜、貪婪、詐欺、傲慢、怨恨、嫉妬、忿怒等の如し苟も其働を除て一として存在するものなし故にもし其働終りなば此等のものは盡く失せて唯だ過去に屬する名稱たるに過ぎず聖書の言ふ所亦斯の如し

馬太傳十五章十九節。馬可傳七章二十一節以下二十三節を見る可し

神は決して惡を爲さず又惡きことを爲さしめんと靈體物を扶助せざるなり

神又夢に之に言たまひけるは然り我汝が全き心をもて之をなせるを知りたれば我も汝を阻めて罪を我に犯さしめざりき彼に觸るを容ざりしは是がためなり。創世記二十章六節。神夜の夢にスリア人ラバンに臨みて汝愼みて善も惡もヤコブに道なかれと之に告たまへり。同三十一章二十四節ルベンまた彼らにいひける

は血をながすなかれ之を曠野の此阱に投いれて手を之につくるなかれと是は之を彼等の手よりすくひいだして父に歸んとてなりき。同三十七章二十二節。ダビデアビカルにいふ今日汝をつかはして我をむかへしめたまふイスラエルの神エホバは頌美べきかなまた汝の智惠はほむべきかな又汝はほむべきかな汝今日わがきたりて血をながし自ら仇をむくゆるを止めたりわが汝を害するを阻めたまひしイスラエルの神エホバは生く誠とにもし汝いそぎて我を來り迎ずば必ず翌朝までにナバルの所にひとりの男ものこらざりしならんと。撒母耳前書二十五章三十二節以下三十四節。汝は目淸くして肯て惡を觀たまはざる者肯て不義を視たまはざる者なるに何ゆゑ邪曲の者を視すて置たまふや惡き者の己にまさりて義き者を呑噬ふに何ゆゑ汝默し居たまふや。哈巴谷書一章十三節。誘るゝ者は神われを惡に誘ふと言なかれ神は惡に誘れず亦人をも惡に誘ひ給はず人惡に誘るゝは己の慾に引れて誘はるゝ也。雅各書一章十三、四節然ど上よりの智慧は第一に潔く次に平和寛容柔順かつ矜恤と善果みち人を偏視ず亦僞なきもの也。同三章十七節。神は光なり少の暗處なし此は我儕彼より聞て亦なんぢらに傳る告なり。約翰第一書一章五節。凡そ世に在もの即ち肉體の慾眼目の慾また勢より起る驕傲これらは皆父より出るに非ず世より出るもの也。同二章十六節

以賽亞書四十五章七節に曰くわれは光をつくり又くらきを創造すわれは平和をつくりまた禍害を創造す我はエホバなり我すべてこれらの事をなすなりと此禍害は形體上の禍害を指せるなり左の引照と比ぶ可し

以賽亞書三十一章二節。耶利米書十八章八節。同二十四章二、三節。同二十七章十四節

神は前述する如く惡を許し前以て其惡業を知り之を己の企圖中に含有すと雖も肯て之を行はしめんと扶助をも祐導をも與ふることをせざるなり但し此等の惡業は遂に悉く己の榮光となり多くのものゝ稗益とならしむべく誘らるゝなり

實に人のいかりは汝をほむべし怒のあまりは汝おのれの帶としたまはん。詩篇七十六篇十節。イエス答けるは此人の罪に非ず亦その二親の罪にも非ず彼に由て神の作爲の顯れんため也。約翰傳九章三節。イエスこれを聞て曰けるは此は死る病に非ず神の榮の爲なり神の子をして之に因て榮を得しめんが爲なり。同十一章四節。此人は即ち神の定し旨と預め知たまふ所に應て解さる爾等は無法の手をもて之を捕へ十字架に釘て殺せり。使徒行傳二章二十三節それ誠にヘロデとポンテヲピラト異邦人およびイスラエルの民相共に此城に集り爾が膏を沃たる聖僕イエスに逆へりこれ爾の手なんぢの旨にて預じめ定め給ひし事を彼等は成るなり。同四章二十七、八節。聖書の中に神パロに我なんぢを立るは特に爾をもて我が權能を顯し又わが名を偏く世界に傳んが爲なりと示し給へり。羅馬書九章十七節

吾人もし神を信じ其恩惠を得ば如何なる誘惑如何なる艱難辛苦に遭遇するとも却て其事は神の榮となり自己の益となるに至るべし

汝記念べし汝の神エホバこの四十年の間汝をして曠野の路に歩ましめたまへり是汝を苦しめて汝を試驗み汝の心の如何なるか汝がその誡命を守るや否やを知んためなりき。申命記八章二節汝らの中に預言者あるひは夢者興りて徵證と奇蹟を汝に見し汝に告て我らは今より汝と我とが是まで識らざりし他の神々に從がひて之に事へんと言ことあらんにその徵證または奇蹟これが言ごとく成とも汝その預言者または夢者の言に聽したがふ勿れ其は汝等の神エホバ汝らが心を盡し精神を盡して汝らの神エホバを愛するや否やを知んとて斯なんぢらを試みたまふなればなり。同十三章一、二、三節。困苦にあひたりしは我によきことなり

此によりて我なんぢの律法をまなび得たり。詩篇百十九篇七十一節。第これ耳ならず患難にも欣喜をなせり。蓋患難は忍耐を生じ忍耐は練達を生じ練達は希望を生じ希望は羞を來らせるを知るこは我儕に賜ふ所の聖靈に由て神の愛われらの心に灌漑ばなり。羅馬書五章三、四、五節。また凡の事は神の旨て依て召れたる神を愛する者の爲に悉く動きて益をなすを我儕は知り。同八章二十八節爾曹が遇し試惑は人の常ならざるなし神は信なり爾曹を耐忍ぶこと能ざる試惑に遇せじ爾曹が其試惑を耐忍ことを得ん爲に其にそへて逃るべき途を備へ給ふべし。哥林多前書十章十三節凡の懲治今は悅ばしからず反て悲と意はる然ど後これに由て鍛錬する者には義の平康なる果を結ばせり。希伯來書十二章十一節。わが兄弟よ若なんぢら各樣の試誘に遇ば之を喜ぶべき事とすべし蓋なんぢらの受る信仰の試みは爾曹をして忍耐を生せしむると知ばなり。雅各書一章二、三節。忍て試誘を受る者は福なり蓋こゝろみを經て善とせらるゝ時は生命の冠を受べければ也この冠は主己を愛する者に約束し給ひし所のもの也。同章十二節

第三章　救拯

人間の救拯之を分て二つと爲す、一は客觀的にして基督の勳功、即人間の罪を贖ひ給ひしに因り、他は主觀的にして聖靈の感動、即人間の靈魂の再生するに因る。今先づ客觀的救拯に就て研究する所あらん

第一綱　基督の性質を論ず

第一條　基督は完き人間なり

一目　其肉體上より云へば基督は實に全く人間なり即其母が奇跡に由て懷胎せしと云ふ一點の外は、彼は通常の人間と一般生れて嬰兒なりき、而して身體强健、精神活潑に漸を逐ふて成長し給ひたり（太一〇十六及二十五、路一〇三十一及三十五、十一、路二〇五至七、及十二、五十二）又彼は人間の如く飢へも渴きもし給ひ（太四〇二、全廿一〇十八、約四〇六、全十九〇廿八）人間の如く疲勞もし、睡眠をも要せられ（太八〇二十四、可四〇廿八約四〇六）而して其疲れたる時に、天使よりの助を受けられたり（太四〇十一、路廿二〇四十三）

二目　基督の心意を査ぶるに其智慧に於ても感情意志に於ても又其本心に於ても凡て其心意の所現發作は通常の人間と敢て異ることなく又其心意は其肉體を以て自家の器械と爲して之れを運用したることも亦相同じ（太廿六〇三十八、路十九〇四十一、路二十二〇四十四約十〇廿五、全十一〇廿三、廿五、約十二〇二十七、羅八〇三、來二〇二十六）聖靈を爾の手に託く」と呼はりて息絶へたり又彼は時に、或は婦人の裔、或はアブラハムの裔ダビデの裔と稱へなる（創三〇十五、廿二〇十八、廿六〇四、廿八〇十四、約七〇四十二、使十三〇廿三、羅一〇三、加三〇十五、提後二〇八）彼は自己に就て自ら人の子と曰へること八十回に及べり尙且つ（可六〇三、約一〇十四、十九〇五、使二〇廿二、十七〇廿一、可前十五〇四十七、加四〇四、提前二〇五、約壹四〇二、）等を參照せば彼が完き人間なりしこと益明なる

に至るべし

以上の如くなれば基督は聖にして純全く無罪なりしことの外は通常の人間と毫も異なる所なしと云ふ可し（使三〇二十二、腓二〇七及八、來四〇十五、七〇二十六、七）然れども亦人間を遠く超絶したる所あり即ち

第二條　基督は完き神なり

基督の神たることは其教の基礎にして又根源なり基督が嘗て詔ひし如く教會は實に此磐の上に建つべかりしなり（太十六〇十八）然りと雖も今日は是れ異端奇説を衒ふの時にして人々自から其好む所を述べ或は基督の神たることを証するの論を輕視する者あり或は之を疑ひ、或は拒む者有り、是の故に余輩はこれより十分に基督の神性に就て講究論述せんと欲する也而して先づ基督の神性を默示の上より論じ神の化身して人間の中に顯現寄寓し給ふことは敢て不可思議のことにあらず却て迷ふたる人間を憐み之を助けて罪惡の中より救ひ出さんため特別の方法を採り給ひしこと至仁至愛の神に於て當に有る可きの事たるを論究せん而して一千八百餘年の前に猶太國に顯はれたるかのイエスキリストは實に上に述べたる如き救主なりしことを論究す可し

神が人間の他の要求に應じて備を爲せしことの事實は吾人に彼が罪人として人間の求むる處に應じ備を爲せしことを疑はざらしむ此人間が罪人として求むる處は人間要求中の最大なる者なり

測り知る可らざる人心の悲歎と助を求めて止まざるの叫聲と人間種族が之を逃れんとして古來力を盡くしたる處の事は罪より逃れんとして力を盡せし處のことに關したる者なり

大なる世界の宗教を視よ人間の宗教的本能は普遍にして人間が有する處の最強なる本能たり吾人は人間が助を求むるの切なることよりしてまた創造者の惠ある者なることよりして彼が人間を助くるの途は即ち此なりと云ふが如き斷定を下す能はず然れ共吾人は彼が或る方法に於て己を人に顯はして人を助くる處あることゝ彼が此を行ふに最も思慮あり又最も成効ある方法を以てすることゝは之を論じ能ふなり若し彼の此世に來り人間にあらはるゝ事或は彼の人間の如くなることゝ人間を助くるに最も成効あるの方法ならんには吾人は彼が此の如く行ふことを疑はざるなり

吾人はまた身體の不調子を回復するが爲に醫藥的外科的治療の備へられしことを見るなり植物界鑛物界は吾人の身體を治する處の要因（エーゼント）に充てり啻に之れのみならず吾人の身體其物も亦損じたるの骨は癒え疵を蒙むりたるの箇處は再び舊に復するが如き驚く可き再新の力を有せり神は心靈を包む處の身體の爲には治療恢復の法を備ふるも心靈其物の爲には之を備ふる處なきか

吾人はまた人間の困難悲歎に在るや互に救助し助力することあるを見る此働力（インポルス）や人間到る處に存し時として己の生を擲て人を救ふに至らしむ人は神に造られし者なるが故に人神の如き性質を有すとは是道理あるの言なり然らば吾人は神の人を救ふが爲に爲す處は人の同胞に對し爲す處よりも小なりと思考し能ふ乎

吾人はまた此の如き救世主を求むる一般の感情よりして人を助んが爲に神のあらはることを論じ得るなり此感情は凡て世界の宗教にあらはれたり日本の社寺は之を証し各時代に於る各邦民が罪の獻物は心に抱く處の同一なる要求を証するものなり

吾人が更に證とする處の者は今より一千九百年の前に當りて多くの國民が一般神なる救世者のあらはれんことを待望みしことなりグリースのソクラチスは天より遣はされし導者の後世遂に出現す可きことを預言した、

り救者を待望みしことは西部亞米利加古代「ピューブロス」人「ナバジョウ」人及びメキシコの「アステック」人中に發見せられたり吾人は爰に賢人の東よりユダヤに來りユダヤは猶太人の王と生れたる者を覓めたりとのことを誌されしを見出せりスーイトニスは羅馬帝ベスパジアンの傳四章に書して曰く當今（即ちキリスト降誕の時）ユダヤに起る處の一人全帝國を得るに至らんは是即ち免るべからざる處なりとの說東方の全地に流傳したり此說や古代風の者なれ共然れ共眞理なりとせられし處の說たりとジョセファスは吾人に告てキリストの時と其直後に於て此希望はユダヤ人中に甚だ熾なる者となり遂に人々此處に起り彼處にあらはれ我こそ爾が長く待望みたる天より送られし處の救世主なれと呼稱し人民を惑すことあるに至りたりと云へりジョセフアス氏「ユダヤ人の古代」三十卷四章十一節同六十八章六節ユダヤ人の戰爭二卷十三章四節五節を看よ

ユダヤ人の慈く可き歷史を包有する書を開けば吾人は一千五百年若くは二千年の間神幾回となく己を人にあらはし而して彼等を罪より救んが爲に神なる處の救世主を送らんことの約束を爲せしこと之が書中に誌されしを發見するなり吾人は其救世主の來る可き時と箇處と方法と其生涯と死の此書に於て預じめ詳細に告られしを發見するなり吾人は來らんとする救世主の贖罪の大事業を預示する儀式及獻物に付俊逸なる敎の組織を發見するなり次に吾人は新約書及他の當時の書に於て昔時の獻物と犧牲の實物たる神なる處の救世主來り彼に關する凡ての預言を全ふせしことの誌されしを發見するなり

吾人は彼の降誕や尋常の者に非ず而して彼が降誕の時神を讃美する處の天軍あらはれしことの誌されしを發見するなり此外また誌されたり此神なる處の救世主憐れなるガリラヤ小村の工匠の家にて輝やきわたりしと、彼三十歲となるに及び彼の周圍に十二の不學卑賤なる徒を集め三年間彼等と語り彼等と歩み多くの奇跡を行ひ其弟子に世間從來之ある處のものに優りたる敎理の組織を與へしこと然る時彼は彼を罪なき者と公言したる處の方伯によりて十字架上汚名の死に遞與されしと彼が架上に刑せられて死せし時に全地は震ひて暗黑となりしと磐裂け殿の幔裂け恰も舊約の儀式の完應せられしとの徵たりしが如くなりしと等誌されたり

吾人は更に三日の後此神なる處の者死より甦り墓より出來り彼を信せし處の者に幾回となく現はれ而して四十日の後彼等の前にて天に上りしことの誌されしを發見するなり

吾人はまた彼の弟子なる小群が其信仰と所敎とを其敎祖の神たることの上に置きまた彼が死より甦りし事實の上に置き彼の昇天後直に基督敎を說き基督敎を敎へ始めたることを發見するなり吾人は此弟子等が己の生命を以て彼等が敎ゆる處の眞理なるを印せんとし而して彼等の多くは基督敎を信ずるによりて死におかれしことを發見するなり吾人は此宗敎が三百年間抵抗の間に立ちて敎ゆる處ありしを見るなり幾百萬人の牢獄に投せられ死に遞與されしも然れ共三百年の後には之が羅馬帝國の宗敎たるに至りしを發見するなり而して此より後內には敎會の腐敗起り外には歐洲暗黑時代の迷信生じて大なる妨害に遭遇せしと雖ルーテルの改革によりて遂に試査の中より淸潔なる者と爲りて出で來り今日唯一の宗敎として世界に立ち他の宗敎は悉く消滅せんとするの時代に於て全世界に播布せんとせり

吾人は之が高尙なる敎育開化と消長を共にする唯一の宗敎なりしを認む吾人は之が古來野蠻の種族と邦民とを平和なる幸福の文明に高めたる唯一の宗敎なりしを認む世は未だ嘗て當世紀サンドウイチに於てフヰジーに於て他の幾百の嶋嶼に於てマダカスカルに於て、印度に於て亞弗利加に於て基督敎によりて働かれしが如き道德的變革の他宗敎によりて働かれしを見ざるなり

此の如き教理の組織が憐れなる無學の徒より若しくは其の卑賤なる弟子より來りしとは是れ能ふ可きの事なるか果して然らば吾人は其清潔なると勢力あるとを如何に説明す可きや此の如きは神の愛に付き兒子等を教ゆる處より助くる處あらんとして神子の降世せしよりも尚大なる不思議にあらずや此兒子等は罪に徘徊し此の如き救助者を求めたりしなり

ポーロなる人傑の歴史吾人は之を如何に説明す可きや基督教の敵だも尚彼が諸教會に送りたる書翰の中の長き者は眞正確實にして而して基督の死後三十年間内に書されし者なることを許せり基督の神なることを拒む處のものすらポーロに付ては稱言する處あり佛蘭西のレナン曰くポーロは罕なる處の材智を有し其高尚なる處の感念は罕なる幸福を受けしことをあらはせし處のものなりとドクトル、チャンニング曰くポーロの書翰は時に不意なる枝葉の議論と不明瞭の廉なきにあらずと雖眞正なる基督教を世にあらはす處のものとしては吾人は之を以て勢力を盡くし修正を盡くしたる處の著述が傳たへ能ふよりも尚は大なる者と思考せざるを得ずと

コルレージ曰く世に存する處の者にして最も深遠なるの著作は聖徒ポーロの羅馬人に送れる書なる可しと然れ共吾人はポーロの書を讀に及び彼が深く基督の神なることを信せしを知るなり彼は之を教へたり而して此事や基督の教の基礎なりとす

ポーロは神にのみ屬する處の稱號、性質及び事業を基督に歸與したり彼れ基督に付き語りて曰く「萬物の上に在て世々讃美を得べき處の神なる基督來り給へり」（ローマ書九〇五）、「肉体と爲りてあらはれし處の神」（テモテ前書三〇十六）、「審判の日凡の者其前に立ちまた凡ての膝其の前に屈まり凡の舌は讃美する處の神」（ローマ書十四〇十、十一、ピリピ書二〇十）「大なる神且我儕の救主」（テトス書二〇十三）、「ソレ神の充足る德は悉く形を爲して基督にすめり」（コロサイ書二〇九）、「神の体にて居りしかども自から其神と匹しくある處の事を棄難きこと、思はざりし處の者」、（ピリピ書二〇六）と吾人は第一世紀の基督教徒が基督を神として崇拜せしことの最も確實なる證據を有す有名の學者小プリニーは紀元一百三年ツラジャン帝の朝に小亞細亞ポントス州の知事（プロコンスル）に拜命したり彼二年間此職を奉せしが州中基督教徒の多數なること、之を罰するの方法に至りて甚だ惱みたり彼帝に書を送り書して曰く此州基督教の傳播甚だ迅速にして爲に異教從來の殿堂は荒敗に至らんとすされど之と共に書して曰く此等の基督教徒は共に會集し基督を神として之に讃美の歌をたゝふるの風を爲したりとプリニー氏書翰十章九十七節を見よ第三世紀グリースの哲學者ポルフィリーは吾人に告て曰く基督教徒は基督を神として拜したりと第四世紀の始初に於て世に名を著はすに至りし教派「エリヤン」の徒は基督の父なる神と同等なることを拒みたり然れ共教派の祖エライオスは左の信仰條を書したり曰く我は能はざる處なき神、見る可く又見る可らざるもの、造り主なる一人の神を信じまた神の道（ここは）神の神、光の光なる一人の主イエス、キリストを信ずと第二世紀の後半に於て小亞細亞及び埃及を旅行し盡したる處の哲學者ルシャン基督を評して曰くパレスチンに於て十字架に刑せられし處の大人なりと

吾人をして又基督教に付ては懐疑的なりし處の人も基督に付ては許さゞるを得ざる處ありしことを知らしめよ獨逸に於ては有名なる著述家レッシング云へるあり……此の如くして基督は靈魂の不滅に付最始の信す可き、實際の教師爲りさとシェウエルリングも亦云り基督の降臨は世界歴史の決着點（トルニングポイント）たりしと又云へりイエス、キリストは無限の説話（デスコールス）、活る道（ここは）なりと無神哲學者フィヒテー曰く天上の道義を人々の心と家土に來

たせしことに於て基督の爲せし處は他の哲學者の爲せし悉てよりも大なり世の終迄凡て感情を有する處の者は此ナザレのイエスの前に跪づき凡ての者は心を卑くして此大現像の非常なる光榮を認むるに至らん彼に從ふ者是邦民たる可し子孫(ゼチレーシヨン)たる可しと

リッテルはイエスを呼で大なる者の最も潔き者潔き者の最も大なる者其の釘うたれたる手を以て諸帝國の地位を高め、歴史の水流を其舊渠より轉せしめ、今尚世を支配し世を導く處の者なりと云へりゴエテは曰く予は福音書の全篇を通じて其が純眞なるを尊信す蓋し此等福音書はイエス、キリストの人格より映發せる崇高偉大を反映し來りて赫耀たる光彩の輝き渡る者あり、其神々しきこと、神が曾て此地上に示現するを能くせし者唯り之れのみなるかと思はしむる程なればなり

スピノザは近世凡神論の父と呼ばるゝ處の者なり去れど彼基督に付ては左の如く云へり理想の基督即ち凡ての物に殊にイエス、キリストにあらはれたる神の無限の智識を知る此一事は是必至なり基督は神の智識の表號なりと

佛蘭西の哲學者ロウシユー、ソクラチスと基督を比較して曰くソクラチス若し哲學者の如くして生息し哲學者の如くして死したらば基督は神の如くして生息し神の如くして死したりと佛蘭西の大著述家レナン其身基督教徒に非すと雖曰へるあり「イエスは凡ての事に於て無類なり何物も彼に比較する能はず彼は非常なる見識(ヴイジヨン)の人、比較す可らざる處の人、運命の上に位する、嘆賞す可き處の者、即ち一般の人心が「神の子」なる稱號を與へし處の者なり」「彼の後には發達と成熟を要する處のこと無りき」「彼は無限の宗教の創造者なり嗚呼爾と神の間には最早差別なかる可きなり」レナンは基督生涯記なる書の終に於て此の如く云へり假令將來に於て慈く可き處の事件は何たるにもあれイエスは決して人の爲に超ゆらるゝことあらざる可し彼を拜することは絶えず生長するも、さらばとて老することあらず彼の奇譚は人々の涙を喚出して絶ゆる時なく彼の痛苦は俊れたる人の心を溶かすべく凡ての世は呼はりて人の子の中にイエスよりも大なる者生れしことあらずと云はんと

ナポレオン曰く淺薄なる心は基督と帝國建設者及び他宗教の神なる者の間に似點ありとや思ふ可けん然れ共此似點は之あるものにあらず我人を知れり我汝に告ぐイエス、キリストは人に非ずと

英國懐疑派の著者或は「ユニテリヤン」の著者に付ては吾人はダブリユー、アール、グレッジを引んとす彼基督に付云つて曰く余輩は彼を以て智識的或は哲學的心意の完全したる者と思考せず然れ共父と交通の親密なると深きことゝに於ては各時代の各人に優る處の者とし靈性的性質の完全したる者と思考す彼の言を讀に及び余輩は其思想を卑しき人間の言語にて包みたる、最賢く、最潔く、最貴き處の者と談話するの感あり彼の生涯を學ぶに及び余輩は地上に於て余輩にあらはれし處の最も高尚なる人物の迹を追ふの感ありと英國正理派の著者フランセス、バワー、ユッビー曰く此故に基督の性質に付き最も適當と見ゆるの觀察は彼を大なる人間社會の再新者と見做す者是なり彼の降世が人類の生命に於るは恰も再新が各個人の生命に於るが如し是人間種族の歴史より來る明々の議論なりとす世に變化あり而して其變化や史上其迹を探ぐれば基督に歸すと

トマス、カルライル曰く嗚呼ナザレのイエスは神の表號なるかな人間の思考せし處は彼の上に出でざりき彼は永久無限なる性の表號にして其意味や毎に新に研究せられんことを求め而して毎に新になりゆく處の者なりとロールドバイロン曰く若し人にして神たり又神にして人たる者あらばイエスは即ち二つながら是なる處

の者なりと歴史家フルウド曰く最も完全なる處の存在者にして此遊星の地を踐みし處の者は悲の子と呼ばれたり基督是なりと

吾人は以下の言を錄々たる北米合衆國「ユニテリヤン」派の神學者より引來らんとす同國「ユニテリヤン」教の父なる、ドクトルチャンニング曰く我汝に問ふイエスの性は史上最も驚く可き者にして人間の理を以て說去る能はざる處の者にあらずやと余彼を攷察するに敬虔の念を以てす此敬虔の念は余が神を仰ぎ瞰る時に生ずる嚴肅の念に次ぐ者なり彼が性は眞正の性なり神の愛子に屬する處の者にして又神の愛子たることをあらはす處の者たりイエスは造り事(フイクシヨン)にあらず彼は今も尙神の子たり世の救主たり而して余此驚く可きことを基督の奇蹟の證據と共に考ふる時は余は百人の長と共に誠に此は神の子なりと呼ばざるを得ざるなりと

ドクトルテユーイー曰くイエスは史上無意味の人物にあらず之を如何に考ふるも看過す可き處の者にあらず却て是人間の記錄中に於て最も著しきの人性(ポルソナーヂ)なり否彼は獨歩の地位に立てり彼は抽き出されて凡ての比較線外に在り寔に人々の思考せしが如く何人も彼に及ぶ能はず彼が一人屹然として立るの有樣は世の賢人學者等が欲せし處よりも大なりされ共此く有りき完全なる人物は此くの如く有りき此の如くして存在し世を支配す已に數多の世を支配したりと

ドクトルヘッジ曰くイエスに於るの外吾人人類の性質明白に其眞正の完全に達したる處あることなし而して彼なかりせば吾人は最高最深の度量と威勢に於る人類の性質は如何なる者なるかを知らざるなりと

前のハバルド大學總長ドクトル、ウオルカー曰く唯己の中保により即ち之を詳言すれば己の敎と痛苦により己の生涯と死により基督は人間を其造主より隔別する處の者と思考せられたりし律法及儀文の障害物を斷ち去り父に接するの途を開きたり其之を爲すや一回にして爲したり彼は新たなる且遙に高尙なる方法にて眞理と恩惠と心靈上の自由とを顯示し之によりて全世界に惠の座に入るの門を開らき益き給へり此門や何人も又如何なる人々の集合も閉ぢ能はざるの門なりと

ドクトル、ヒル曰く他事は措て之を論せざるも當世の宗教思想は此教師の聲によりて變革せられたりとす彼は獨歩の地位に立ち神に對する所見の明白なることに於ては他人の近寄る可らざる地位に立てり其智識の完滿なると確乎たることに於いて凡て他の教師に異なれりと同じく前のハバルト大學總長ドクトル、ピーボデー曰く汝如何にするもイエスを常人の地位に引下げ彼が時代の人と同樣ならしめ又は各時代の豪傑とすら同樣ならしむること能はざる可し彼が性質は史上唯一の性質にして世俗の比較を有せず第一世紀に於るが如く第十九世紀に於ても大人として仰ぎ見る可き處の者なり又彼が精神は人體を籍りしもの〻中にて最も力あるの精神なり彼の教へし處や凡て近世の文明と凡ての進歩と凡て慈善の事業の基たり俊秀なる人生哲學、社會哲學、商法哲學、政治哲學の原則は一として彼の福音より來らざるはなし而して此等の原則は之を改譯す可らず啻に之を改譯す可らざるのみならず之をして善良ならしめんとすれば無乃彼の唇より落し處の言葉を用ゆるを可とす彼は今も尙種類中の一として世にあらはれず彼自身にてなせる一種類として世にあらはれり單に比肩す可らざる者にあらずして近寄る可らざるものなり同種なる光輝中の最も輝ける者にあらずして其光に比せば凡の星は爲に光なき唯一の太陽なりと

ドクトルベルロー曰く「若し世に愚なる事ありとせば今日にして福音書を古びたる者と呼び基督を單に英名中の一と呼び基督教を迷信と呼ばんとすること是なり」「吾人を助くる善良なる執政者と權威を有する者の中

に凡ての執政者と權威を有する者の首ありて彼等の上に在り基督と基督教は即ち此執政者と權威を有する處の者にして其測り知る可らざる意味と價値は之を誇大に云ふ能はず而して之を嘆稱し之を崇むることは吾人にとりて最も禮義あり謙遜なるの所行となる處の者なり」と

ゼームス、フリーマン、クラーク曰く基督は人たるのみにあらずモーセとマリヤたるのみにあらず大なる宗教の才を有せし者たるのみにあらざりし處の者なり然らば人のイエスを呼て神と云ひ又神と云はんとすること豈驚く可きことなからんや寔に神の充ち足れる德は肉體をとりて彼にすめりと

二十餘年間「ユニテリヤン」宗派の牧師たりしフラシングハム氏は千八百八十三年四月中の北亞米利加評論雜誌上批評と基督教の關係と題する一篇に於て云へることあり曰く批評攻擊の所若くは其他如何なる點よりするも基督教にして衰廢せんとは到底想ひ得べからざることたるのみならず實に基督教の衰廢せんとは決して有り得べからざるのことにして蓋し之を問ふをすら要せざる所なりよし若し基督教に於て危險ありとせば其危險たる恐らくは却つて唯だ己れが利器の用法を知らざる基督教の辯護者に在るべく恰もかの性急なるペテロの如く劍を拔いて敢て毆擊を試み由つて一僕隷の耳を削ぐに止る者に在るべき歟然れども主は唯だ出るのみにして敵は地に仆れんと

以上に述べし處は基督の神なることを承認せざる處の人々より引來りし言なりとす

吾人は此等凡ての者を如何なる說にて說明す可きや爰に只一說あり此說や說明をあやまたずとす基督若し人たるのみなりしならば聖書や秘密なり基督教の始初や秘密なり基督教の進步、成功、勢力や亦悉く秘密なり是罪に苦しむ處の人類を助んが爲に神子の降世せしよりも尙大なるの奇蹟なりとすジョン、スチユアルト、ミル曰く彼の弟子の中若しくは弟子に敎へられて改宗せし者の中誰かイエスに歸されし處の言葉を發明し若しくは福音書にあらはされし彼の生涯或は性質を想像し能ふ者ありしやガリラヤの漁者は素より能はざりし也而して初代の基督教著者は更に能はざりしなりと

人類を助んが爲に此世に來り人と爲り彼等の爲に其命を棄してと何故人を造りし處の愛の神にとりて奇異の事なるや吾人は何ぞ寧ろ彼の降世し吾人を助けざるを怪しまざるや

吾人は元始の人類に與へられ而して數千年の間繰返へされたる彼が此世に來る可き約束を讀み又我は神より遣はされし處の者なりと稱し且之を稱せしが爲に遞附されし處の者來りしを見彼が宏く世上に流布せる宗教の基礎と爲り世に之ある處の者にして最も完全なる宗教の著者即ち彼の仇敵彼の神なることを承諾せざる處の者すら之が諸宗教中の最大なる者なることを許さゞるを得ざる處の者の著者と爲れるを見、世間一般の認識基督と彼の宗教は人間中の大勢力にして他の者の之に比較すべきにあらずと云ふを知るも吾人は尙基督神なるの說を定說として取り而して之によりて事實を研究することを爲さゞる乎

若し吾人にして基督神なるの說を取らば吾人は此說や凡ての困難を解明し實際の事實に適合するを知るなり彼にして神たらば吾人は彼が舊約の主意たりしを驚くに及ばざるなり彼の降誕が奇蹟にして且奇蹟の之に伴ひしを驚くに及ばざるなり彼が奇蹟を行ひし事を驚かざるなり彼の死に於て地を覆ひし處の闇黑を驚かざるなり吾人は寧ろ彼の降世と生涯と死に奇蹟の伴ふなかりしならば之をしも驚かんとするなり

若し彼にして神たりしならば彼の俊傑なる智と清潔は說明を得、無類なる彼の敎の勢力と結果は說明を得、基督敎は說明を得たりと云ふ可く又人間の最大なる要求は應せられたりとす神のみ之に應じ能ふ處の者なれ

ばなり此說や世に出し多の說の中にて獨り其事實を說明するに足るの說なりとす此說や充分事實を說明するに足れり故に基督を神なりとする此說を眞正の說とし此說によりて論議するは學理的なりと云はざるべからず基督敎徒の信仰は妄信にあらずして學理的の演繹なり基督を神として受入るゝ千百萬の人々は欺かれたる者にあらず彼等の信仰は學術か他の科(デパートメント)に於て與ふるが如き正確なる基礎によれるの信仰なり神性說を含いて他に此の心靈界の太陽たる基督に關する現象を解釋するものあらんや若し之を爲さんとせばこれ恰も我が太陽系の現象を解釋するに太陽中心の說を含いて地球中心の說を取るが如きに歸せん吾人は固より地球を以て我が太陽系の中心なりと假定し隨ふて其能く現象の幾分を解釋し得たりと想ひ得べし然れども一層深く一層廣く太陽系の現象を觀察せば其の解釋する能はざるもの殆んど百を以て數ふるに至る是に均しく吾人は基督を以て純然たる人類にして唯だ非常なる天稟を具有せしものなりと假定し隨ふて其能く基督に關する大問題の幾分を解釋し得たるが如きの想を爲し得るなり然れども一層深く一層廣く基督敎の現象を觀察するに及んでは其解釋する能はざるもの實に百數に止らざるを見る嗚呼全然たる一ヶの團体として基督敎の現象を解釋せんものは基督神性の說を含いて他に一も說あるを見ざるなり抑も基督は他より受け得たる光線によつて輝ける月球の如きものにあらず又た他の中心を旋りて回轉する惑星の如きものにあらず自ら大能力を保持せる体系の中心にして光と熱と力の淵源たる太陽の如きものなり總ゆる歷史の事實と總ゆる國民の擧動と總ゆる世界の情狀とは皆な悉く基督の身邊を旋つて回轉するなり是れ獨り世界の全局を說明するに足る唯一の說にして此の基督こそ即ち新約舊約全聖經の所謂基督吾人が要する所の救主たるなれ實に此の神性を具有する救主のみ獨り能く圓滿に又た永遠に吾人靈魂の渴望と必要とを充足し得べしとなす

左れば寧ろ心を開きて光に向ひ光を求め道理と良心と各時代の豪傑賢人の証明が吾人を導んとする處に從はざる吾人若し此の如くせば大敎師に來り彼を吾人の神なる救主として受るに至らん

斯く論じ來りて神の默示を開き、徐に之を考察すれば則ち基督の神たることを證するの證據は甚だ明快なる者也

第一目　聖書は基督に附するに神の聖名を以てせり、抑も舊約書に於ては、神の名は三類の語を以て記さるゝを見る。其第一類に在ては同語根より出でたるエル(El)、エラア(Elah)、エロア(Eloah)(以上皆單數の語格)及エロヒム(Elohim)(複數)なり。其エルは「力能(チカラ)ある者」と云ふ義にして大凡二百回用ゐられ、エラアは用ゐらるゝこと八十回エロアは六十回、而してエロヒムは大凡一千回の多きに及べり、此等の語は皆神、(God)と英譯さるゝ所の者なり

第二類はアドナイ(Adonai)(複數)にして凡一百四十回用ゐらる是の語は主、(Lord)と英譯さるゝ所のもの也

第三類はエホバ(Jehovah)にして、其意義は「絕對にして自在なる者」其用ゐらるゝこと凡五千回、此語は至尊至貴にして絕對なる神の聖名なるを以てユダヤ人は直に之を稱用することを憚り、常にアドナイ(主)と呼びたり、エホバは英譯して(LORD)と爲せり

舊約全書を按ずるにエロヒムなる語は、眞神の外、僞神、偶像等にも時々冠用せり、然れども其之を冠用するや常に附加するに他の形容の詞を以てせり例へば(出七〇一、二十二〇二十八、士十一〇二十四、詩八十二〇一及六)の如し然れども エホバなる語は曾て一度も之を被造物に冠せしめず併しながら屢々之をキリストに與へたるを見る、左の引照を交互比較すべし、則ち其然るを覺らん

（耶二十三〇五、六）エホバ言給ひけるは、視よ我れダビデに一の義き枝を起す日來らん、彼れ王となりて世を治め榮へ、公道と公義を正に行ふべし、其日ユダは救を得、イスラエルは安に居らん、其名はエホバ我儕の義と稱へらるべし

又（耶三十三〇十五、十六）其日其時に至らば我れダビデの爲に一の義き技を生せしめん、彼は公道と公義を地に行ふべし、其日ユダは救を得、エルサレムは安らかに居らん、其名はエホバ我儕の義と稱へらるべし

又（賽六〇一至十）ウジア王の死たる年我れ高くあがれる御座にエホバの坐し給ふを見しに其衣裾は殿にみちたり、セラピム其上に立つ、各々六の翼あり、其二を以て、面をおほひ、其二を以て足をおほひ、其二を以て飛翔り、たがひに呼言ひけるは聖哉聖哉聖哉萬軍のエホバ其榮光は全地にみつ、斯く呼はるもの丶聲によりて閾の基、搖動き、家の內に煙みちたり。此時我言へり、禍哉我亡びなん、我は穢れたる唇の民の中に住みて穢たる唇の者なるに我眼萬軍のエホバにまします王を見まつればなりと、爰にかのセラピムのひとり鉗をもて壇の上より取りたる熱炭を手に携へて我に飛び來り我口に觸れて言ひけるは、視よ此火爾の唇に觸れたれば既に爾の惡はのぞかれ、爾の罪は潔められたりと、我又エホバの聲をきく曰く、我誰を遣はさん、誰か我が爲めに往くべきかと、我言ひけるは我こゝに在り、我を遣したまへ、エホバ曰給はく往てこの民に斯くの如く告げよ爾曹聞てきけよ、然れど悟らざるべし、見てみよ、されど知らざるべしと、爾此民の心を鈍くし、其耳をものうくし、其眼をおほへ、恐らくは彼等其眼にて見、其耳にてきく、其心にて悟り、翻へりて醫さるゝことあらん

然るに（約十二〇三十七至四十一）に於ては

イエス彼等の前に如此多くの休徵を行したれども尙彼を信せざりき、此は預言者イザヤが言ひし言に我儕の告し言を信せし者は誰ぞや主の手は誰に顯はれしやと有るに應へり、イザヤ復言ふ、彼等目にて見、心にて悟り、改めて醫さるゝことを得ざらん爲に彼其目を瞽し其心を頑梗にせりと、此故に彼等信ずること能はず、イザヤは彼の榮を見しにより彼に就て如此は語れるなり

又（賽四十〇三至五）呼はる者の聲聞ゆ云く、爾曹野にてエホバの途を備へ、沙漠に我儕の神の大道を直くせよと、諸々の谷は高く、諸の山と岡とは低くせられ、曲りたるは直く、崎嶇は平易にせらるべし、斯くてエホバの榮光あらはれ人みな共に之を見ん、こはエホバの口より語り給へるなり

又（馬基三〇一）見よ我れわが使者を遣さん、かれ我面の前に道を備ん、又汝等が求むる所の主即ち汝等の悅樂ぶ契約の使者忽然其殿に來らん、視よ彼來らんと萬軍のエホバ曰ひ給ふ

然るに

（太三〇十）今や斧を樹の根に置る、故に凡て善果を結ばざる樹は斫れて火に投入らるべし

又（太十一〇十）夫れなんぢに先ちて道を備ふる我使者を我なんぢの前に遣んと錄されたるは即是なり

又（可一〇一至三）これ神の子イエスキリストの福音の始なり預言者の錄して、見よ我爾の面前に我使者を遣さん、彼爾の前に其道を設くべし。野に呼べる人の聲あり、云く、主の道を備へ其徑を直くせよと、有るが如し

右の諸引照に於て、例へば其以賽亞書にはエホバを指し、馬基書に神を指して云へる所、馬太及馬可は之を引來て基督に歸したり。又（太二十三〇三十七）にキリスト自ら一千五百年の間ユダヤ人を指導せしことを

述べ給ひしも、舊約書に徵して之を考ふるにユダヤ人を始終導き給ひしものはエホバなりし也

又（亞十二〇十）我ダビデの家及エルサレムの居民に恩惠と祈禱の靈をそゝがん、彼等は其刺たりし我を仰き觀、獨子のために哭くが如く、之が爲めに哭き、長子のために悲しむが如く之が爲めに痛く悲しまん

然るに（約十九〇三十三至三十七）に於ては

後にイエスに來りしに已に死たるを見て其脛を折ざりき一人の兵卒戈にて其脅を刺しければ直に血と水と流れ出たり、之を見し者證を立、其證は眞なり、彼又自ら言ところの眞なるを知る、爾曹をして信せしめんが爲めなり、この事成れり、錄して其骨の一をも摧ざるべしと有に應せん爲なり、又他の書に彼等の刺しものを彼等觀るべしと云へり

又（賽八〇十三、十四）なんぢ等は唯萬軍のエホバを聖として之を畏み、之を恐るべし然らばエホバはきよき避所となり給はん、然れどもイスラエルの兩の家には躓く石と成り、妨ぐる磐とならん、エルサレムの民には網罟となり機檻とならん

然るに（彼前二〇七、八）この石、信ずる爾曹には貴き物となり、信せざる者には工師に棄られて隅の首石となれる石となり又躓く石、礙くる岩となるなり、彼等は道を信せざるに因て之に躓く此は彼等かく定められたるなり

右引照に於て以賽亞書には萬軍のエホバに就て云へるをペテロは引來て之をキリストに歸したり

又（詩六十八〇十八）なんぢ高處にのぼり虜者をとりこにして率ゐ禮物を人の中よりも、叛逆者の中よりも受け給へりヤハの神こゝに住給はんが爲なり

然るに（弗四〇八至十）是故に云ること有りかれ上に昇りし時擄にする者を擄にし賜を人に給へりと、已に上に昇れりと謂へば先づ地の下に降りしに非ずや、降りし者は即ち諸々の天の上に昇りし者なり、彼萬の物に充たんとす

又（詩百二〇二十四至二十七）我云へり、願くは我神よ我がすべての日の半にて我を取り去り給ふ勿れ、汝の壽は世々限なし、汝古に地の基をすえ給へり、天も亦爾の手の工なり、此等は亡びん、去れど汝は恒に存らへ給はん、此等は皆衣の如く古びん、汝此等を袍の如く更たまはん、去れば彼等はかはらん、然れども汝は變ることなし、爾の齡は終らざる也

然るに（來一〇八至十二）其子に曰るは神よ爾の位は世々に及び、爾の國の杖は正き杖なり。爾義を愛し、惡を惡む是故に、神即ち爾の神は喜樂の膏を以て爾の侶よりも愈りて爾に沃り、又曰く主よ爾元始に地の基を奠く、天も爾が手の工なり此等は亡びん、然れど爾は恒に存ん、此等は凡て衣の如く舊びん。爾これらを袍の如く捲む又彼等は變らん然ど爾は變ることなし、爾の壽は終らざるなり

又（詩十六〇八至十一）我常にエホバを我前におけり、エホバ我右にいませば我れ動かさるゝことなかるべし、此故に我心はたのしみ、我榮は喜ぶ、我身も亦平安にをらん、そは汝我魂を陰府にすておき給はず、爾の聖者を墓の中に朽しめ給はざるべければなり、爾生命の道を我に示し給はん、爾の前には充足るよろこびあり、爾の右にはもろ〳〵の快樂永久にあり

然るに（使二〇廿三至廿八）此人は即ち神の定めし旨と、預め知り給ふ所に應ひて解さる、爾曹は無法の手をもて之を捕へ十字架に釘て殺せり、神は其死の苦を釋て之を甦らせ給へり、彼は死に繫がれ在るべき者

ならざれば也、蓋ダビデ彼に就て曰けるは我れわが前に主の常に在を見る、その我右に在は我が動かされざるためなり、是の故に我心は樂み我舌は喜べり、且我肉体は望に居らん、これ爾は我魂を陰府に遺おかず、又爾の聖者を朽果しめざるが故也、爾既に生命の路を示す、我を爾の前に置て喜に盈しめんと

又（耶三十一〇卅一至卅四）エホバ云ひ給ふ、視よ我イスラエルの家とユダの家とに新しき契約を立る日來らん、此契約はわが彼等の先祖の手を取りてエジプトの地よりこれを導き出せし日に立し所の如きにあらず、我彼等を娶りたれど彼等は其我契約を破れりとエホバ云ひたまふ、然れどかの日の後に我イスラエルの家に立んところの契約は是なり即ち我吾律法を彼等の衷におき其心の上に錄さん、我は彼等の神となり、彼等は我民となるべしとエホバ云ひ給ふ、人各々其隣と其兄弟に敎へて汝エホバを識れと復言はじ蓋小より大に至るまで悉く我を知るべければなりとエホバ曰ひ給ふ、我彼等の不義を赦し其罪を復た思はざるべし

然るに（來八〇八至十二）其虧る所を彼等に示して曰く、主曰ひ給ひけるは我イスラエルの家とユダの家に新約を立て全備するの日來らん、此約は我手を執て彼等の先祖をエジプトの地より導き出せる日に立し所の如きに非ず、蓋かれら我契約に居らず我また彼等を顧ざりし故なりと主言ひ給ひたり、又主言ひ給ひけるは其日の後われイスラエルの家に立んとする契約は是なり、われは我律法を其念に置き又其心に銘さん、我彼等の神となり、彼等我が民となるべし、各々其邦人と兄弟に敎へて爾主を識れと復ひはじ、蓋小より大に至るまで悉く我を識ん、我彼等の不義を恤み其罪と惡を復意に記さゞればなり

又（民十四〇二）すなはちイスラエルの子孫みなモーセとアロンに對て呟き全會衆彼等に言けるは嗚呼我儕はエジプトの國に死たらば善かりしものを、又は此曠野に死ば善らんものを

又（民二十一〇五及六）すなはち民、神とモーセに向ひて呟きけるは汝等何ぞ我儕をエジプトより導きのぼりて曠野に死しめんとするや、此には食物もなく又水もなし、我儕はこの粗き食物を心に厭ふなりと、是を以てエホバ火の蛇を民の中に遣して民を咬ましめ給ひければイスラエルの民の中死る者多かりき

又（詩九十五〇九）其時なんぢの列祖我を試探み我をためし又我わざを見たり

然るに（哥前十〇九）又彼等の中或者基督を試みて蛇に滅されたり、彼等に倣て我儕も試むべからず

右引證に於て舊約書にてはイスラエル人はエホバを試探したりしことを讀む、然るに使徒パウロは其哥林多前書に於て彼等はキリストを試みたりとせり

又（耳二〇三十二）凡てエホバの名を呼ぶ者は救はるべし、そはエホバの宣ひし如くシオンの山とエルサレムとに救はれし者あるべければなり、其遺れる者の中にエホバの召し給へる者あらん

然るに（羅十〇十三）凡て主の名を呼ぶ者は救はるべし

如斯なるを以てユダヤ人が常に、之を口にすることすら憚かりし所のエホバ、或は萬軍のエホバと云ふ聖名は屢々キリストに附したることを知るべし、又右引證する所を以て見れば、舊約書に於てはエホバは即ちメッシヤの名なり、而して之を新約書に用ゐ來る所、希臘語にては（Kurios）即主と云ふ語に譯出せり（使二〇三十六、十〇三十六、哥前二〇八、同八〇六、腓二〇至十二）

又舊約書に於て、エホバの使者は即エホバにして又基督の事なり、今エホバの使者は即エホバなりしことの例をあげんに（創十六〇七至十三）に於て、其七節に「エホバの使者……泉の傍にて彼に遇ふ」、其十三節に「ハガル己に諭し給へるエホバの名を云々」と記せり、されば エホバの使者は即ちエホバなりしことを知る

に足らん又（創十八〇一、至十九〇二十二）を見よ、前說を確むるに足るものあらん、即十八章首節に記して曰「エホバマムレの橡林にてアブラハムに顯現給へり」と、九節に「彼等アブラハムに言けるは云々」、十節に「其一人言ふ云々」、十三節に「エホバアブラハムに言給ひけるは云々」と記し、十六節に於て「斯くて其人々彼處より起てソドムの方を望みければアブラハム彼等を送らんとて俱に行けり」と記したり、而して十七節より此章の終節迄エホバは獨り留り給ふてアブラハムと語り給ひしことを讀む、乃ち其三十三節を見よ、曰「エホバアブラハムと言ふことを終て行き給へり」と、進んで十九章二十二迄を見るに、二人の天使ソドムに顯はれ、エホバよりの使者、其代理として事を處せしを讀むなり、今試に前後の關係を解き明さば即下の如し、曰く十八章に於てはエホバは二人の天使を伴ふてアブラハムに顯はれ給ひしが、二人の天使は別れてソドムに赴きエホバは留りてアブラハムと語り給ひしなりと

尙數例をあげん、即ちこゝに列擧する所の引照を前後相比較して熟察思案すべし

（創二十二〇十五至十八）爾は安然にして爾の父祖の所にゆかん、爾は遐齡に達りて葬らるべし、四代に及びて彼等こゝに歸り來らん、そはアモリ人の惡未だ貫盈ざればなりと、斯くて日の沒て黑暗となりしとき烟と火燄の出る爐其切剖りたる物の中を通過れり、是の日にエホバアブラハムと契約をなして言給ひけるは我此地をエジプトの河より彼大河即ちユフラテ河まで爾の子孫に與ふ

又（三十一〇十一、十二）時に神の使者夢の中に我に言ふヤコブよと、我こゝにありと對へければ、乃ち云ふ、汝の目をあげて見よ群の上に乘れる牡羊は皆班入のもの班駁なるもの、白點なるものなり、我ラバンが凡て汝になすところを鑒み

又（三十二〇二十四至三十）而してヤコブ一人遺りしが人ありて夜の明る迄之と角力す、其人己のヤコブに勝ざるを見てヤコブの髀の樞骨に觸しかばヤコブの髀の樞骨其人と角力する時挫離たり、其人、夜明んとすれば、我を去らしめよと云ければ、ヤコブ云ふ汝我を祝せずば去らしめずと、是に於て其人かれに云ふ、汝の名は何なるや、彼云ふヤコブなり、其人云ひけるは汝の名は重ねてヤコブと稱ふべからず、イスラエルと稱ふべし、其は汝神と人とに力を競ひて勝ちたればなりと、ヤコブ問て、請ふ汝の名を告よと云ければ、其人何故に我名を問ふやと言ひて、乃ち其處にて之を祝せり、是を以てヤコブ其處の名をペニエル（神の面）と名けて曰ふ、我面と面を合せて、神と相見て我生命なほ存るなりと

又（創四十八〇十六）我をして諸の災禍を賙はしめ給ひし天使願くは是の童子等を祝たまへ、願くは是等のもの我名と我父アブラハムイサクの名を以て稱へられんことを、願くは是等地の中に繁殖るにいたれ

又（出三〇二至六）エホバの使者棘の裏の火燄の中にて彼に顯はる、彼見るに棘火に燃れども其棘燬ず、モーセ言ひけるは我往きて此大なる觀を見、何故に棘のもえざるかを見ん、エホバ彼が來り觀んとするを見給ふ、即ち神棘の中よりモーセよモーセよと彼を呼び給ひければ、我こゝに在りと云ふに、神曰給ひけるは此に近よるなかれ、汝の足より履を脫ぐべし、汝が立つ處は聖き地なればなり、又云ひ給ひけるは我は爾の父の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神なりと、モーセ神を見たることを畏れて其面を蔽せり

又（出十三〇二十一、二十二）エホバ彼等の前に往たまひ、晝は雲の柱をもて彼等を導き、夜は火の柱をもて彼等を照して晝夜進ましめ給ふ、民の前に晝は雲の柱を除き給はず、夜は火の柱をのぞき給はず

又（十四〇十九至二十四）爰にイスラエルの陣營の前に行る神の使者移りて其後に行けり、即雲の柱其前面を離れて後に立ち、エジプト人の陣營とイスラエル人の陣營の間に至りけるが、彼が爲めには雲となり、暗と成り、是が爲めには夜を照せり、是を以て彼と是と夜の中に相近づかざりき、モーセ手を海の上に伸べければエホバ終夜強き東風を以て海を退かしめ、海を陸地となし給ひて水遂に分れたり、イスラエルの子孫海の中の乾ける所を行くに水は彼等の左右に墻となれり、エジプト人等パロの馬、車、騎兵皆其後に從ひて海の中に入る、曉にエホバ火と雲との柱の中よりエジプト人の軍勢を望み、エジプト人の軍勢を惱ましし

又（出二十三〇二十至二十三）視よ我天の使を遣はして汝に先たせ、途にて汝を守らせ、汝をわが備へし處に導かしめん、汝等其前に謹みをり其言に從へ之を怒らする勿れ、彼汝等の咎を赦さゞるべし、我名彼の中にあればなり、汝もし彼が言に從ひ凡て我が言ふところを爲ば我爾の敵の敵となり汝の仇の仇となるべし、我使汝に先立ち行きて汝をアモリ人、ヘテ人ペリジ人、カナン人、ヒビ人、およびエブス人に導き至らん我彼等を絶つべし

出埃及記三十三章十八にモーセ神に向て「願くは汝の榮光を我に示し給へ」と云ひしとき、エホバ之に答へ給ふて「汝は我面を見ること能はず、我を見て生くる人あらざればなり」（廿節）と、然れども同章十一節に於て「人が其友に言ふ如くエホバモーセと面をあはせて言ひ給ひ」しことを讀む、果して然らば如何にして此矛盾（外見上）を調和すべき乎、曰くモーセは實に父なる神の聖なる本體を見んことを希ひたり、然れども是れモーセには得べからざるの企望なり、蓋し人間はたゞ神を顯はす所のキリストの外は神を見ること能はざるものなればなりと、又士師記六章に於てエホバの使者、或は神の使者、又エホバ等の語は互に相交換して用ゐらるゝなり

又士師記十三章に於てエホバの使者マノアに顯はれたればマノアは之に犧牲を献げんとせしに、エホバの使者之を拒みしことを讀む、是れ蓋しマノアは彼をたゞ一天使なりと考へ其エホバなりしことを知らず、從て犧牲を献ぐるに之をエホバに献ぐるの心を以てせざりしに由るならん、故に天使マノアに告げて曰く「汝燔祭を備へんとならば、之をエホバに備ふべし」と、マノア其名を問ふとき彼答へて「我名は不思議なり、汝何故に之を尋ぬるや」と云へり、是に於てマノア「山羊羔と素祭物とを取り、磐の上にて之をエホバに献ぐ」ればエホバの使者「壇の餘の中に在て昇れり」、マノアと其妻大に懼て「我等神を視たれば必ず死ぬるならん」と云へり

又以賽亞書六十三章七至十、を見ればイザヤはエホバに就て語て曰く「斯くてエホバは彼等の爲めに救主と成給へり、彼等の艱難の時はエホバも惱み給ひて其面前の使を以て彼等を救ひ、其愛と其憐憫とによりて彼等を贖ひ、彼等をもたげ昔時の日常に彼等をいだき給へり」と、然るに（創二十八〇十三至十五）及（同三十一〇一至二十四）を査ぶれば、エホバ或はベテルの神はイスラエル人を導き給ひし者なるを見ん、尙ほ（創四十八〇十五、十六）（何西、十二〇二至六）を參照すべし

斯の如くなるを以てエホバの使者は即エホバなりしことを確知するに足れり

又エホバの使者は即キリストなり、是に就ては宜しく（哥前十〇四）と（詩篇六十八〇十五、十六、及三十五）とを比較參照し、又（來三〇三）（十一〇二十六）を引照すべし、以上の引照を査ぶればキリストはイス

ラエル人を導き給ひ、又且モーセに舊約の禮式宗教等を賜ひし者なるを知るべし、又舊約書を査べ來るに預言する者は或はエホバより其事を聞き、或は聖靈に感じて預言せし者なり、然るに（彼前一〇十及十一）に於てキリストの靈は實に舊約の預言者に其事を示したるものなりしなり

飜て新約書を査ぶるに其時代に至りてキリストは實に天より降誕して肉體を取り人間の中に寓し給ひしを以て、書中「エホバの使者」或は「主の使者」等の語を見ざるなり、尤も新約書中天の使者（The angel）なる語を時々見ざるにはあらざれども、かゝる時には常に其の前節にある使者（An angel）なる語を讀みて後のことなりと知るべし、例へば（太一〇二十）にある使者（An angel）を顯はし（同章二十四）にかの使者（The angel）を讀む、又（路一〇十一）にある使者なる語を記し而して後に（同章十八、十九、二十六、二十八、三十、三十四、三十五、三十八）等の諸節にかの使者なる語を讀むの類也（ギリーキ語の原本に於ても同樣なりと知るべし）

是に由てこの尊貴なる名エホバなる語は僞神偶像及凡ての被造物に付て曾て一度も用ゐざれども、往々にして之をキリストに附したるを明知すべく、而して舊約書の所謂エホバは即新約書のキリストを指せし者たるを見るべきなり、且エホバと云ふ名は時々三一の神を顯はすために用ゐられ、又稀に父なる神を稱するに用らる、到へば（詩二〇七、同百十〇一、何一〇七、亞二〇十及十一、瑪基三〇三）又約翰八章五十六に於てキリスト詔はく「アブラハムは我日を見んことを喜び、又之を見て樂めり」と、然れどもアブラハムはエホバを見、又エホバより贖罪の約束を受け、此約束を信じて救はれしなり、故に舊約時代に於て顯はれたるエホバは實にキリストなりしを知るべし、且人間は卑賤にして直接に父なる神を見ること能はざるは聖書の示す所なり、即ち

（約一〇十八）未だ神を見し人あらず、唯うみ給へる獨子即父の懷に在る者のみ之を彰はせり

又（約六〇四十六）然ども父を見し者はなし、惟神より來る者のみ之を見たり

又（提前一〇十七）願くは萬世の王、即ち朽ず、見ざる一の神に窮なく尊貴と榮光あらんことを、アーメン

（同六〇十六）獨一、死ざるもの、近くことを得ざる光に在して人未だ見しことなく、又見ること能はざる者なり、願くは尊貴と窮なき權力彼にあれ、アーメン

而してキリストは實に神を彰はす所の者なりき、即ち

（約一〇十八）前に見ゆ

（來一〇三）彼は神の榮の光輝、其質の眞像にて己の權能の言をもて萬物を扶持我等の罪の淨をなして上天に在す威光の右に坐しぬ

（太十一〇廿七）父は我に萬物を予へ給へり、父の外に子を識るものなく、又子および子の顯はす所の者の外に父をしるものなし

（西一〇十四）我儕その子に由て贖すなはち罪の赦をうるなり

（哥後四〇四）此の如き人は此世の神其心を盲ましたる不信者なり、是れ神の像なるキリストの榮の福音の光をして彼等を照さゞらしめんが爲なり

左ればキリストは遠くアダムの時より數千年の間度々下界に降臨して人間と與に交り、神の聖旨のある所を彰はし、又己れの贖罪に就て或は約束し、或は預言し、或は其贖罪の表號たる禮式等を示し給ひしなり、畢竟此等の事は皆一千八百年の前彼が肉體を取りて人間に降り給はんための豫表なりしと知るべきなり

又神に屬すべき他の名目も尙キリストに附與せらるゝを見る

（約一〇一至三）太初に道あり、道は神と偕に在り、道は即ち神なり、この道は太初に神と偕に在りき、萬物これに由て造らる、造られたるものに一として之に由らで造られしはなし（同章十四）それ道、肉體と成て我儕の間に寄れり、我儕其榮を見るに、實に父の生み給へる獨子の榮にして恩寵と眞理にて充てり

是に依て余は知る、太初にキリストあり、キリストは神と偕に在り、キリストは即ち神なり、萬物彼に由て造らる、造られたるもの一として彼に由らで造れしは無しと、キリストの聖言も亦之と相符合す（約十七〇五）に彼曰く

父よ今我をして、爾と偕に榮を得させ給へ、即ち創世より先に爾と偕に有し所の榮を得させ給へ

其（二十四）に彼曰く

父よ爾の我に賜し者の我をる所に我と偕に在て、我榮即爾が我に賜ひし者を見んことを、そは世の基を置ざりし先に爾我を愛したればなり

又（約壹、一〇一）それ我儕が聞き又目に見、懇切に觀、我手捫りし所の者、即元始より在りし生命の道を爾曹に傳ふ

（西一〇十七）彼は萬物より先にあり、萬物かれに由て存つことを得るなり

（羅九〇五）列祖は是彼等が先祖なり、肉體に由て言へばキリストも亦彼等より出、彼は萬物の上に在て世々讃美を得べき神なり、アーメン

右（羅九〇五）に於ける、世々讃美を得べき神なりと云ふ如き言詞は、未だ曾て被造物に付て用ゐられずして、たゞ眞の神にのみ歸せらるゝなり（羅一〇二十五、哥后一〇三、全十一〇卅一、弗一〇三）

又（詩四十五〇六、七）神よ爾の寶座は彌とは永く、爾の國の杖は公平の杖なり。爾は義をいつくしみ惡を惡む、是故に神、爾の神は喜の膏を爾の侶よりもまさりて、なんぢに沃ぎ給へり

右詩篇の章句は希伯來書一章八、九に引來りて之を基督に歸したるを見るなり

又（賽七〇十四）この故に主親ら一の豫兆を汝等に賜ふべし、視よ處女孕みて子を生まん其名をインマヌエルと稱ふべし

而して（太一〇廿二、廿三）凡てこの事は預言者に託て主の曰ひ給ひし言に處女孕みて子を生まん、其名をインマヌエルと稱ふべしと有るに應せん爲なり、其名を譯けば神われらと偕に在りとの義なり

又（約廿〇廿八）トマス答て彼に曰けるは我主よ我神よ、

（使廿〇廿八）故に爾曹自ら愼み、且爾曹が聖靈に立られて監督となれる其全群を愼み。主の己が血を以て買給ひし所の教會を牧ふべし

（哥后五〇十九）一切のもの神より出、かれキリストにより我儕をして己と和がしめ、且其和がしむる職を我儕にさづく

（多二〇十三、十四）望む所の福と、大なる神即ち我儕の救主イエスキリストの榮の顯れん事を望待しむ、キリスト我儕の爲めに己の身を舍給へり、是我儕を諸の罪より贖ひ出し、且己の爲に一民をきよめ、之をして熱心に善事を行はしめん爲なり

（彼后一〇一）イエス、キリストの僕、又使徒なるシモン、ペテロ我儕の神と、救主イエス、キリストの義に由て、我儕が受し所と同じ貴き信仰の道を受し者に書を贈る

（約壹、五〇二十）又神の子既に來り、我儕が眞理者を識の智慧を我儕に賜るを知る、われら眞理者に在り即其子イエス、キリストに在り、彼は乃ち眞神又永生なり

又（默一〇八、十七）（二〇八）（二十一〇六）（二十二〇八）に於てキリストは「アルパ」なり「オメガ」なり始なり終なりと稱へらる、是等の語も亦決して被造物に附すべき名にあらざるなり、唯神にのみ附すべきのみ

（賽四十一〇四、四十四〇六、同四十八〇十二）又（默十七〇十四）及（十九〇十三至十六）に於てキリストは主の主、或は王の王と稱へらる、是亦エホバに限りて用ゐらるべきものなり（申十〇十七、賽二十二〇二十二、詩百三十六〇二、但二〇四十七、同十一〇三十六）而して（提前六〇十五）には之を父なる神に就て用ゐたり又

キリストは自ら神の子、或は神なりと宣給ひたり即ち

（太二十六〇六十三、六十四）イエス默然たり、祭司の長答へて彼に曰けるは爾キリスト、神の子なるか、我爾を活神に誓せて之を告しめん、イエス彼に曰けるは爾が言へる如し且我爾曹に告げん、此後人の子大權の右に坐し天の雲に乘て來るを爾曹みるべし

（可十四〇六十一、六十二）イエス默然として何も答へざりければ祭司の長又彼に問て曰けるは爾は頌むべきもの、子キリストなる乎、イエス曰けるは然り、人の子大權の右に坐し天の雲の中に現れ來るを爾曹みるべし

（路二十二〇七十）皆言ひけるは然ば爾は神の子なるか、イエス言ひけるは爾曹が言る如く我は是なり

又（約三〇十六至十八）それ神は其生み給へる獨子を賜ふ程に世の人を愛し給へり、此は凡て彼を信ずる者に亡ることなくして永生を受しめんが爲なり、神の其子を世に遣し給へるは世の罪を定めんとに非ず、彼に由て世を救んが爲なり、彼を信ずる者は罪に定られず、信せざる者は既に其罪定まれり蓋神の生給へる獨子の名を信せざるに因る

又（仝五〇十七、十八）イエス彼等に答けるは我父は今に至るまで働き給ふ我も亦働くなり、此に因てユダヤ人いよいよイエスを殺さんと謀る、そは安息日を犯すのみならず神を己が父と言ひ、己を神と齊くすればなり

又（仝九〇三十五至三十七）彼等が逐出しゝことを聞きイエス尋て之に遇、いひけるは爾神の子を信ずるや、答て曰けるは主よ彼として我信ずべき者は誰なるや、イエス曰けるは爾既に彼をみる、今爾と言ふ者はそれなり

（仝十〇三十）彼と父とは一なり

（仝章三十三）ユダヤ人答へて曰けるは、石にて擊んとするものは善事の爲に非ず、爾たゞ褻瀆ことを云ひ、且爾人なるに己を神となすに因てなり

（仝章三十六）父の聖別ちて世に遣しゝ者、我は神の子なりと稱ばとて何ぞ之を褻瀆ことを曰ふといふべけん乎

（約十九〇七）ユダヤ人かれに答へけるは我儕に律法あり、其律法に從へば彼は死べきものなり、蓋彼自己を神の子となせばなり

（默二〇十八）爾テアテラの敎會の使者に書贈るべし、神の子其目は火焰の如く其足は眞鍮の如なる者かくの如く言ふと

又父なる神はキリストを神の子と呼び給ひしなり

(太三〇十七)天より聲ありて此はわが心に適ふ我愛子なりと云へり

(仝十七〇五)如此言へる時かゝやける雲彼等を蔽ふ、聲雲より出て、言けるは此は我旨に適ふ我愛子なり、爾曹之にきくべし

(可一〇十一)頓て水より上れるとき天開け靈鴿の如き狀にて其上に降りぬ、又天より聲あり、云く爾は我愛子、我喜ぶ所の者なり

(路三〇二十二)聖靈鴿の如き狀にて其上に降りぬ

(仝九〇三十五)　略　之

(徒十三〇三十三)即詩の第二篇に爾は我子なり、我今日爾を生めりと錄されたるが如し

(來一〇五)そは天の使等の中なる誰に曾て如此いへる乎、爾は我子なり、我今日爾を生めりと、又我彼のために父とならん彼は我ために子となるべしと

(來五〇五)此の如くキリストも自ら尊びて祭司の長とは爲ざりき、爾は我子なり我今日爾を生りと言し者、彼を尊びて然かなせり

(彼后一〇十七)至大なる榮光の中より聲ありて彼を呼びては我心に適ふ我愛子なりと曰る此時かれは父より尊と榮を受たり

又天使ガブリエルもキリストが神の子たることを云へり(路一〇三十二)かれ大なる者と爲て至上者の子と稱られん、又主たる神其先祖ダビデ王の位を彼に予れば

(仝章三十五)天使答て曰けるは聖靈なんぢに臨る、至上者の大能なんぢを庇ん、是故に爾が生む所の聖なる者は神の子と稱へらるべし

惡魔も亦然り

(太四〇三)(路四〇三)

試むる者彼に來りて曰けるは爾もし神の子ならば命じて此石を「パン」とせよ

(太四〇六)(路四〇九)

爾若し神の子ならば己が身を下へ投げよ、蓋爾が爲に神其使等に命せん、彼等手にて支へ爾が足の石に觸れざるやうすべしと錄されたり

(可三〇十一)汚れたる鬼彼をみて其前に俯伏しさけび爾は神の子なりと曰ふ

(仝五〇七)大聲に呼りけるは至上神の子イエスよ我爾と何の與り有んや、我神に託て求ふ、我を苦るゝと勿れ

(仝四〇四十一)惡鬼も亦多の人々を出さり喊叫て爾は神の子基督なりと云へり、然るに之を斥て言ふことを容さゝりき惡鬼其キリストなるを識ばなり

ガリラヤ湖上舟中の人々も、ペタニヤのマルタも同じく然り

(太十四〇三十三)舟に居りし者近よりて彼を拜して曰けれは誠に爾は神の子なり

(約十一〇二十七)彼イエスに曰けるは主よ然り、我爾は世に臨るべきキリスト神の子なりと信ず

又使徒等も同じ言顯を爲せり以下掲ぐる所の如し

(太十六〇十六)シモンペテロ答けるは爾はキリスト活る神の子なり

(可一〇一、十、及十一)これ神の子イエスキリストの福音の始なり、頓て水より上れる時天開け、靈鴿の

如く其上に降るを見たり又天より聲ありて云々

(約一〇十七、十八)律法はモーセに由て傳り、恩寵と眞理はイエスキリストに由て來れり未だ神を見し人あらず、惟生み給へる獨子、即父の懷に在者のみ之を彰はせり

(仝章三十四)我之を見て其の神の子たるを證せり

(仝章四十九)ナタナエル答て曰けるは「ラビ」爾は神の子なり爾はイスラエルの王なり

(仝三〇卅五、卅六)父は子を愛して萬物を其手に授たり子を信ずる者は窮なき生命を得、子に從はざる者は生命を見ることを得じ、且神の怒其上に留らん

(仝廿〇卅一)此書を錄せるは爾曹をしてイエスの神の子キリストなる事を信せしめ、之を信じ其名に因て生命を得させんが爲なり

(徒九〇廿)直に會堂に於てイエスの事を宣て即ち此は神の子なりと言ふ

(羅一〇三、四)其子我儕の主イエス、キリストを指て示せり、彼は肉体に由ばダビデの裔より生れ聖善の靈性に由ば甦りし事によりて明に神の子たる事顯れたり

(仝章九)我其子の福音に於て、心を以て事る所の神は我が不斷爾曹を懷ふ其証なり

(仝五〇十)若し我儕敵たりし時に其子の死によりて神に和ぐことを得たらんには、況て和を得たる今其生るに頼て救ることを得ざらんや

(仝八〇三)それ律法は肉に由て荏弱、其能はざる所を神は爲し給へり、即ち己の子を罪の肉の狀となして罪の爲に遣し其肉に於て罪を罰しぬ

(仝章廿九)それ神は預め知給ふ所の者を、其子の狀に效はせんと預め之を定む、此は其子を多の兄弟の中に嫡子たらせんがためなり

(仝章卅二)己の子を惜まずして我儕衆のために之を付せる者は豈彼に併て萬物をも我儕に賜はざらん乎

(哥前一〇九)それ神は誠信なり、彼爾曹を召て其子我儕の主イエス、キリストの交際に入しめ給へり

(仝十五〇廿八)萬物彼に服ふ時は、子も亦自ら萬物を己に服はし給ふ者に服ふべし、是神すべての物の上に主たらん爲なり

(哥后一〇十九)我儕、即ち我とシルワノ及テモテ爾曹の中に傳へたる神の子イエス、キリストは是と云ひ又非と言ふが如き事なし、彼には唯是と言ふことと有るのみ

(加一〇十六)其子を異邦人の中に宣べしめんがため、心に善として彼を我心に示し給ひ云々

(仝二〇二十)我キリストと偕に十字架に釘られたり、既我生るに非ず、キリスト我に在て生るなり、今我れ肉體に在て生るは我を愛して我がために己を捨てし者即ち神子を信ずるに由て生るなり

(仝四〇四)然れども期既に至るに及びて神其子を遣し給へり

(仝章六)且なんぢ等既に子たることを得しが故に、神其子の靈を爾曹の心に遣り、あば父と呼ばしむ

(弗四〇十三)我儕をして皆同く神の子を信じ之を知り、全き人即ちキリストの滿足る程に成までに至り

(西一〇十三)彼は暗の權威より我儕を救出して其愛子の國に遷し給へり

(撒前一〇十)其子は即神の死より甦らしゝ所のイエスにして我儕を來らんとする怒より拯ふ者なり

(來一〇二)この末日には其子に託て我儕に告たまへり、神は彼を立て萬物の嗣とし且彼を以て諸の世界を

造りたり

(全章五、六)そは天の使等の中なる誰に曾て如此言へる乎爾は我子なり、我今日爾をうめりと、又われ彼のために父とならん、彼は我が爲に子を作るべしと、又冢子を世に入らしむる時に曰給ひへるは神のもろもろの使者は皆之れに跪くべし

(來五〇五)此の如くキリストも自ら尊びて祭司の長とは爲ざりき、爾は我子なり、我今日爾を生めりと言し者、彼を尊びて然なせり

(全七〇三)彼は父なく、母なく族譜なく、生の始なく亦終もなし、神の子に象られて恒に祭司たりき

(全十〇二十九)況て神の子を蹂躙りみづから潔られし契約の血を尋常の物となし、又恩を施す靈を侮る者の受べき其罰の重きこと幾許と意ふや

(彼前一〇十七)人を偏視ず各人の行に由て鞫く者を爾曹もし父と呼ば世に寄れる日を懼れて過すべし

(約壹一〇三)我儕見し所、聞し所を爾曹に傳ふるは爾曹を我儕と同心ならしめん爲なり、我儕は父及其子イエス、キリストと同心たり

(全章七)神の光に在るが如く、光の中を行かば我儕互に同心となるを得、且其子イエス、キリストの血すべて罪より我儕をきよむ

(同二〇二十二至二十四)誰か是謊者イエスを言て、キリストとせざる者ならずや、父と子とを拒む者は即キリストに敵する者也凡そ子を拒む者は父をも有たず、子を受くる者は父をも有てり爾曹始より聞る者を爾曹の衷に居らしむべし、若し始より聞る者爾曹の居に居は爾曹は子と父とに居らん

(全三〇八)罪を犯す者は惡魔より出、そは惡魔は始より罪を犯せばなり、神の子の顯るゝは惡魔の工を毀たんがためなり

(全上二十三)この誡は即我儕神の子イエス、キリストの名を信じ、彼の我儕に命せし如く互に相愛することなり

(全四〇九、十)神は其生給へる獨子を世に遣はし、我儕をして彼に由て生を得しむ、是に於て神の愛我儕に顯れたり我儕神を愛するに非ず、神我儕を愛し、我儕の罪のために其子を遣して挽回の祭物とせり、是即愛なり

(全章十四、十五)父曩に其子を遣して世の救主と爲せり、我儕既に之れを見たり、今其証を作なり凡そイエスを神の子なりと認はす者は神かれに居り、かれ神に居る

(全五〇九至十三)我儕若し人の証を受くる時は、神の証は更に大なるべし、神の証は此なり、即ち其子の爲に作せる証なり、神の子を信ずる者は其衷に此証あり、神を信せざる者は神を謊者とす、蓋神の其子のために証せる証を信せざればなり、神は窮りなき生をもて我儕に賜ふ、此生は乃ち其子に在り、これ其証なり、神の子を持つ者は生を有、其子を有ざる者は生を有たず、我神の子の名を信ずる爾曹に此等の事を書贈るは爾曹に窮なき生ある事を知らしめんがためなり

(全章二十)又神の子既に來り我儕が眞理者を識るの智慧を我儕に賜るを知る、我儕眞理者に在り、即ち其子イエスキリストに在り、彼は乃ち眞神又永生なり

(約貳書三)爾曹は實と愛とに居て、神即ち父、及び父の子イエスキリストより恩寵と平康とを受べし

（全章九）凡そキリストの教に居らずして人を導く者は神を有す、キリストの教にをる者は父及び子を有り右の諸引照を査べ來れば、神は決して被造物には與へ給はざる所の名をも、キリストには常に附し給へることを知べし且ユダヤ人は、己れは神の子なりと云へる基督の宣言を聞くや、直に之を以てイエスは自ら僭して父なる神と位地を同ふするものと解し、大に忿怒したり即ち

（約十〇三十三）ユダヤ人答て曰けるは石にて擲たんとするは善事のために非ず、爾たゞ褻瀆ことを言ひ、且なんぢは人なるに己を神となすに因てなり

イエス之に答へて曰

父の聖別ちて世に遣しゝ者、我は神の子なりと稱へばとて何ぞ之を褻瀆ことを曰ふといふべけんや

使徒等も亦彼等と同じ意味に解したること前に列擧したる引照に依て頗る明瞭なり、今約翰傳及約翰の書簡を取て閲し來るに、彼が著述の大目的は即キリストの神たることを明白に示すに在りしと、固より喋々を要せざる所なり、佛國の有名なるアイレニアスは約翰傳の目的に付て說を爲して曰く、小亞細亞の僞信言セリントスは此世界を以て至上神によりて創造せられたるものに非ずと爲し、却て神より劣れるものに依て創造せられたりと敎へたり、是がため使徒ヨハネは筆を執りて基督傳を著はし、其妄を辨じたりと、（其著、辨妄論第一卷二十六章一節及第三卷十一章一節を見るべし）蓋しアイレニオスはポリカープの弟子、ポリカープは實に使徒ヨハネの門弟たりしなり。

又彼のゼロームも約翰傳の目的に就て曰く、彼の時代には異端横行してセリントス及其他の輩は盛に謬妄なる異說を擴布したり、就中エビオナイツ（Ebionites）はイエスを以て、單にマリヤより生れたる人の子なりとして、其永遠に存在せしことを拒みたり、時勢此の如くなりしを以て、使徒約翰は小亞細亞の牧師等の請を容れて、こゝにキリストの傳記を著はし、かの迷妄なる臆說に向て正當なる實史を傳へたるなりと、（聖書中の偉人傳第九章を見よ）

又彼の時代に於て「ノスチックス」も、神と人間との中間なる靈即「ロゴス」が此世界を創造し、又且之を支配すと云ふ說を唱へたり、使徒ヨハネは之に對して、當時普通の用語にして而かも造物主を示す所の其「ロゴス」なる語を取り來て、基督傳の第一章を始め「ロゴス」は即ち神にして無究の太初より存在せる者なりとなし、又其「ロゴス」は肉体を取り人間の中に寓し給ふたりと論じ、是即古昔より約束せられたる「メッシヤ」なりと記述したる也

又以賽亞書に於て五種の名のキリストに附せらるゝを見る即其九章六に曰く

一人の嬰兒我儕の爲めに生れたり、我儕は獨の子を與へられたり、政事は其肩に在り、其名は奇妙又議士、又大能の神、永遠の父、平和の君と稱へられん

第二目　神の性質は亦キリストに在り

（西二〇九）それ神の充足る德は悉く形体をなしてキリストに住めり

詩に云「もろ〳〵の天は神の榮光を彰はし、穹蒼は其手の工を示す、日は新郎の賀筵を出る如く、勇士の競ひ走るを喜ぶに似たり、其出たつや天の涯よりし、其運り行くや天の端極にいたる物として其和煦を被らざるなし」「エホバは又地を基の上におきて永遠に動くことなからしめ、衣にて掩ふ如く大水にて地を覆ひ給へり、水滸へて山の上を越ゆ、爾叱咤すれば水退き汝雷の聲を放てば水忽ち去りぬ、或は山に上り或は谷に下

りて汝の定め給へる所にゆけり、爾界を立てゝ之を越へしめず、再び地を覆ふことなからしむエホバは泉を谷に湧き出さしめ給ふ其流は山の間に走る、斯て野の諸の獸に飲ましむ、野の驢馬も其渴をやむ、空の鳥も其邊に住み樹梢の間よりさへづり歌ふと」(詩十九篇一至六、同百四〇五〇十二) 宇宙の妙搆巧造實に斯の如し、而して如斯妙搆偉業は唯全能全智遍在の神を待つて始めて之を能くすべき也耳、然るに(約一〇一至三)及其他聖書中の諸章に於てキリストはかゝる宇宙と萬物を創造し給ひしことを言へり、こゝに知るキリストは即ち全く神なることを

若しそれキリストが全能なりとの聖書の言顯は

(太二十八〇十八)イエス進みて彼等に語り言ひけるは天のうち、地の上の凡の權を我に賜れり

(約十六〇十五)凡て父の有給ふ者は我屬なり、是故に彼、我屬を受けて爾曹に示すと云へり

(腓三〇二十及二十一)我儕の國は天に在り、我儕は救主すなはちイエス、キリストの其處より來るを待彼は萬物を己に服はせ得る能に由て、我儕が卑き體を化へて其榮光の體に象らしむべし

(來一〇三)彼は神の榮の光輝、其質の眞像にて己が權能の言を以て萬物を扶持、我儕の罪の淨をなして上天に在す威光の右に坐しぬ

(來七〇二十五)彼は己に頼て神に就る者のために、懇求んとて恒に生くれば、彼等を全く救ひ得るなり

(彼後一〇三)神其能力に循ひて、生命と敬虔に係る凡のものを我儕に賜へり、是我儕榮と德を以て我儕を召き給ひし者を識るに由てなり

(默一〇八)主たる神言給へり、我は「アルパ」也「オメガ」也、始也、終也、今あり昔あり、後ある全能の者なり

(全三〇七)爾ヒラデルヒヤの教會の使者に書贈るべし、聖者誠なる者、ダビデの鑰を持つ者、かれ開は誰も閉ることを能はず、彼閉つれば誰も開くこと能はず、此者云々

又キリストの全智なることに就ては

(太九〇四)イエス其意を知て曰けるは爾曹いかなれば心に惡を懷ふや

(可二〇八)　略之

(太十二〇二十五)イエス其意を知て彼等に曰けるは凡て相爭ふ國は亡び、云々

(路六〇八)イエス其意を知て、手痿へたる人に起て中に立よと言ければ其人起きて立り

(全九〇四十七)イエス其心の念を知て孩子を取り側に立てゝ云々

尙(約一〇四十八至五十一)(二〇二十五)(六〇六十四)を見れば、彼は能く人間隱微の心裡を洞見せられたることを知るべし、又(約十三〇一)を見れば彼は如何なる時、殺害せらるべきかを前知せられたり(約二十一〇十七)に於てペテロは「主知ざる所なし」と言ひしも、キリストは是れを過當溢美の言として咎め給ふことなかりき、蓋ペテロの言顯はせし所は眞なればなり、又(默二〇二十三)にはキリストは能く「人の心腸を察り給ふ」と云へり然れども舊約書の告ぐる所は、人の心腸を察り得る者は唯エホバの神のみ能くする所也(代上二十八〇九、詩七〇九、耶十一〇二十、同十七〇十)

又永遠無究の性もキリストに在り

(約一〇一、二)太初に道あり道は神と偕に在り、道は即神也、この道は神と偕に在き

(約壹、一〇一、二)それ我儕が聞き、又目に見懇切に觀、我手捫りし所の者、即元始より在りし生命の道を爾曹に傳ふ、この生命既に顯れたれば我儕之を見て証を爲す、即ち原と父と偕に在りし者にて、我儕に顯れたる窮なき所の此生命を爾曹に傳ふ

(默一〇八)主たる神言給へり我は「アルパ」也、「オメガ」也云々

(仝章十七、十八)我之を見し時、死る者の如く、其足下に仆れたる、彼右の手を我に按て曰けるは懼るゝ勿れ、我は首先なり、末後なり、我は生者なり、前に死しことあり、視よ我は世々窮なく生ん

又(以賽亞九〇六)にキリストは永遠の父と稱へらる、尙左の諸章句を引照すべし

(約六〇六十二)もし人の子の故處に升を見ば如何

(仝八〇五十八)イエス彼等に曰けるは誠に實に爾曹に告ん我はアブラハムの有らざりし先より在者也

(仝十三〇三)イエス己の手に、父の萬物を賜しこと、神より來り神に歸ることゝを知り

(約十六〇二十八)我父より出で世に臨れり、復世を離て父にゆかん

(仝十七〇五)父よ今我をして爾と偕に榮を得させ給へ、即ち創世より先に爾と偕に有し所の榮を得させ給へ

(仝章二十四)父よ爾の我に賜し者の我をる所に我と偕に在て、我榮即ち爾が我に賜し者を見んことを願ふ、そは世の基を置ざりし先に爾われを愛したればなり

又常恒不變の性もキリストに在り

(來一〇十至十二)は元とエホバに對して用ゐたる讃辭にして詩の第百二篇より出たり、然るに該記者は之をキリストに歸して「爾は變ることなし、爾の壽は終らざるなり」と云へり、且其十三章八には「イエス、キリストは昨日も今日も變らざるなり」と記したり

又何處にもキリストの在し給ふことは

(太十八〇二十)及(二十八〇二十)に於て、信者の在る所、集る所には必ず偕に在るべしとの聖約に由て知らるゝなり。又(約三〇十三)に於ては、其身地上に居り乍ら尙天にも在すことを宣べて「天より降り天に居る」と詔ひたり。我儕は又(西一〇十七)及(來一〇三)よりキリストは萬物を扶持給ふ者なることを學べり。それ萬物を扶持する者は必ず宇宙遍在の者ならざるべからず、是故に我儕はキリストは遍く宇宙に在して萬物を總統し給ふ者なることを信ずるなり

第三目　神の業は以て基督に歸せり

(一)萬物創造の事

抑創造は唯神のみ爲し能ふ所の工なり(尼九〇六、詩百二〇二十五、賽四十二〇五、四十四〇二十四、賽四十五〇十八)然れども之を以て亦基督に歸するは聖書の趨向也例へば

(箴八〇二十七)かれ天を創造り海の面に穹蒼を張給ひし時我かしこに在りき

(約一〇三)萬物之に由て造らる、造れたる者に一として之に由らで造れしは無し

(哥前八〇六)我儕に於ては唯一の神、即ち父あるのみ、萬物これより生、我儕之に歸す、又一の主即ちイエス、キリストあり萬物之に由、我儕も之に由れり

(西一〇十六)そは彼に由て萬物は造れたり、天に在者地上に在る者、人の見ることを得る者、見ることを

得ざるもの、或は位ある者、或は主たる者、或は政を執る者、或は權威ある者、萬物彼に由て造られたり、且其造られたるは彼が爲なり、(來一〇二)この末日には其子に託て我儕に告給へり、神は彼を立、萬物の嗣とし且彼を以て諸の世界を造りたり

(仝章十)主よ爾、元始に地の基を奠く、天も爾が手の工なり

(來三〇三、四)蓋家を建りし者の家より過て榮あるが如く、彼もモーセより過て榮を受くべき者とせられたり凡そ家は之を建れる者あり、萬物を造れる者は神なり

(二)萬物扶持の事

之エホバの有し給ふ所の大權且大能なり(尼九〇六詩三十六〇六)而して又キリストに在る所の權能、即左の諸引照を見よ

(西一〇十七)彼は萬物より先に在り、萬物彼に由て存ることを得るなり

(來一〇三)彼は神の榮の光輝、其質の眞像にて己が權能の言をもて萬物を扶持云々

(三)死者を蘇らす事

これ亦神の特有し給ふ大能なり(約五〇二十一、羅四〇十七、羅八〇十一)されどヤイロの女、ナインの嫠の息、及ラザロは實に基督の口より出づる言に依て甦らされしなり(太九〇十八至廿五、路七〇十二至十五、約十一〇一至四十六)尙次の引照を見よ

(約五〇廿八、廿九)之を奇と爲こと勿れ、蓋墓に在るもの皆其聲を聞て出るとき來んとすればなり、善事を行し者は、生を得るに甦り、惡事を行し者は罪を得るに甦るべし

(約六〇三十九、四十)凡て父の我に賜し者を我一をも失はず、末日に之を甦すは即ち我を遣し、父の意なり、凡そ子を見て之を信ずる者は永生を得、我復之を末の日に甦らすべし是れ我を遣し、者の意なればなり

(仝上〇四十四)我を遣し、父若し引ざれば、人よく我に就るなし、我に就し人は末日に我これを甦らすべし

(四)終末の大審判

是亦神のみ有し給ふ大權なり

(傳十二〇十四)神は一切の行爲、並に一切の隱れたる事を善惡ともに審判給ふなり

(羅二〇二、三)如此行ふ者を罪する神の審判は眞理に合へりと我儕は知、此等の事を行ふ者を審判き同じく之を行ふ人よ爾神の審判を免れんと意ふ乎

(羅三〇六)然ことあらじ、若し然ること有ば神如何にして世を鞫かんや

(仝十四〇十至十二)爾何ぞ其兄弟を罪するや、何ぞ其兄弟を藐視るや、我儕は皆キリストの臺前に立べき者なり、錄して主の曰給へるは我は活る神、すべての膝は我前に屈り凡の舌は我を讃美すべしと有るが如し是故に我儕各々己の事を神に訟ふべし

(默二十〇十一、十二)我白き大なる寶座と之に坐する者とを見る、地と天と其前を遁て再び留るべき處を得ず、我又死せし者の大小の別なく皆神の前に立を見たり、其處に書ありて展く、別に又一の書ありて展くこれ生命の書也死し者は皆書に錄せる所の事に由り、其行に循ひて審判を受るなり

然れども大審判は實にキリストの職として掌り給ふ所なり即ち

(太十六〇二十七)それ人の子は父の榮光を以て其使等と偕に來らん、其時おの〳〵の行に由て報ゆべし

(約五〇二十二)夫れ父は誰をも鞫かず審判は凡て子に委ねたり

(同章二十七)又人の子たるに由て之に審判するの權威を賜へり

（徒十七〇三十一）蓋神既に其立し所の人により義をもて世を鞫くべき日を定め、此事に付ては彼を死より甦らせて其証を衆の人に予へ給へばなり

（羅二〇十六）それ審判は我が福音に云る如く神イエス、キリストをもて人の隠微たる事を鞫かん日に成るべし

（哥後五〇十）蓋我儕必ず皆キリストの臺前に出で善にもあれ、惡にもあれ、各々身に居て爲し所のことに循ひ其報を受べき者なればなり

又此事に就ては尙左の諸引照を見よ

（太二十五〇三十一至四十六、徒十〇四十二、撒前四〇十六、十七、撒後一〇七至十、彼後三〇七至十、默一〇七、猶十四、十四、提後四〇一）

（五）キリストは能く自己の權能によりて奇跡を爲し給ひたり即下記の諸引照を見よ（太八〇五至十三、九〇二十八、三十九、路六〇十九、七〇十二至十五、八〇四十六、約十一〇四十三、十四〇二十九、可四〇三十七至十四）實例を以て言はゞ彼ナインにては「昇出さるゝ死人」に向て「我汝に命ず起よ」と「曰ふや死者忽ち「起きて、且言ひ始め」死して既に四日間墓中に在りしラザロに向て「出よ」と云ふや、彼「布にて手足を縛かれ、手布にて面を包まれて出で」來たりぬ、而して使徒等の奇跡を爲すや、却て唯キリストの名に由て之を行ひたり（使三〇六及十六、四〇十、九〇二十四）

（六）人間の救拯は實にキリスト唯一の目的たりし也

例へば救出す事は（使二十〇二十八）信者を撰び給ふ事は（約十〇十六、十八、太九〇十三、）聖潔爲し給ふ事は（弗五〇二十六）聖靈を降し給ふ事は（約十五〇二十六、十六〇七及十四）また永生を與へ給ふ事は（約十〇二十八）を見るべし

第四目　神に屬する所の榮光は亦キリストに屬せり

（賽四十二〇八）（四十五〇二十三）を見ればエホバは其榮光を他の者に與へ給はずと雖も、獨り之をキリストに許せり、即ち

（腓二〇九至十一）是故に神は甚く彼を崇て諸の名に超る名を之に予へ給へり、此は天に在るもの地に在る者及地の下に在る者をして悉くイエスの名に由て膝を屈しめ、且諸の舌をして悉くイエスキリストは主なりと稱揚して父なる神に榮を歸せしめん爲なり

（賽四十五〇二十三）我は己を指して誓ひたり、この言は義き口より出でたれば反ることなし、凡の膝は我前に屈み、凡の舌は我に誓を立てん

是に由て之を視れば、以賽亞書に在て、唯々神のみに歸すべき榮光を腓立比書に於て之をキリストに歸したるを知るべし又信者は祈禱に於て父なる神と、キリストを並び稱するの風あるは會々以てキリストの尊位を見認めしひ、例へば

（撒前三〇十一、十二）願くは神即ち我儕の父、親ら我儕の主イエス、キリストと偕に我儕を導きて爾曹に至らしめ給はんことを、又願ふ主、爾曹の愛を增し且滿しめ、爾曹をして互に愛し、衆の人を愛すること我儕が爾曹を愛する如くならしめ

（同後二〇十六、十七）願くは我儕の主イエス、キリスト及び我儕の父の神即我儕を愛し且恩に由て、永遠の安慰と善望を予る者、爾曹の心を慰め、凡の善言と善行に爾曹を堅固せんことを

又洗禮或は祝禱に於てキリストは父なる神と偕に呼ばるゝなり、例へば

（太二十八〇十九）是故に爾曹ゆきて萬國の民に「バプテスマ」を施し之を父と子と聖靈の名に入て弟子とし

（羅一〇七）爾曹、願くは我儕の父なる神及び主イエス、キリストより恩寵と平康を受よ
（哥前一〇三）爾曹願くは我儕の父なる神及び主イエス、キリストより恩寵と平康を受よ
（哥後一〇二）（加一〇三）等右と同文なり、加之祝禱に於て唯々イエス、キリストの名のみを呼びし例あり（加六〇十八、提後四〇十八、彼前四〇十一、後三〇十八、默一〇六）等を見よ、而して祈禱の如きも亦キリストのみに向て捧げし例あり（使一〇二十四、羅十〇十二、十三哥前一〇二、同後十二〇八）且つ人の拜すべきものは唯神のみにして他の物を拜すべからざることは聖書の嚴に敎誡する所也（出二十〇三、發四十四〇八、發四十五〇五）是を以て使徒等は己を拜せんとする者を禁じたるなり（使十〇二十五、二十六、十四〇十一至十八）獨り使徒等のみならず天使さへも、自己を拜することを拒み、唯神を拜せよと告げたり（默十九〇十、同二十二〇八、九）反之基督は常に神たるの榮光及尊敬を受けて辭し給はざりき
（太八〇二）癩病の者來り拜して曰けるは主もし旨に適ふ時は我を潔く爲し得べしイエス手を伸べかれに按けて我心に適へり潔なれと曰
（全九〇十八）イエス彼等に此事を言へる時、或宰來り拜して曰けるは我女今既に死り來て彼に手を按たまはゞ生くべし
（全十四〇三十三）舟に居し者近よりて彼を拜し曰けるは誠に爾は神の子なり
（全十五〇二十五）歸來り拜して曰けるは主よ我を助け給へ
（全二十〇二十）其時ゼベダイの子等の母其子と偕にイエスに來り拜して彼に求ること有ければ
（全二十八〇九）弟子等に告んとて往ときイエス彼に遇て安かれと曰給ひければ婦すゝみ其足を抱て拜しぬ
（全章十七）イエスを見て拜せり
（可五〇六）彼はるかにイエスを見て趨りより之を拜し
（全十五〇十九）また葦を以て其首を擊かつ唾し跪きて拜しぬ
（路二十四〇五十二）彼等これを拜して甚く喜びエルサレムに歸り
（約九〇三十八）主よ我信ずと曰て彼を拜せり

若し以上の十一章句中にある拜すゞと云語は單に問安の如き者にして禮拜を意味する者にあらずと云はん乎、決して然らずかの希臘語（Proskuneo）は新約書中唯禮拜の意味のみを以て用ゐられ其數六十回に及ぶ即ち

（イ）神を拜するために二十七回
（太四〇十）（路四〇八）（約四〇二十二回二十一、二十二回二十三回二十四回）約十二〇二十）（徒八〇二十七）（二十四〇十一）（哥前十四〇二十五）來十一〇二十一）默三〇九）（四〇十）（五〇十四）（七〇十一）（十一〇一及十六）（十四〇七）（十五〇四）（十九〇四及十）（二十二〇九）

ロ）キリストを拜するために十五回
前に掲げし十一回と（太二〇二、八、及十一）（來一〇六）

（ハ）僞神或は惡魔を拜するために、十四回
（太四〇九）（路四〇七）（徒七〇四十三）（默九〇二十）（十三〇四回八、十二及十五）（十四〇九及十一）（十六〇二）（十九〇二十）（二十〇四）

（ニ）天使を拜するために二回
（默十九〇十）（二十二〇八）

(ホ)人間を拜するために二回

(徒十〇二十五)(此時ペテロは之を禁じたるなり)及び(太十八〇二十六)

右馬太傳に在る比喩中、家臣は其王の前に俯伏して之を拜したるを見ん、之は其時代の風習にして、帝王が神の如く拜せられしことは通例の事なりき、かの初代信者の虐殺されしことは一はロマ皇帝の肖像を拜し肯せざるに起因したるにあらずや

是故に以上引照の表明する所に據てかの(Proskuneo)は禮拜の意味にて用ゐられしこと甚明なり、是に於て知るべし、キリストは神たるの尊敬を甘じて受けられしことを、尙一二の引照を加へ置かん

(提後四〇十八)主また我を救ひて諸の惡事より離れしめ且我を救ひて其天の國に入れん、願くは榮世々窮なく彼に歸せんことを、アーメン

(彼後三〇十八)爾曹益々我儕の主なる救主イエス、キリストを知らんことゝ益々其恩惠を知ることを務むべし、願くは榮光、今も後も彼に歸して窮なからんことを、アーメン

且(默一〇五六、五〇八至十三、七〇九、十、詩七十二〇十五至十七)を參照せば可なり

第五目　神の性質は直接にキリストに歸せり

(西一〇十九、二十)蓋父凡ての德を以て彼に滿しめ其十字架の血に由て平和をなし、萬物即ち地上に在るの、天に在るものをして彼に由て己と和がしむる事は是其聖旨に適ふことなればなり

(同二〇九)彼は諸の政と權威の首なり、爾曹彼に在て全備する事を得るなり

(約十七〇五)父よ今我をして、爾と偕に榮を得させ給へ、即ち創世より先に爾と偕に有し所の榮を得させ給へ

(腓二〇五至十一)爾曹キリストイエスの意を以て意とすべし、彼は神の体にて居りしかども、自ら其神と匹く在る所の事を棄離さることを思はず、反て己を虛ふし僕の貌を取りて人の如くなれり、既に人の如き形狀にて現はれ、己の卑し死に至るまで順ひ、十字架の死をさへ受るに至れり、是故に神は甚しく彼を崇めて、諸の名に超る名を之に予へ給へり、此は天に在者、地に在者、及地の下に在者をして、悉くイエスキリストの名に由て膝を屈しめ、且もろ〳〵の舌をして悉くイエス、キリストは主なりと稱揚して父なる神に榮を歸せしめん爲なり

右腓立比書中神の體(かたち)、僕の貌など云へるかたちの意味は即性質なり、キリストは元と神たるの性質を有給ひしと雖も、己を虛うし、人の如く成り、暫く其間に居給ひき、而して右の九至十一節に記せるが如く昇天して原初の座位に歸り給ひしなり(約六〇六十二を參照せよ)

第六目　キリストは自己の神たることを知り、又自から神なりと敎へ給ひたり

(一)キリストは神の德性を自ら負給へり

例へば(イ)其全能なること

(太十一〇二十八)凡て勞れたる者、又重を負へる者は我に來れ我爾を息ません

(全二十八〇十八)爾曹ゆきて萬國の民に「バプテスマ」を施し、之を父と子と聖靈の名に入て弟子とし

(約十二〇三十二)我もし地より擧られなば萬民を引て我に就らせん

(全五〇十七至二十三)イエス彼等に答へけるは、我父は今に至るまで働き給ふ、我も亦働くなり、此に因

てユダヤ人いよ〳〵イエスを殺さんと謀る、蓋安息日を犯すのみならず、神を己が父といひ、己を神と齊しくすればなり、是故にイエス彼等に答へて曰けるは誠に實に爾曹に告ん子は父の行ふ事を見て行ふの外は、何事をも行ふこと能はず、蓋すべて父の行ふ事を子も亦行へばなり、父は子を愛し凡て己の行ふ所の事を彼に示す、爾曹をして奇ましめん爲にかの事等より更に大なる事を彼に示さん、そは父の死し者を甦らせて生しむるが如く、子も己の意に從ひて人を生しむべし、それ父は誰をも鞫かず審判は凡て子に委たり、是すべての人をして父を敬ふ如く子をも敬はしめんが爲なり、子を敬はざる者は之を遣しゝ父を敬はず

又(約十六〇十五)凡て父の有給ふものは我屬なり、云々

(ロ)永遠に存在し給ふことは

(約六〇六十二)もし人の子の故の處に昇るを見は如何

(仝八〇五十八)イエス彼等に曰けるは誠に實に爾曹に告ん我はアブラハムの有らざりし先より在者なり

(仝十六〇二十八)我父より出で世に臨れり、復世を離れて父に往かん

(仝十七〇五)父よ今我をして爾と偕に榮を得させ給へ、即創世より先に爾と偕に有し所の榮を得させ給へ

(仝上〇二十四)父よ爾の我に賜し者の、我をる所に我と偕に在て、我榮即爾が我に賜し者を見んことを願ふ、蓋世の基を置ざりし先に爾我を愛したればなり

(ハ)何處にも遍く在し給ふことは

(約三〇十三)天より降り、天にをる、人の子の外に天に昇りしものなし

(太十八〇二十)蓋我名のために二三人の集れる處には我も其中に在ればなり

(仝二十八〇二十)我凡て爾曹に命せし言を守れと彼等に教へよ夫我は世の末まで常に爾曹と偕に在るなり、アーメン

(二)キリストは又神の榮光と職分を負給へり

即(約五〇二十三)に於ては、彼は父なる神と同樣の榮光を受くべき者なりと云ひ、又聖靈を降すべきことを約し(約十六〇七)、人の罪をも赦るし給ひたり(太九〇一至七)(可二〇一至十二)、特に慈くべきは

(太十二〇六)我爾曹に告ん、殿より大なるもの爰に在り

(同章八)それ人の子は安息日の主たる者なり

(仝二十四〇三十五)天地は廢ん、然れど我言は廢じ

(約十四〇六)イエス彼に曰けるは我は途なり、眞なり、生命なり、人もし我に由らざれば父の所に往くこと能はず

若し假りにキリストを神に非る者とせん乎、右等の如き語は人間の吐き得べき言にあらざるなり。又彼は神と一體なり、或は神なりと言ひ、且人より神の子と稱へらるゝことを許し給ひたり(太十四〇三十三、可三〇十一、五〇六、七、路四〇四十一、約一〇四十九、約三〇十六至十八、太十六〇十五至十八)また(約十〇十五、及二十二至三十九)を繙き來れ、或は永生を與へんと云ひ、或は「我手より其牧羊を奪ふ者なし、何となれば我に彼等を賜ひし我父は萬有よりも大にして、其手より之を奪ひ得る者なく、我と父は一なるに由るなり」と云へり、此時その語を聞居たりしユダヤ人は以て惡口と爲し之がために彼を殺さんとはなしたるなり、其意に思らく「爾はたゞ褻瀆ことを云ひ、亦爾は人なるに己を神と爲すに因る」と、然れともキリストは、之がため少しも驚かず、徐に曰く「父は我に在り、我父にあり」と、

是れ後日ユダヤ人がキリストを公廳に訴へて「彼自己を神の子となせば」死罪に該當べき者と言ひし所以なり（約十九〇七）、

こゝに參照すべきは（約九〇三十五至三十七、十一〇四、十二〇四十四、四十五、十四〇六至十一、十七〇十一及二十一至二十三、二十〇二十八、）抑も新約書中に於てキリストが神の子と稱へられしことは五十回に及び、自ら神は我父なりと稱へしこと四十回に及べり、而して彼れが神を呼ぶや、我儕の父と云はずして、直に我父と云給ひしなり

（三）キリストは自ら我は神の子なりと宣言したるがために死罪に處せらるゝに至りしなり（太二十六〇六十三至六十六、可十四〇六十一、路二十二〇六十七至七十二、約十九〇七和廿四〇十六）

由是考ふるにキリストは極めて高慢なる欺瞞者に非れば則眞に神たる者ならざるべからず、二者中其一なるべし。夫れ彼は堅く自己の神たることを宣言したるが爲めに死罪に處せられ、死罪に處せらるゝも尙悔ひざりしなり、是れ即ち彼が決して欺瞞者にあらず、僞言者にあらざりしことを表明する者なり。思ふに世界の廣く、古今年代の悠遠なる、或は誤て深く僞教に迷信し之が爲めに苦刑慘罰をも尙甘受せし例は無きにはあらざるべしと雖も、たゞ人を欺瞞せんがために故らに僞教を宣傳し、これが爲めに身命をも犧牲に供したるが如き例は歷史あつてより以來、未だ曾て有らざる所なり、一例を擧げて云はゞ米國の「モルモン」宗の如き、開祖自ら僞の默示を唱へ、僞の宗教を立て既往四十年の間其擴布を勉めたりと雖ども、頃日ワシントンの大政府は之を嚴禁し、若し命を用ゐざるものは繫獄の罰に處せんと布令せるや、彼等は急ち其多妻主義を捨てたるにあらずや

第七目　キリストの神たることは即使徒等及初代信者の確信せし所、又實に基督教の基礎なり

（可一〇一）これ神の子イエス、キリストの福音

（約一〇一、二、三）太初に道あり、道は神と偕に在り、道は即神なり、この道は太初に神と偕に在りき、萬物これに由て造らる造られたる者に一として之に由らで造られしはなし

（仝章十四至十八）それ道肉體と成て我儕の間に寄れり、我儕其榮をみるに實に父の生み給へる獨子の榮光にして恩寵と眞理にて充てり、ヨハネ之が証を作して、呼び言けるは我先に、我に後れ來らん者は我よりも優れる者なり、蓋我より先に在りし者なればなりと言ひしは此人なり、我儕みな彼に充滿たる其中より受て恩寵に恩寵を加へらる、律法はモーセに由て傳り、恩寵と眞理はイエス、キリストに由て來れり、未だ神をみし人あらず惟うみ給へる獨子、即ち父の懷に在る者のみ之を彰せり

（使二十〇二十八）故に爾曹自ら愼み、且爾曹が聖靈に立られて監督となれる其全群を愼み、主の己が血をもて買給ひし所の教會を牧ふべし

（羅一〇四）聖善の靈性によれば甦りし事によりて明かに神の子たる事顯はれたり

（仝五〇九、十）其血に賴て我儕義とせられたれば、況て彼に由て怒より救るゝ事なからん乎、若し我儕敵たりし時に其子の死によりて神に和らぐことを得たらんには況して和を得たるいま、其生けるに賴て救はるゝことを得ざらん乎

（仝八〇二三）そは活かす靈の法はイエス、キリストに由て罪と死の法より我を釋せばなり、それ律法は肉に由て荏弱、其能はざる所を神は爲給へり、即己の子を罪の肉の狀となして罪のために遣し、其肉に於て罪を罰しぬ

(全章三十二)己の子を惜まずして我儕衆のために之を付せる者は、豈かれに併て萬物をも我儕に賜はざらん乎

(全章三十四)罪を定むる者は誰ぞや、死て復甦り神の右に在りて我儕のために臨告し給ふキリストなる乎

(全九〇五)列祖は是彼等が先祖なり、肉体に因て言へばキリストも亦彼等より出、かれは萬物の上に在て世々讃美を得べき神なり、アーメン

(加一〇一)人よりに非ず、又人に由ず、イエス、キリストと彼を死より甦らしゝ父なる神に由て立られたる使徒パウロ及び我儕と偕に在るすべての兄弟

(全四〇四)然れども期既に至るに及びて神其子を遣し給へり、彼は女より生れ且律法の下に服したり

(弗一〇二十三)教會は彼の身体なり、萬物を以て、萬物に滿しむるものゝ滿る所なり

(弗四〇九、十)已に上に昇れりと謂へば先づ地の下に降りしに非ずや、降りし者は即諸の天の上に昇りし者なり、彼萬物に滿んとす

(腓三〇二十一)彼は萬物を己に服はせうる能に由て、我儕が卑き體を化へて其榮光の體に象らしむべし

(西二〇二、三)我心を勞するは彼等が心、愛に因て一になり、疑を懷かざる全き顯悟の富を得、且父なる神とキリストの奥義を知て、安慰を得んことを欲する也、智慧と智識の蓄積は一切キリストに藏れあるなり

(全章九)それ神の充足る德は悉く形體をなしてキリストに住めり

(撒前三〇十一)願くは神即ち我儕の父、親ら我儕の主イエスキリストと偕に我儕を導きて爾曹に至らしめ給はんことを

(全後二〇十六、十七)願くは我儕の主イエス、キリスト及び我儕の父の神、即ち我儕を愛し且恩に因て永遠の安慰と善望を予る者、爾曹の心を慰め凡の善行と善言に爾曹を堅固せんことを

(多二〇十三、十四)望所の福と、大なる神即ち我儕の救主イエス、キリストの榮の顯れん事を望待しむ、キリスト我儕のために己の身を捨給へり、是我儕を諸の罪より贖ひ出し、且己の爲に一民(ひとつのたみ)を潔め之をして熱心に善事を行はしめんためなり

(約壹、四〇九)神は其生給へる獨子を世に遣はし、我儕をして彼に由て生を得しむ、是に於て神の愛我儕に顯れたり

(全五〇五)誰かよく世に勝ん、イエスを神の子と信ずる者にあらずや

(全章二十)また神の子既に來り、我儕が眞理者を識るの智慧を我儕に賜るを知る、我儕眞理者に在り、即ち其子イエスキリストに在り、彼は乃ち眞神又永生なり

(約二〇三)爾曹は實と愛とに居て神即父、及父の子イエス、キリストより恩惠と慈悲と平康とを受くべし

(默二十二〇一)天使生命の水の河を我に示せり、其水澄徹りて水晶の如し、神と羔の寶座より出づ

(全章三)重て呪詛あることなし、神と羔の寶座そこに在り其僕これに事ん

夫れ基督は神の榮の光輝、其質の眞像にして父なる神を影はす者也(來一〇三、約一〇十四及十八、四前四〇四至八、四一〇十五)故に使徒等は彼より力能を受けて始めて能く凡ての事を爲し得たりし也(腓四〇十三)實に彼等はキリストに屬ける者(使二十一〇十三)キリストの交際に入れられしもの(哥前一〇九、約壹一〇三)キリストに信賴する者(弗一〇十二三)キリストの中に居る者(腓三〇九)にして、嘗て彼等に益と成りし事今はキリストに由て損と成るに至り(腓三〇七、八)現在彼等の生命と成て活動する者(加二〇二十四

三〇四）彼等の榮たる者（哥前一〇三十一、同後十〇十四、弗二〇十四）は唯キリストなりしなり。實にキリストは彼等の中に在して彼等を愛し、彼等亦キリストを信じ、キリストに從ひ、キリストの爲に生くる者なりし矣、紀元凡百十年の頃小亞細亞駐在、ロマノ方伯ピリニーはキリスト教信者の事に關し書を皇帝に上れり、其中に言へるあり曰くキリスト教信者は毎朝未明に相集りキリストを神として之を拜し讃美の歌をこれに献ぐと、又第四世紀の歴史家ユーセビアスは曰く基督教會に用うる所の讃美歌なる者は、古代の信者より傳來し、キリストを讃美する者なり即キリストに神たるの性質を歸して之を讃美する者なりと

第八目　神の靈、或はキリストの靈なる語は聖書に於て互に相交換して用ゐらる（約十四〇十五至二十三）

右約翰傳十四章十六、十七兩節にキリストは聖靈を弟子等に賜ふて窮なく彼等と偕に在らしむべしと曰ひ、十八節には、己自ら彼等に就るべきことを曰ひ、二十節には「其日に爾曹我、我父に在り、爾曹我に在り、我爾曹に在ることを知るべし」二十一節に「自己を彼等に示すべし」二十三節には「我父は之を愛せん、我儕來りて彼と共に住むべし」と宣給ひたり。以上の如くなれば、或は聖靈を賜ふこと、或はキリスト自ら示はし給ふこと抔は、皆たゞ聖靈が信者の心裡に寓り給ふことを指して言へる者也

（羅八〇九至十四）若し神の靈爾曹に住ば爾曹は肉に在らで靈に在ん、凡そキリストの靈なき者はキリストに屬ざる者なり、若しキリスト爾曹に在らば體は罪に緣て死、靈魂は義に緣て生ん、若しイエスを死より甦らしゝ者の靈爾曹に住まばキリストを死より甦らしゝ者は、其なんぢに住む所の靈を以て爾曹が死ぬべき身體をも生すべし、是故に兄弟よ我儕肉のために負ふ所有て肉に從ひ役るものにあらず、若し肉に從ひ役へなば死ぬべし、若し聖靈に由て身體の行爲を滅さば生くべし、凡そ靈に導かるゝ者は是神の子なり

（哥前六〇十七）主に合ものは一靈となるなり

（仝後十三〇五）なんぢ等信仰に居るや否や自ら省み自ら試むべし、爾曹もし棄らるゝ者ならずばイエス、キリスト爾曹の中にあり之を自ら知らざらん乎

（弗二〇二十二）爾曹も偕に彼の中に建られたり、是靈に由て神の居給ふ處となるべき爲なり

（仝三〇十四至十七）此に緣て我儕の主イエス、キリストの父即天と地に在る諸族の彼に由て名を得しものゝ、父に跪きて、願ふは其榮の富に循ひ其靈を以て爾曹の衷の人を剛健にし、又キリストをして信仰に由て爾曹の心に居らしめ

（加四〇六）爾曹既に子たることを得しが故に、神其子の靈を爾曹の心に遣り「アバ」父と呼ばしむ

舊約書を査べ來れば神の靈、或は聖靈は常に古代の記者、預言者等を指導扶助し給ひし事を見るなり（民二十四〇一至九、母上十〇十、母上十九〇二十三、代下十五〇一、結八〇三、結十一〇二十四、）又

（賽六十一〇一）主エホバの靈我に臨めり、こはエホバ我に齊を沃ぎて、貧きものに福音を宣傳ふることを委ね、我を遣して心の傷める者をいやし、俘囚に赦免を告げ、縛められたるものに解放を告げ

（提後三〇十六）聖書は皆神の默示にして、教誨と督責、又人をして道に歸せしめ、又義を學ばしむるに益あり

（彼後一〇二十一）そは預言は素より人意に由て出しに非ず神に屬する聖人聖靈に感じて語りし者なればなり

然れども（彼前一〇十及十一）に於てはキリストの靈は實に舊約時代の預言者の中に在りて彼等を誘掖扶導し

給ひしことを示せり即ち

爾曹が受る所の恩を預言せし預言者は此救に係る事を探索かつ推究ねたり、即ち彼等その衷に居るキリストの靈キリストの受けんとする苦難と、其後得んとする榮を預じめ証したる、此は何の日、如何なる時を示せると推究ねたり

第九目　キリストの甦生及昇天は彼が神たることの強き証據なり

夫れキリスト自ら神たることを宣言し、又斯く宣言したるが爲めに死罪に處せられたり、此時に當てや疑惑と恐懼は弟子等の心を暗ませし、嘲笑と罵詈は敵人の口に充つ。弟子等は全く失望して離散分走し、敵人は傲然凱歌を唱へたり、事情實に斯の如くなりき。然るに數日ならずして形勢全く相反するに至りし所以の者は何ぞや、蓋しキリストの甦生復活に因る矣。此事實はキリストが眞に神たるの確證なりとして使徒を始め初代信者の信仰の基礎たりし者、又信仰薄く疑心深きトマスさへ、叫んで我主よ我神よと呼びし所以の者たりし也(約二十〇二十八)

神はもと全能なるを以て、聖旨に合ふ時は通常の人間と雖、尚能く甦らしめ、又能く昇天せしめ給ふなり。然れども彼は又正義の神たることを記憶せざるべからず、正義の神が僞言者、欺瞞者を特に惡で之を死より甦らし、之を天に昇し給ふとは決して思議すべからざる所なり。況や其人の甦生及び昇天が謬妄なる作説の基礎と成り之が爲め幾多の蒼生を誤るの機と成る場合に於ては萬々其事あるべからざるをや。是故に神が、かの時、かゝる場合に甦らし、又昇天せしめ給ひし所の者は必ず義者聖者ならざるべからず、我はパウロと宿に言はん、キリストは其甦りしことに由りて明かに神の子たることを顯はせりと

第十目　キリストの高尚なる教訓と、世界の中に顯はれたる其結果とを見ればキリストの神たること益々明也

試に教祖たるイエス、キリスト其人の身分を考へ見よ、唯是れ寒村無學の木匠の子、貧窶の中に生れ、嘗て講學修文の暇なく齡の三十歳に至る迄唯鉋鑿錐鋸の間に拮据し來りし者、固より名聲名聞なし、況や牽引推擧する者をや。又其弟子を問へば唯ガリラヤ湖邊の漁夫。其時日を問へば僅に三年、三年の歳月長しと云ふべからず、其間に於てすら尚東西に奔走して其席の煖まるに遑なかりき。而して終には捕はれて最も恥づべき死を致したり。あゝ教祖既に斯の如く弟子斯の如く歳月も亦斯の如くにして、而かもこゝに絶大の結果を收め、異常の痕跡を歴史に止めたり。若しキリストは神にあらず、其教訓は神の言にあらずとせば右の事蹟は不可解の一大疑團と成り果つるなり。若夫れ基督教が世界中凡の宗教に勝りて、はるかに高尚且有力なることは不信者と雖も認識する所なり。既に世界の一端より他端に至るまでを征服感化し、餘勢尚衰へざるのみか、威風厚德年と偕に揚らんとする所以の者は豈根ざす所深く、基する所堅きが爲めにあらずや、即神なるキリストに由て傳へられたる福音なるが爲めにあらずや

第十一目　基督、或は基督教の事蹟を考察せんと欲する者は須らくキリストの神性を見認むべし、是を見認めて後始めて其事蹟の解明を爲すことを得ん。夫れ其降誕、其三十三年の生活、其死、其甦生、其昇天等凡ての事蹟は、基督を以て神となさゝる以上は決して解すべからざる所也。即其降誕に際しては貴き天使ガブリエル先顯はれてマリヤに其事を示したり、蓋其懷姙は神の奇蹟にして實に空前絶後なり、其時天使マリヤに謂て曰く「聖靈爾に臨る、至上者の大能爾を庇はん、是故に爾が生む所の聖なる者は神の子と稱へらるべし」と。其出生に當てや萬軍顯はれて之を讃美し、異星顯はれて東國より博士等を誘致せり。其出顯宣教の

時には洗禮のヨハネ先來て証を爲し神が舊約時代に於て約し給ひたる、神なる救主は直に至らんと云へり。且彼が實に神たりしことは顯著にして決して疑ふべからざるものあり、彼嘗てサマリヤを旅して或井側に息ひ一婦に水を乞ひしと雖も、自からは却て永遠渴ざる生ける水を與ふる者（約四〇六至十四）又惡魔の試惑に遇ひしといへども、既に神の聖旨に適ふ神の愛子たりしなり（太三〇十七）。又ゲッセマネの園に於て脆くもユダヤ人の手に捕はれしと雖も十二軍餘を天父より受くること能はざるに非ざりき（太二十六〇五十三）。又其容貌は人の如くなりしと雖も、或時變て日の如く輝き、其衣は白く光りしなり（太十七〇二）。且屢々天より聲有て彼の神たることを顯はし（太三〇十七、十七〇五、可一〇十一、九、路九〇三十五、彼後一〇十七、）に皆其神性を表証せり（太十三〇三十一至三十三、十六〇二十一、十七〇十二及二十二、二十四〇、二十六〇十三及二十一至三十四、約十九〇十八、十九）而して約翰傳十七章に記せる祈禱の如きは人間の決して吐き得ざる語を以て充てり

又其死に當てや、天地も之が爲めに哀慟して、地は大に震ひ、日は其光を隱し、三時間全く暗黑となれり、加之殿幕は裂れて二分せり、經過三日、天使顯はれて墓門開けイエス甦れり。甦て後十回弟子に顯はれ、弟子の眼前に昇天したり。且其後五旬節の聖靈降臨、使徒パウロの改宗、其王國の益々隆盛に趨きしこと等、凡て此等は彼等が神たりしことを証する者也。若し彼自らの宣言の如く眞に神たる者とすれば、此等の出來事は容易に解明し得べきも、之を拒む時に於ては全く了解すべからざるものと成るなり。是の故にキリストの神たることを信ずるは合理的なり、學術的なり

疑問

（一）基督は自ら父なる神より低しと言給はざりし乎（太十九〇十七、可二〇七、同十三〇三十二、約五〇十九、約六〇三十八、同十四〇二十八）

曰くキリストは神より低しとは言給はずして唯父より低しと云給ひしなり、是能く考察すべき所也、勿論キリストが肉體を取り人間と成て我々の中に寓り給ひし間は父なる神より低し、是聖書の示す所也（腓二〇五至十一）（約十〇三十）（同十七〇五）。そはキリストは素と全智全能の神、又宇宙の創造者、扶持者なりと雖も、暫く榮光を去り、其寶座を離れ、己を虛ふして僕の貌をを取り我々の如き人間と成給ひたればなり。思ふに此事は彼の勤績中最感歎すべきの件、又奥義なるべし。若し卒爾として考ふる時は彼のゲッセマネ園の愛苦と十字架の刑殺は彼が無上の謙讓、無限の慈愛なるが如し、勿論然り、然れども イエスの謙讓慈愛の眞底は決して外に現れたる此等の點に於て見るべからずして、彼が其赫々たる榮光の寶座を離れ、肉體を取て人間と成り、見るも痛ましき僕の貌に變はり給ふ其聖旨に於て始て之を見ることを得べきなり。讀者思ふべし、夫の時、彼れに左右する所の天使等の驚愕と其感激は果して如何なりしかを

果して然らばキリストは人間と成給ひし間は完き神に非ずと云ふ乎、決して然らず、例へば爰に一金塊あらんに、其物若し他の雜鑛を混じ居らば、之を純金塊に相比して、幾分劣等の品たるべし、然れども尙其素質の金たるを失はず。此の如くキリストも自ら虛ふして榮光を去り、其全智全能の力を韜み、却て聖靈の指導に從ふ者と成給ひしと雖も、彼は尙全能全智の神たるを失はざりしなり

實に彼は全能全智あり、又その如く自ら感じ給ひしと雖も肉體にありし間は其力能に幾分の制限なき能はざりき。唯救拯の一事即彼が降生惟一の目的を達する爲めには、其力能に窮極なかりしなり。但其他の事と雖も彼が必要を感ずる場合に於ては、十分に、又自在に其力能を出し、以て之に當り得べかりしことを記憶せ

ざるべからず（太二十六〇五十三）

（二）キリストが「何故我を善と云ふや、一人の外に善き者はなし即神なり」と云給ひしを（太十九〇十七）如何に解すべき乎、曰キリストは己が善者に非すと云ふの意にて然か告げ給ひしに非ず、唯かのユダヤ人彼を神と思はず單に人間なるイエスと爲ながら、慢に善き師よと呼びしを以て、彼は之を誠めて妄に人間を呼で善と云ふ勿れ、善者は唯神のみなりと告給ひたる也。是れ猶昔時エホバの神がマノアの禮拜と祭物を受給はざりしが如し。即エホバは人間の貌を以てマノアに顯はれ給ひし時、彼は之をエホバと思はず、たゞ一の天使として之を拜し之に祭物を捧げんとしたり、故にエホバは之を禁じて曰く、汝は唯エホバのみを拜し、之にのみ汝の祭物を献ぐべきなりと（士師十三〇十五至二十二）

若夫れキリストが神たることを自覺し給ひ、又その如く宣言し給ひしことは前既に陳べたるが如し、こゝに唯一例を擧ぐれば（可二〇七）に於て、キリストは「神に非ずして誰か罪を赦す事を得んや」抔と思へる學者等の心中を先づ察して「人の子、地にて罪を赦すの權威ある事を爾曹に知らせんとて癱瘓の人に我爾に命で起きて床を取り爾の家に歸れ」と宣給ひたりき、これに依て彼は己の神たることを証したり

（三）然らば（可十三〇三十二）に於ける「末日の時は天に在る使者も子も誰も知るものなし」との句は如何に解明すべき乎

思ふに、此世の終末の何時なるやは、毫もキリスト降生の目的に關する所なく、又吾人々類の智慮の達し得べき範圍にもあらざる（太二十四〇三十六（使一〇七）を以て、吾人は須らく、強て此等の點を探究すべきの必要なきことを知るべし。且前既に陳じたるが如く、彼が其榮光を去て卑き人間に降り給ひし間、其目的に關する贖罪の事の外は其全智と全能を幾分か韜み給ひしなり、蓋し彼は無究の太初より父なる神と偕に居給ふ子なる神なるが故に父の經綸企圖に含める此世の終末時限は固より其知り給ふ所なりと雖も、人間の計算方法に於ては其幾年後に當るかに就て關し給はざりしなり

（四）こゝに又（哥前十五〇二十四至二十八）を引てキリストの神たることを拒む論者あれども「かの諸の政、及諸の權威と能力を滅して國を父の神に付さん」との語は決してキリストの神性を輕重するものにはあらざるなり。畢竟神は外部の働を以て、凡て之をキリストに託し給へるを以て、萬物の創造、維持、神を人間に彰はすこと、贖罪、審判、及迷へる者の救回來從等は皆是れ彼の掌り給ふ所なり。而して現今の宇宙は平和從順の宇宙に非ずして、天使の幾分及衆多の人間は神に背叛して、大に其惡逆を逞ふしつゝあるの有樣なるを以て、此背叛を鎭靜して之を平和に歸せざるべからず、是れ亦彼の使命中の一部なり。是を以て終末の日に至り、救はるべき者は皆救はれ、否らざる者は皆滅び、頑迷不服の徒悉く其力能を失して、赫々たるキリストの榮光獨り其寶座に輝き、叛逆の無益徒勞なること遍く靈物に識られ、敬虔と從順彼等の衷に起り、宇宙の中風波穩なるに至らば、彼は其國を父なる神の手に付し給ふこと固より其所なり。何となれば彼は使命中の其部を完成したればなり、哥林多書の語は決してキリストの神性を輕重したるものに非ず

（五）尙他の異論は（西一〇十五）なる「彼は萬の造られし物の先きに生れし者なり」及（默三〇十四）なる「神の造化の始なる者」等の語を以てキリストの神性を輕視するに在り。然れども「先きに生るゝ者」或は「冢子」等の語は、聖書中常に尊ばるゝ者、寵愛せらるゝ者等の意味を以て慣用したり、例へば（出四〇二十二）に神曰く「イスラエルは我冢子なり」と、其他（伯十八〇十三）（詩八十九〇二十七）（耶三十一〇九）

等其例多し（來十二〇二十三）には「天に錄されたる長子共の敎會」なる語あり、これ凡ての眞信者を指して爾か云へるなり、又（羅八〇二十九）に「神は預め知り給ふ所の者を其子の狀に效せんと預め之を定む、こは其子を多の兄弟の中に嫡子たらせんが爲なり」とあるの類、皆以て前に揭げたる解釋の當れるを見るに足らん。學者斯意を以て右（西一〇十五）（默三〇十四）等を解せば則可なり、尙（哥前十五〇二十至二十三）（默一〇五）（雅一〇十八）を相比ぶべし

今余は略、右の諸難問に答へ終りたりと信ずるを以て、將に次條の研究に移らんと欲するなり。此時に當り余が讀者に望む所は唯右四五の異論を考ふるのみならず、亦公平の眼を開て前に列擧したる十一個目をも熟察せられんこと也、然らん時キリストの神性に就て悟る所必ず多かるべければなり。かの四五の疑點の如きに至ては畢竟キリストが己を虛ふしたる事跡なるに過ぎざるのみ

第三條　キリストに在る人性と神性の關係

人性と神性はキリストの中に相合一せりと雖も、其合一する委曲、關係の詳細は人智を以て知悉すること能はず、されども此事に關する人智の狹小なるを特更に怪しむを要せず、吾人は最も手近き自己の、肉體靈魂相合一するの關係すら尙知悉すること能はざる程の者なればなり

蓋し兩性のキリストに在て合一せることは其生誕の時に始れり。然れども彼は何時より十分に此事を悟覺せしや詳に知るべからず、思ふに三十歲、彼が受洗の頃なるべし。去れどそれより以前と雖も尙、幾分の自覺なきにはあらざりき、即（路二〇四十九）に載するが如し。さて兩性は斯くキリストの中に合一したりと雖も、其合一は人性の變じて神性と成れるが爲にあらずして、却て神人間と成給ひしが故なり（西一〇十九）

（二〇九）（腓二〇六至九）

神の人間と成給ふや、其榮光を去り、自ら虛ふして僕の貌を取り給ひたれど、その神性は純然たる人性に變化したるには非ざりしなり。即無究の太初より神にして、父なる神と偕に在せし聖子は、其人間に寄寓し給ふの間は、縱令外部は僕の狀貌にして眼に見るべく、耳に聞くべく、手に觸るべきものと成り、又其全智全能の力も之を韜み給ひしと雖も、其內部より云へば常に天父と交り、聖靈と通じ、永劫不變なる全智全能の神たりしなり（約三〇十三）。而して彼の兩性の合一したる按排は、混合にはあらずして和合なりき。即玉石の相混じて一々區別し得るが如き合併にはあらずして、火中に在る鐵の、熱と相抱和して、二者を區別し得べからざるが如き按排なりしなり

神人兩性がキリストの中に合一する關係を解釋する種々の說あり、揭げて以て學者の參考に供せん

第二世紀の「ノスチックス」及「マニキアンス」はキリストに肉體ありし事實を拒みたり。其說に曰くキリストは肉體を有給ふが如く見へしも事實、は幻影の如き者なりしと

第四世紀の「エリアンス」はキリストの神性を拒み、同世紀の「アポライナリアンス」はキリストに人性ありしことを拒で神性のみなりしことを主張せり

又テストリウスは重に、マリヤを神の母と稱する當時の風に反對して、マリヤは唯キリスト人性の母たるに過ぎざれば、之を神の母抔と稱ふるは大謬なりと曰ひ、又アンテオケの神學說に從ふて、神人兩性は共にキリストに在れども合一することなしと曰へり

ユーテケスは專ら神性を重せり

「ペッリバシアンス」は神の三位の一体なることを拒みて、一なる神は肉体を取て顯はれ給ひたれど、之に人性はなかりしと云へり

「マノフハサイッ」は説を爲して曰く、キリストの人性は神性に變化されたるなりと

「モノシライッ」は曰く、兩性共にキリストに在りしと雖も、其意志はたゞ一なりしと

諸説斯の如く紛々たりと雖も、――限ある人智を以て深邃の玄理を究む、固より其説の十全なるを望む可らず、以上の諸説は未だ余輩を滿足せしむること能はざる也、若し夫れ余の信ずる所如何を問へば、余は答へて曰はん、(一) 兩性は和合してキリストに在り、(二) 故に二樣の「ボルソナ」彼の中に在りとの説を難ずる者なり。尙之をキリストの聖言使徒の証言に照せば乃可也(太十一〇二十七)(約三〇十三)(使二十〇二十八) キリストに於て兩性和合して一なりしとせば、有限と無限、相對と絶對、人性と神性とは如何にして合一するに至りしや、これ學者の聞かんと欲する所なるべし、即

(一) 愛と云性質より考ふるに、愛する者は常に愛せらるゝ者と相合せんことを希ふ者也。神は愛にして、特に人間を愛し給ふが故に、こゝにキリスト降誕の事あるに至りしなり。(約三〇十六) 及其他の諸章句を熟考せば、神の愛はキリストの降生して人間と成り給ひし大原因なることを知るに至る可し

(二) 神の人間を創造し給ふや自己の性質に象りて之を造り給へり (創一〇二十六)(同五〇一)(西三〇十) 故にアダムは神の子と呼ばれたり (路三〇三十八) 思ふに此性質の相似は神の慈心を喚起したる第二大原因たりしならん

(約一〇十四、使二十〇二十八、羅一〇三、四、同八〇十六、十七、及二十九、同九〇五、哥後三〇十七、十八、加四〇三至七、弗一〇三、五、十一、同四〇二十四、腓二〇六、七、同三〇二十一、提前三〇十六、來九〇十四彼前三〇十八、同後一〇四、約壹三〇一、二、默三〇二十、一同二十一〇七)

第四條　三位一體論

キリストを以て神と爲ん乎、彼と父なる神との關係果して如何、是れ自然に起る問題にして信者も之を究め、反對家も之を論せんと欲する所なり。但反對家は此事實即キリストを神とすることを以て、神の一なることゝ相容れずと爲す、是故に余は今父子の關係及三位の一體なることを論究するを以て此條の目的とせん

三位一體の教義は神學諸論中最も玄妙深奥のものにして、古より學者の研究を怠らざる所なりと雖も、吾人は未だ明快なる卓説に接するに至らず。仰で穹蒼を視、俯して山川を察するに大は日月星辰より小は昆虫草木に至る迄千差萬別其數に際限なし、然れども人智は未だ其一をも知悉すると能はずして細大到る處に秘密の門あり。この故に終生を講學に委ねたる理學者、哲學者さへも、尙一草花の發蕾する所以すら解釈ぬる有樣なり矣。況して斯の如き宏大なる宇宙萬有を創造し、又之を維持し、運轉する所の全智全能にして絶對なる、神の性質を研究するに當ては、其不分明の點多きは固より當然なりと云ふべし。反之假に人智を以て容易く神の性質を探り得ることありとせよ、吾人は却て之がために疑惑し、こは我々が詮索に汲々たる所の目的、即ち自由自在、全智全能の大原因には、よも有るまじとこそ思ふべき也。而して三位の神の一體なることに關して學者の論ずる所動もすれば首尾兩立し難きの説に陷ることあり。即神の三位は猶三人の如く、神の一は猶一人の如く、三位の一體なることは三人にして而かも一人なりと云ふが如き是なり、其陳述の無道理なること固より論を待ざるなり、普通の神學説は決して斯の如きものにはあらず、然れども之を講述する前に先づ極端の兩説を掲げ證かん――既に極端なり。其聖書の旨に違ふや明なり

(第一) 神は唯一にして、時に或はキリストと成て顯はれ、或は聖靈と成て顯はるゝ者なりと、是れ「サベリ

アニズム」の説く所なり

(第二)父と子と聖靈は全く別々なる神にして、この三神の思想意志、及び其運動等相互に調和一致して微塵も矛盾する所なしと、是れ「ツライ、シーズム」の説く所なり

聖書を精査するに右兩説共に其示す所に違へるを見る、例へば約翰傳十四章至十七章、諸章の敎ゆる所は第一説に逆ひ、又以下に掲ぐる諸章句は盡く第二説に逆ふ者なり、蓋神の一なることは聖書全體を通じて明示する所なればなり(出二十〇三、申四〇三十五及三十九、同六〇四及五、同三十二〇三十九、四十、母下七〇二十二、同二十二〇三十二王上八〇六十代上十七〇二十、詩十八〇三十一、同八十三〇十八、同八十六〇八及十、同八十九〇六、箴四十三〇十至十二、同四十四〇六、八、及二十四、同四十五〇五、六、及び二十二至二十五、同四十六〇九、耶十〇六、耳二〇二十七、可十二〇二十九及三十二、約十七〇三至五、哥前八〇四至六、加三〇二十、提前一〇十七、提前二〇五同六〇十五、十六、默十七〇十四、同十九〇十六)

思ふに三位一體の敎理の眞義は此兩極端の中間に在て存せり、即ち神は一なりと雖も其性質には三位の區分ありと言ふ也。顧て吾人人類に就て考ふれば勿論、斯の如き性質の區分あることなし、然れども人類に斯の如き區分なき故に全智全能なる神にも亦同く斯の區分あるべからずと言はゞ寧ろ妄斷に失するものと云ふべきなり。見よ一株の根能く三幹を生じ、一根の麥能く十莖を出すを、埃及に在ては一莖五穗を出すとは稀なることにあらず、以て彼是を對考して神の性に三位ありと云ふと敢て不思議の論にあらざることを知るべきなり聖書を研究し來れば父なる神は智、情、意を備へたる神なり(即一の「ポルソナ」なり)(約十六〇二十三十七〇二十一至二十四を見よ)子なる神、即キリストも、聖靈も亦同じく一の「ポルソナ」なり(聖靈の事後章に出)。而して其間の關係は前にも言し如く秘奥にして測度すべからず、滿足すべき學説もなく、適切なる譬喩も無きの有樣なり。試に最該切なりと思ふ比喩の一を擧ぐれば如左、即ち之を日光の三稜玻璃を射るに喩へたり、――日光は三位の一體なる有樣にして、白色は父、三稜玻璃を透して顯はるゝ七色は子、其熱は聖靈、今假に斯の如き關係を有したる三者ありて、各々智、情、意を備へ、能く自己の存在と他二者の存在とを知り、又相互に交感する者なりとせよ、是れ即ち三位一體の神の性質に彷彿したるものなりと

而して神は己れの性質に斯の如き區分あることを自覺し給へることは聖書の明示する所也、例へば

(約十七〇二十四)父よ爾の我に賜し者の我をる所に我と偕に在て、我榮すなはち爾が我に賜し者を見んことを願ふ、そは世の基の置ざりし先に、爾我を愛したればなり

(羅八〇二十七)人の心を察たまふ者は、聖靈の意をも知り、蓋神の心に遵ひて聖徒のために祈ればなり

(哥前二〇十)然れど神は其靈をもて之を我儕に顯はせり、靈は萬事を究知りまた神の深事をも究知るなり

右引照を査ぶるに、父なる神は世の基を置き給はざりし先に既に子なる神を愛し給ひ、又聖靈の意をも知り給へり。聖靈の神も亦神の深き聖旨を察し給へるなり。尙聖書を精査するに從て、神の性質に斯の如き區分あることを明知することを得べし

(賽四十八〇十二至十六)――特に其十六節に曰く

いま主エホバ我と其靈とをつかはし給へり

(太三〇十六、十七)イエス「バプテスマ」を受て水より上れる時天忽ち之がために開け、神の靈の鴿の如く降て其上に來るを見る、又天より聲ありて此は我心に適我愛子なりと云へり

(全二十八〇十九)爾曹ゆきて萬國の民に「バプテスマ」を施し之を父と子と聖靈の名に入て弟子とし

(路三〇二十一、二十二)民皆「バプテスマ」を受けけるにイエスも亦「バプテスマ」を受て祈れる時天開け、聖靈鴿の如き狀にて其上に降ぬ、又天より聲あり云、なんぢは我愛子、我喜ぶ所の者なり

(約一〇三十二)ヨハネまた證をなして曰けるは、我、靈の鴿の如く天より降りて其上に止まれるを見たり

(約三〇三十四、三十五)神の遣し丶者は神の言を語る、蓋神これに靈に賜ひて限量なければなり、父は子を愛して萬物を其手に授たり

(約十四〇十六、十七)われ父に求めん、父かならず別に慰ひる者を爾曹に賜て窮なく爾曹と偕に在らしむべし、此は即ち眞理の靈なり世これを接くること能はず、蓋これを見ず、且しらざるに因る、されど爾曹は之を識る、そは彼爾曹と偕に在り、かつ爾曹の衷にあればなり

(仝章二十三)イエス答て彼に曰けるは、若人われを愛せば我言を守らん、且我父は之を愛せん、我儕きたりて彼と偕に住むべし

(仝章二十六)我名に託て父の遣さんとする訓慰師、すなはち聖靈は衆理を爾曹に教へ、亦わが凡て爾曹に言しことを爾曹に憶起さしむべし

(仝十五〇二十六)われ訓慰師を父より遣らん、即父より出る眞理の靈なり、其きたる時わが爲に証をなすべし

(使五〇三、四)ペテロ曰けるはアナニヤよ何故に爾の心サタンに滿され、聖靈に對ひ僞て地所の價の幾分を藏すことをせしや、地所いまだ售ざる時は爾の有ならずや已に售りたりとも亦爾の權に屬るならずや、何故に爾の心この事を發念しや、爾人に對て僞るに非ず、神に對て僞れるなり

(羅八〇九至十一)もし神の靈なんぢらに住ば爾曹は肉に在で靈に在ん、凡そキリストの靈なき者はキリストに屬ざる者なり、若キリスト爾曹に在ば体は罪に縁て死、靈魂は義に縁て生ん、若イエスを死より甦らし丶者の靈、爾曹に住ば、キリストを死より甦らし丶者は其なんぢらに住むところの靈を以て爾曹が死べき身をも生ずべし

(仝章二十六、二十七)聖靈も亦我儕の荏弱を助く、我儕は祈るべき所をしらざれども、聖靈みづから言がたきの慨嘆を以て我儕のために祈りぬ、人の心を察たまふ者は、聖靈の意をも知り、蓋神の心に遵ひて聖徒のために祈ればなり

(哥前十二〇四至六)賜は異なれども靈は同じ、職は異なれども主は同じ、又行爲は異なれども一切の事を衆の人の中に行ふ神は同じ

(哥後十三〇十四)願くは主イエス、キリストの恩と、神の愛と聖靈の交際なんぢら衆と偕に在んことをアーメン

(弗二〇十八)それ彼に由て我儕二者一の靈に在て父に近くことを得るなり

(仝四〇至六)体は一、靈は一なり、爾曹の召れて有つ所の望の一なるが如し、主一、信仰一、「バプテスマ」一、神即ち萬人の父一なり、彼は萬人の上にあり、萬人に貫き、萬人の中にあり

(撒後二〇十三、十四)主に愛せらるゝ兄弟よ、爾曹のために我儕常に神に謝すべきなり、そは神始より爾曹を簡び、眞理を信ずること丶靈の聖を蒙ることに因て救を得しめ給へばなり、神われらの福音を以て爾曹を此福に召き給へり、爾曹をして我儕の主イエス、キリストの榮光を得しめん爲なり

(多三〇四至六)我儕の救主なる神の慈と、人を愛し給ふ愛の顯はれし時、かれ我儕が行ひし所の義き功に由ず、唯其矜恤に循ひ、重生の法と聖靈に由て新にする事とを以て、我儕を救へり、聖靈は、即神我儕を

して其恩により、義とせられ、嗣子たるを得て、窮なき生命を望み待しめんために、我儕の救主イエス、キリストに由て豊に我儕の上に注ぎたまへる所のものなり

(來九〇十四)況して永遠、靈により瑕なくして、己を神に献じキリストの血は、爾曹に活神を奉事せんがため、死の行を去しめて其心を潔ることをせざらん乎

(彼前一〇一、二)イエス、キリストの使徒ペテロ書を……父なる神、福音に順はしめイエス、キリストの血に灑れしめんとして其豫じめ知り給ふ所に循ひ、靈の聖潔をもて選び給ひし人々に贈る云々

(猶二十、二十一)愛する者よ爾曹其德を至潔き信仰の上に建て、聖靈に感じて祈り、自己を守りて神の愛の中に居り、我儕の主イエス、キリストの永生を賜ふ其矜恤を受くべし

而して此區分は唯キリストの在世の間のみならずして無究の太初より、これありと見ゆ、以下の諸引照を見よ

(創一〇二十六)神言ひ給ひけるは我儕に象りて、我儕の像の如くに我儕人を造り、之に海の魚と、天空の鳥と家畜と、全地と海に個ふ所の諸の昆蟲を治めしめんと

(賽四十八〇十六)爾曹我に近寄りて之を聞け、我はじめより之をひそかに語りしにあらず、その成りしときより我はかしこに在り、今主エホバ我と其靈とをつかはしたまへり

(約一〇一至三)太初に道あり、道は神と偕にあり、道は即ち神なり、この道は太初に神と偕にありき、萬物これに由て造らる、造られたる者に一として之に由らで造られしはなし

(全三〇十三)天より降り、天にをる、人の子の外に天に升りし者なし

(全六〇六十二)もし人の子の故の處に升るを見ば如何

(全八〇五十八)イエス彼等に曰けるは誠に實に爾曹に告ん我はアブラハムの有らざりし先より在者なり

(全十三〇三)イエス己の手に父の萬物を賜しこと、神より來り神に歸ることゝを知り

(全十六〇二十八)われ父より出て世に臨れり、復世を離て父に往ん

(全十七〇五)父よ今我をして爾と偕に榮を得させ給へ、即創世より先に爾と偕に有し所の榮を得させ給へ

(全章二十四)父よ爾の我に賜し者の、我をる所に我と偕に在て、我榮即爾が我に賜し者を見んことを願ふ、そは世の基を置ざりし先に爾われを愛したればなり

(哥前十五〇四十七)第一の人は地より出て土につき、第二の人は天より出たる主なり

(哥後八〇九)爾曹我儕の主イエス、キリストの恩を知、かれは富る者なりしが爾曹の爲に貧き者となれり、是爾曹が彼の窮乏に由て富める者とならんが爲なり

(腓二〇五、六)爾曹キリストイエスの意を以て意とすべし、彼は神の體にて居しかども自ら其神に匹く在ところの事を棄離きこと、意はず

(西一〇十五至十七)彼は人の見ることを得ざる神の狀にして萬の造れし物の先に生れし者なり、そは彼に由て萬物は造られたり、天に在るもの、地上に在もの、人の見ることを得るもの、見ることを得ざるもの、或は位ある者、或は主たる者、或は政を執もの、或は權威ある者、萬物かれに由て造られたり、且其造られたるは彼が爲なり

(來一〇二)この末日には其子に託て我儕に告たまへり、神は彼を立て萬物の嗣とし、且かれを以て諸の世界を造りたり

(仝章八至十)其子に曰へるは神よ爾の位は世々に及び爾の國の杖は正き杖なり、なんぢ義を愛し惡を惡む、是故に神即爾の神は喜樂の膏を以て爾の侶よりも愈りて爾に沃り、又曰く主よ爾元始に地の基を置く、天も爾が手の工なり

(仝十三〇八)イエス、キリストは昨日も今日も永遠變らざるなり

(默一〇八)主たる神いひ給へり、我は「アルパ」也「オメガ」なり、始なり終なり、今あり昔あり後ある全能の者なり

(仝章十七)我これを見しとき死る者の如き其足下に倒れたり、彼右の手を我に按て曰けるは懼るゝ勿れ、我は首先なり末後なり

(仝二〇八)なんぢ又スムルナの敎會の使者に書おくるべし首先、末後のもの、死てまた生たる者かくの如く言ふ

(仝二十一〇六)かれ我に曰けるは既に成り、我は「アルパ」也「オメガ」なり、始なり終なり、渴者には價なしに生命の水の源にて飲事を許さん

(仝二十二〇十三)我は「アルパ」也「オメガ」なり首先なり末後也、始なり終なり

左の區分はキリストの昇天以後にも尙無窮に存して、彼は父なる神の右に坐し給ふと記さる

(太二十六〇六十四)イエス彼に曰けるは爾が言る如し、且我爾曹に告ん此のち人の子大權の右に坐し天の雲に乘て來るを爾曹みるべし

(可十二〇三十六)夫ダビデ聖靈に感じて自ら言ふ主わが主に曰けるは我なんぢの敵を爾の足凳となす迄我右に坐せよと

(仝十四〇六十二)イエス曰けるは然り人の子大權の右に坐し天の雲の中に現れ來るを爾曹見るべし

(路二十二〇六十九)今より後、人の子は大權ある神の右に坐せん

(使七〇五十五、五十六)ステパノは聖靈に滿され天を仰で神の榮光と其右にイエスの立るを見て曰けるは、視よ我天ひらけて神の右に人の子の立るを見る

(羅八〇三十四)罪を定むる者は誰ぞや、死て復よみがへり神の右に在て我儕の爲に禱告し給ふキリストなる乎

(弗一〇十)これ自ら定め給ひし所なり、即ち期の滿るときに至りて。或は天に在り、或は地に居る萬物をキリストに歸せしめんが爲に定め給ひし所なり

(仝章二十)即キリストに行ひし所にして、彼を死より甦らせ諸の政と權威と能力と宰治、又此世のみならず、來らんとする世にも凡て稱ふる所の名の上に置き、天の處にて己の右に坐せしめし能なり

(西三〇一)既に爾曹キリストと偕に甦りたれば、天に在るものを求むべし、キリスト彼處に在て神の右に坐し給へり

(腓三〇二十)我儕の國は天に在り、我儕は救主即イエス、キリストの其處より來るを待つ

(撒後一〇七)患難を受くる爾曹には、我儕と偕に平康を得ることを以て報るは神の公義なればなり、此事は主イエス火燄の中にて其能力の諸使と偕に天より顯れん時に在り

(來一〇三)彼は神の榮の光輝、其質の眞像にて己が權能の言をもて萬物を扶持ち我儕の罪の淨をなして上

天に在す威光の右に坐しぬ

(全八〇一二)我いへる所の肝要は是の如き祭司の長の、我儕に在ることなり、彼は天に於て大なる威光ある者の位の右に坐して、聖所に役ふ、即人の建る所に非ず、主の建給へる所の真の幕屋なり

(來十〇十二)然ど此人は一次罪のために一の犧牲を献て窮なく神の右に坐し

(全十二〇二)イエス即信仰の先導となりて之を成全する者を望むべし、彼は其前に置く所の喜樂に因て、其耻をも厭はず十字架を忍びて神の寶坐の右に坐しぬ

(彼前三〇二十二)イエス、キリストは天に往て今神の右に坐せり、諸の天使、權威ある者、能ある者、みな彼に服ふなり

(默五〇一)我又寶座に坐する者、七の印にて封印せる內外に文字ある卷を右の手に持るを見たり

(全章七)この羔すゝみて寶座に坐する者の右の手より卷を取れり

而してキリストは今も尙天に於て信者の爲に父に中保(とりなし)給ふ、

(羅八〇三十四)罪を定むる者は誰ぞや、死て復よみがへり神の右に在て我儕の爲に禱告し給ふキリストとなる乎

(來七〇二十五)是故に彼は己に賴て、神に就る者のために懇求んとて恒に生れば彼等を全く救ひ得るなり

(來九〇二十四)キリストは眞の物の摸なる、手にて造れる聖所に入らず、今より永く我儕のために神の前に顯れんとて眞實の天に入りぬ

(約壹、二〇一)我小子よ、我これらの事を爾曹に書贈るは、爾曹をして罪を犯すこと莫らしめん爲なり、

若し人罪を犯せば我儕のために父の前に保惠師あり、即義なるイエス、キリスト

又父なる神は世の終末にキリストを以て審判者たらしむ、(太十〇三十二、三十三、同十三〇四十一、同十六〇二十七、同二十四〇三十、三十一、同二十五〇三十一、三十二、可十三〇二十六、二十七、同十四〇六十二、路二十一〇二十七、使一〇一至十一、同十七〇三十一)而して以上にも既に陳べし如くキリストは何時迄も變り給はずして(來十三〇八)「アルパ」也「オメガ」なり、始なり終なるなり

由之觀是三位一体の事實は聖書の明示する所にして拒むべからざるものなり、然れども之を解明するが爲めには亦種々の異說を生せり

(解圖)

(1) ユニテリアニズム

(2) ツヲイ、シーズム

(3) サベリアニズム

(4)

(5)

(6)

(第一)極端說の一はキリストの神たることを拒みて、キリストは父なる神より位僧の低き者、或は唯人間たる者なりと云ふなり、是即「ユニテリアン」の說也、若し畫圖に據て之を示せば第一圖の如し

(第二)右に反對する極端説は父と子と聖靈は各々完全神にして即ち三神なりと云ひ、其一なることを拒び、是れ「ツライ、シーズム」説なり、第二圖を見よ

(第三)は父と子と聖靈の區別を拒み父なる神は時に或はキリストと成て顯はれ、或は聖靈と成て顯はると是「サベリアン」の説なり、第三圖を見よ

然れども此等は共に聖書の敎旨に背戻せる説なれば聖書を神の言葉と信ずる限りは採用することを能はざる也、余は思ふ

(第四)眞理は第一、第二兩説の中和に存せんと、即ち唯一説と三體説の孰れにも制限を加へて之を合一するの説也。而して之に三樣の考按あり如左。然れども何れの説を採るも敢て不可なかるべし

(甲)重きを神の一なることに置て、其區分あることを重せざるもの、第四圖を見よ

(乙)神の一と其區分あることゝ兩々相對向せしめんとするもの第五圖を見よ

(丙)却て重きを區分あることに置くもの、即第六圖を見よ

(圖の第四、第五、第六等、各三角形の中央部は父と子と聖靈の共有する性質を示し、角邊に添へる三片は各々特異なる性質あることを示す者也)

夫れ聖書に在て、神其子を降し給ふと云ひ。其子は即ちキリストにして其榮の光輝、其質の眞像なりと云ひ。又聖靈を稱して父の靈、或は子の靈と云ひ。且キリストが父に求めて聖靈の降るを見れば、父と子と聖靈は各、同一體の神なりと知るべし。而して祝禱或は授洗の場合に其名を擧ぐるの順序先づ父、次に子、其次に聖靈を呼ぶは其職分に先後あるが爲なるべし、即父は第一、子は第二、聖靈は第三。されど其職分は全然相異るものにはあらず「父よ爾我に在り、我亦爾に在る、斯の如く彼等も亦我儕に在りて一に成らんためなり」(約十七〇二十一)と、キリストの宣給へるが如く亦相互に一致する所ある也。加ふるに其性質、意志、主旨等は全く一なるを以て往々同一職分の各自に歸せらるゝを見る、例へば

(イ)創造の事、(伯三十三〇四)には之を父に歸し、(約一〇三)にはキリストに歸し、(創一〇二)には之を聖靈に歸せり

(ロ)生命を與ふる事、(徒十七〇二十四、二十五)には之を父に歸し、(西三〇四)には之をキリストに歸し、(哥後三〇六)には之を聖靈に歸せり

(ハ)聖潔事、(撒前五〇二十三)には之を父に歸し、(來十三〇十二)には之をキリストに、(彼前一〇二)には之を聖靈に歸せり

是故に(一)三位は實に一體にして、(二)三者の間一種特異の區別あり(他にかゝる區別なきを云)、(三)唯其一を取て之を神と云ふべからず、又其一を除て殘餘を神と云ふべからず、(四)一を他の二に合せて始めて之を神と云ふべきのみ

而して三者職分の在る所如何を聖書に尋ぬるに、父なる神は決して被造物に顯はれ給はず

(約一〇十八)未だ神を見し人あらず、惟うみ給へる獨子即父の懷に在者のみ之を彰せり

(仝四〇二十四)神は靈なれば拜する者も亦靈と眞を以て父を拜する時來らん、今其時になれり、夫父は是の如く拜する者を要め給ふ

(仝五〇三十七)且われを遣しゝ父も我ことを證せり、爾曾いまだ其聲をきかず、未だ其形を見ず

(仝六〇四十六)然れど父を見し者はなし、惟神より來るもののみ之を見たり
(使七〇五十五)然るにステパノは聖靈に滿され天を仰で神の榮光と其右にイエスの立るを見て曰けるは
(哥後四〇四至六)此の如き人は此世の神、其心を盲したる不信者なり、是神の像なるキリストの榮の、福音の光をして彼等を照らさゝらしめんが爲なり。我儕自己の事を宣るに非ず、唯キリスト、イエスの主たること、又我儕イエスに由て爾曹の僕たることを宣るなり。光に命じて暗より照出しめたる神、我儕をしてイエス、キリストの面に在る神の榮光を知の光を顯さしめん爲に我儕の心を照らし給へり
(西一〇十五至十七)彼は人の見ることを得ざる神の狀にして萬の造られし物の先に生れし者なり。そは彼に由て萬物は造られたり、天に在るもの、地上に在るもの、人の見ることを得るもの、見ることを得ざる者、或は位ある者、或は主たる者、或は政を執るもの、或は權威あるもの、萬物かれに由て造れたり、且其造られたるは彼が爲なり。彼は萬物より先にあり、萬物かれに由て存ることを得るなり
(提前一〇十七)願くは萬世の王、即ち朽ちず、見ざる一の神に窮なく尊貴と榮光あらんことを
(仝六〇十五、十六)神其定め給へる期いたらば、彼を顯はさん神は、即福ある所の、獨一の權威ある者、諸の王の王、諸の主の主。獨一死ざるもの、近くことを得ざる光に在して、人未だ見しことなく、又見ることを能はざる者なり、願くは尊貴と窮なき權力かれに有れ　アーメン
(約壹、四〇十二)未だ神を見し者なし、我儕もし互に相愛せば神われらの裏に居て、彼を愛する愛を我儕の裏に完す
キリストは父なる神を被造物に顯はし給ふ者なり

(來一〇三)彼は神の榮の光輝、其質の眞像にて、己が權能の言をもて萬物を扶持、われらの罪の淨をなして上天に在す榮光の右に坐しぬ
(約一〇十四)それ道、肉體と成て我儕の間に寄れり、我儕其榮を見るに、實に父の生たまへる獨子の業にして、恩寵と眞理にて充てり
(仝十四〇九)イエス彼に曰けるはピリポ、我かく久く爾曹と偕に在りしに未だ我を識らざるか、我を見し者は父を見しなり、何ぞ父を我儕に示せと言ふや
神はキリストに由て凡ての物を造り、又之を維持し給ふ
(約一〇三)萬物これに由て造らる、造られたる者に一として之に由らで造られしはなし
(弗三〇九)イエス、キリストを以て萬物を造りし神の中に、世の始より以來かくれたる奧義如何を衆の人に悟らしむ
(西一〇十五至十七)彼は人の見ることを得ざる神の狀にして萬の造られし物の先に生れし者なり。そは彼に由て萬物は造られたり、天に在るもの、地上に在るもの、人の見ることを得るもの、見ることを得ざるもの、或は位ある者、或は主たるもの、或は政を執るもの、或は權威あるもの、萬物彼に由て造られたり且其造られたるは彼が爲なり。彼は萬物より先にあり、萬物かれに由て存つことを得るなり
(來一〇三)彼は神の榮の光輝、其質の眞像にて己が權能の言を以て萬物を扶持
而して神は其聖旨を人間に彰はし給ふにも、罪ある者を贖ひ給ふにも、終末の審判を爲し給ふにも皆キリストをして之に當らしめ給へり。且舊約書中に散見するエホバは即ちキリストなりし

ことを記臆せざる可らず

神は又聖靈をして人心の內部に働かしめ給ふ、即人心を勸誘して神に向はしめ、新ならしめ聖潔ならしむるなり。聖靈はまた古の預言者、記者等を指導し給ひしなり

是故に父は凡ての靈物に顯はれ給はざる所の神の本体、(吾人は父なる神の職分に就ては知る所、固と甚少しと雖も、其萬の物を愛し給ふことは頗る顯著なる事蹟にして之がためにキリストを降し給ひ、之が爲めに聖靈を送り給ふなり) 而してキリストは靈物の前に顯はれ給ふ所の神の本體、聖靈は靈物の裏に現はれ給ふ所の神の本體也

神の三位の一體なる關係に就て尙一言せば、神は一と三にあらずして、一は三に在るなり、(God is not one and three, but God is one in three) 故に神の一は一種特異の一なり (他に比例なき格別なる一と云意) ギリシャのアソス山に一の古き會堂あり其中に一珍畫を藏せり、觀者の位地に因て異形を現はすを以て著名なり、即ち其畫の左方に立て之を見れば十字架に懸りたるキリストの像なり、右方に立て之を望めば聖靈を示す鳩の形なり、若し正面に立て之を仰げば、父なる神を顯はす畫像なりと、其構思の妙なる幾分かは三位一體の玄妙なる關係を表はす所あるが如し

使徒パウロ云へり「我儕今鏡を以て見る如く、見る所昏然也、然ど彼の時には面を對せて相見ん。我今知ること全からず、然ど彼の時には我が知らるゝ如く我知らんと」、吾人は三位一體論に於て亦爾か云ふ

一千八百年の間種々の異說ありしと雖も、三位一體論は普通に是認せし所の說なりし也。第三世紀の中頃アンテオケの監督パウロはキリストの神たることを拒み唯所謂「ロゴス」がキリストの中に在りて彼を助たるのみなりと云へり。されど其說は二百六十九年アンテオケの會議にて拒斥せられたり

又四世紀の始頃アレキサンデリヤに於てエリアスはキリストの完き神たることを拒みて曰、彼は始あるものなれども他の被造物よりは本來勝れたるものなりと、されど三百二十一年アレキサンデリヤの會議は其說を拒斥し、剩へエリアスの監督職を奪ひたり

三百二十五年は三位一體論の歷史上最も記憶すべきの歲にして彼のコンスタンチン大帝は其帝國內の牧師等をニカヤに招集して一大會議を開き、以てエリアスの所說を考察せしめたり。此時監督の職に在る者にして來會するもの三百餘人に及べり、討論累日遂にキリストと父なる神との同質同位なることを、僅二人を除くの外、滿場の一致に依て決議せり

降て十六世紀の終頃伊太利のソシニヤスは、キリストは唯人間なりと敎へしが、其說を受くる者漸次ポーランドの地方に蔓り方今其徒五萬ありと。又十八世紀中「ユニテリアニズム」は英國に流行したり、現時に至ては該國敎會の概數四萬の中、唯三百許のみ此派に屬するを見る。今世紀の始頃に當て博士チャンニングは之を米國に唱導したり、之が爲め同國にも三百許の該派敎會を見るに至れり、されど之を全國の敎會數一千萬に比しては固より僅々の少數也

而して世界を通じて基督敎信徒の總數四億を以て算する中「ユニテリアン」派に屬する者は一百萬に過ぎずと云ふ

博士リバーモーア (Dr. Livermore) は (Schaff-Herzog Encyclopedia) の中に「ユニテリアン」敎の大綱を記述せり、其略に曰く「ユニテリアン」敎の起源は三位一體說を拒むに基き、始祖アダムの犯罪のため一般人間

の墮落を來たせしこと、人性自然に罪の傾向あること、キリストの贖罪及び永遠の刑罰等を拒むに至れり。

「ユニテリアン」教は人間自然の道德性を貴びて、此性今は猶不完全の有樣なれども漸次發達するものにして、億兆皆自から神の子となり、遂に救はれて盡く永生に入る者なりと云へり。罪に就ては曰く是天然的(Natural)に非ずして却て非天然的(Unnatural)なりと。故に彼等の說く所にてはキリスト降生の大目的は贖罪にあらずして、神が人間の父なること丶、人間の相互に兄弟たること丶を敎へんがためにして「爾心を盡し、精神を盡し、意を盡し主なる爾の神を愛すべし。又己の如く爾の隣を愛すべし」(太廿二〇 廿七廿九)とは其二大誡なりしと云へり

リバーモーア氏が「ユニテリアン」派の所說を述ぶること斯の如し。氏は尙キリストの性質に就て該派に三說あることを陳べ其三說は左の如くなりと記せり

(一)キリストは神にも非ず、人間にも非ざる中間の者なりと

(二)キリストはもと人間なれども特別に神の誘導と扶助を蒙り全然罪なき者と成れるなりと

(三)キリストはたゞ人間にして衆群に超絕したる一俊傑なるのみと

而して右三說の中第二說は現今の「ユニテリアン」派信徒の普通に採る所なりとリ氏は曰へり

又聖靈に付ての該派の說は靈魂が人間の靈なる如く、聖靈は神の靈にして、即人間に與ふる神の感化力なりと云へり

又該派の實行的主義は

(一)各自の理性に據て眞理を討究すべし

(二)信仰個條或は學者の諸說相容れざる場合に於ては研究者各自の理性に據て之を判斷すべし

(三)聖書を解き明さんと欲せば、其形貌に拘らずして其意のある所を汲み取るを要す

(四)「ユニテリアン」教は信仰個條を設くることをなさず、何となれば斯る窮屈なる束縛はたゞ心意の活動を妨げ、眞理の進步を防止するに過ぎざればなり

(五)若し「ユニテリアン」教の信仰箇條を知らんと欲せば須く該派諸大家の著書を査ぶべし、然からば信仰箇條とも爲すべき良言名句を此處那處に發見することを得ん

以上は皆リ氏の陳述せる所を引用したる者也。又近時東京に於て發刊する「ユニテリアン」なる一雜誌にも左の如き題言のあるを見る

「ユニテリアン」教根本の主義

第一、此教の基礎とする所は口碑的の憑據にあらずして道理的と理學的の眞理に在り

第二、此教の方法とする所は全く討究の自由なるに在り、

第三、此教の目的とする所は一個人及社會の道德を最も高尙なる域に發達せしむるに在り

「ユニテリアン」教徒普通の說

第一、宗教は必ずしも迷信にあらず、人類の上帝に對する關係及義務の自然にして而かも必要なる明言なり

第二、基督教は其純粹なる教義に於て、上帝の天父たること人類の同胞たることを敎うる宗教なり

第三、上帝は永遠無窮の力と智慧と慈悲とにして自然的發達の方法に依て宇宙を導く者なり

第四、人類は發達の最も高尙なる結果なり唯夫高尙なるが故に上帝の子と稱するを得るなり

第五、經典は人間の著作を集蒐したるものにして、誤謬ありと雖も人類宗教的性質の最良なる言明を含蓄するものなり

第六、基督は宗教的發達に於て人類を導きたる教導者中其最も卓越なる者なり

第七、世界の各宗教は皆交友にして各々長所ありと雖も盡く同一の本源と目的を有する者なり

又同雜誌第二號には「ユニテリアン教の體制」と題するナップ氏の論說を掲ぐ、中に曰へるあり

「ユニテリアン」教會は一個の信文を以て組織するものに非ず、又或事柄を信用すべき一個の誓約に依て組織するものにあらず、然らば則如何に之を組織するや、曰く吾人の自然に於て、其最も高尚なるを愛し、又吾人の助を要する所のものは、勉めて之を助けんとする簡單なる人心の鼓舞に依て組織す、要するに其之を組織する所以の基礎は上帝を信じ人類を愛するに在り

又曰く

「ユニテリアン」教會が日曜日に集會する所以の者は、日曜日の起源に就て迷想を抱くが爲めに非ず、日曜日は泰西諸國に於ける休業日なるが故に、禮拜を爲すには尤も適當なる日なるを以てなり。「ユニテリアン」教の禮拜式は尤も簡單なるものにして、「ユニテリアン」教會は各々其便宜に從て取捨するを得るなり。「ユニテリアン」教會の音樂は惟だ一の扶として用うるに過ぎず。「ユニテリアン」教會に於ては、徒に經典を讀むのみに非ず、神靈にして有益なる古今の書籍を讀む者なり。「ユニテリアン」教會の祈禱は頗ふが爲めに非ず、一層善良なる生活を爲さんための希望、其希望の自然の言顯しに過ぎざるなり。「ユニテリアン」教會の說教、若くは其演說は一般に目下實際の問題に關するものにして、吾人今日の行爲に向て補助となるべきことを論議する者なり。此等の儀式は、如何なる點迄は此日本社會の事情は適すべきや、吾人は之を知らず、惟だ時勢の變遷と日本人其人の定むる所に任せん耳。米國の「ユニテリアン」協會は、各々其便宜に從て決定すべしとせり。今後日本人民の組織する「ユニテリアン」協會も亦宜しく此の如くなるを望まざるべからず……洗禮式と「ロード、サッパー」式の如きに至ては吾人「ユニテリアン」教徒の認めて以て必要とせざる所也、否「ユニテリアン」教徒は固より此等の空式を經るの必要あらざる也……「ユニテリアン」教會は此等宗教上の禮拜と體制とに依て上帝の慈惠を求むるものにあらず、又此等の儀式を以て來世に於て發生すべき有害なる出來事の保險となすに非ず「ユニテリアン」教會は此等の儀式を以て唯吾人の思想を一層高尚なる點に進め、現世に於て吾人の義務を仕遂げしむるの奬勵を與ふる一助とするに過ぎざるなり

故に「ユニテリアン」教會は、徒に宗教的の務を爲んがために組織するものにあらず、社交的、智力的、道德的、慈善的の企圖に於ける實際的事業を爲さんがために組織するものなり

至是讀者は「ユニテリアン」教徒所說の梗概を了解せられたることならん、卽彼等の言ふ所、或は非難すべく、或は却て賞讃すべく、或は實行すべきもの等雜糅して一ならず、若し一々に之を批評せば其褒貶は種々なるべし、余は其暇を有たざるを以て、唯だ一二の點に就てのみ所感を陳べ置んと欲す。卽彼徒が人間を貴重視して、己の如く其隣を愛し、社會公共の爲めには其力の惜む可からざることを敎うるところ所謂「ニウマニタリアニズム」(Humanitarianism)を重ずるに至ては、縱令其事は彼敎徒の專有物には非ざるも、亦頗る善事なりと云ふを得べし。然れども、試に思ふべし、爾かく人間のため、社會のため、力を勞して惜まざる

が如き感嘆すべき心情を有するに到る前、其罪の神より贖はれて救拯に入り、其靈魂の神より祐助られて再生を得るに及ぶ等適當の順序を經ずして能く然るを得べき耶と

吾人若し天啓を輕視し、默示を拒斥し、或はキリストの神たることを否み、再生の必要を認めざるが如きことありとせよ、かゝる信仰（若し信仰と曰ふを得べくんば）の中に、宗教的生命なるもの存し得べきか。例を儒教に取て言はゞ儒教は之を道理的或は社會的に觀察して大なる過誤なしと雖も、以上掲ぐる所の主義を缺げるがために、今は唯だ道德的死法と成て殘存するにあらずや。余れ讀者に問はん、如何にして迷へる者が正路に立歸り、汚れたる者が潔き者と成り、非道なる者が、實地に神を愛し、又己の如く其隣を愛するに至るべき乎。余れ讀者と共に其一問題なるを認む。單に神が人間の父たること、人間が相互に兄弟たることを知るのみにして、又單に吾人の理性のみに據りて、こゝに達し得べしとは具眼者の決して信せざる所なり。吾人は「ユニテリアン」教徒の如く神の慈愛を貴重視す、されどたゞ之を貴重視するに止まらず、父なる神は其生給へる獨子、即キリストを下し賜ひしこと、又總てキリストを信ずる者に滅亡ことなくして永生あること、又新に生れざる者の神の國を見ること能はず、水と靈とによりて生れざる者の神の國に入ること能はざるを信ず。是故に、神の慈愛、キリストの贖罪、聖靈の降臨、悔改の「バプテスマ」等は總て我儕の生涯必須のものたり

第二項　基督の事業

第一條　基督の救拯に關する事業の定義

基督救拯の事業は神學中最も緊要なる部分にして此學の中心をなせり之れ實に神の默示の一大趣旨と謂つ可きなり其事業の定義たるや神の罪惡に陷りし人類を助けんと企て給ふ必ず最も利益を來す可き善法を用ひ給はざる可らず何となれば全智至愛の神如何なることを爲さんと欲し給ふも其最良なる方法を取り給ふ可きは理正に然らざるを得ず、故に罪惡に陷りし人類を救ひ給ふには則神自ら基督によりて天より下り自ら謙卑して以て人性を取り人類と共に交り、遂に人類の罪惡を贖ふ爲に苦中の苦を嘗め十字架上に死し給ひしことは最適當なる方法を用ひて人類を救ひ給ひしなり、基督の受けられし痛苦と磔刑とは其救拯に於ける最大肝要なる部分なりと雖ども基督の榮光を去り人性を取り人類と共に住み偉大なる教誡を垂れ贖罪の爲に死し三日にして蘇生し後昇天し本然の榮光に歸り今猶天上に於て其爲す可き務の爲に勞し給ふ事など總て此等は其救拯に關する事業の中に包含せられたり

第二條　基督贖罪の事實なること

之を說き明す爲左に數目の証據を擧ゞ可し

一目　聖書外より証據を取るも基督の立て給ひし如き救拯の道は世に缺く可らざるものと見ゆ

一、神の性質及人類の最大必要より論ず　余が著基督教之基本第七章に論せし如く神は全智全能にして德性を有し愛に富めるものなるを知る可し、然れば天父は罪惡に陷りし甚だ弱く且迷へる人類を救はんと欲し給ふの慈心なきか苦し然らんには甚怪む可きの至りなり、然りと雖も神が人類の罪惡を赦免する時に、神自らの性質及人類の性質に應じて、人類を救ひ之を赦し給はざる可らず、神の正義と聖潔より論せんに贖罪の道なくして唯罪惡を赦し給はゞ充分に且滿足に思ふこと難く、又罪惡に染みたる人類も贖罪の道なくば充分

に安心を得ること難かる可し

二、現世の有様より論ず　此世界を達觀するに決して完全なる賞罰を得る場所にあらず又全く無罪のもの、住所にもあらず却て流浪漂泊の人類を贖罪の道によりて救ひ出す可き企圖の存するが如く見ゆるなり

三、肉體治養の上より論ず　肉體を醫する方法少からず、則植物にも礦物にも肉體を治療するに足るものの多くあり、若し筋肉創傷を受け關骨挫折することあるも治療を施さずして自然に治するものあり、神既に如此靈魂の居所たる肉體を醫するの方法を與へたり然らば何ぞ高尚なる靈魂の迷溺を救療せずして棄て給はんや

四、人類相愛相思の情より論ず　此情は人類固有の美質にして其死を犯し生命を棄て以て他人を救ふの例實に乏しからず、人類は元神の性質に象りて造られしものなれば天父は猶憂りて人類の憂悶せるものを助けんと欲し給ふ事は決して疑ふことを要せざるなり

五、太古より人類一般に挽回の祭物を神に献せし事實より論ず　此の事たる概ね人類一般の風習なりしが如し、例へば古代の希臘人羅馬人等多くの畜類を神に献げ波斯印度支那の如き諸國皆此の風習を守りしなり、今日に至るも支那に於て一千五百箇の孔廟に毎月朔日及び十五日に豕羊鹿馬の類を供へ毎一年六萬頭以上を此の犧牲に要すと云ふ、又た古代波斯大王は毎日一千頭の獸畜を神に献ずるの禮を守りしと、歴史家ヘロドタス(Herodotus)曰くゾルクセス(Xerxes)大王の希臘に向つて戰爭を起せし時希臘人は神に向ひポルガマス(Pergamos)山の頂巔をトし一千頭の牛を犧牲としたりと

印度の「ブラマ」教信徒は古代馬及他の畜類を多く神に献げしなり。案するに古昔より諸國に於て人類を神に献げし例實に少からず則印度の如きは百年以前に至る迄人類を犧牲として神に供へ羅馬帝國にては之を普通の事とし彼アウゴストス(Augustus)大王セキストス、ポンピアス(Sextus Pompeius)大王も數回夥多の人類を神に献げたり此風は紀元二百七十年頃に至る迄行はれしが遂に基督教の感化によりて廢絶するに至れり

北歐諸國及日耳曼ゴール等の内にても昔時此風盛なりしを知る瑞典國ヲプサラ(Upsala)に於て毎九年九人の同胞と六十三頭の畜類を挽回の祭物として神に献げ丁抹人の如き同じく九年毎に九十九人の同胞と數多の畜類を神に献げしなり日耳曼人は戰陣に獲たる因虜を神に献じゴール人は疫病其他危難の事變發せし時に多くの人類を神に献じ以て其災禍を免れんとす又北米墨是哥國アステク(Astec)人は毎年數多の人類を神に献ずと言ふ今日に至るも暗黑蒙昧なる亞弗利加洲中ゴイチア(Guinea)國デホメ(Dahomy)州の王又其他の王は猶人類を神に献ずることを爲せり

此等の風習如何にして行はれしかを考ふるに吾人人類たるもの己の罪惡を感じ其贖罪の必要を重ずるが故に此殘酷なる方法を取りて願みざるに至りしなり

六、人類の内則ち數多の國々に於て罪惡より助け出す可き救主を待望せしことより論ず、希臘のソクラチースは天より人類の輔導者降る可きことを預言せり亞米利加洲の土人「ピユプロス」(Pueblos)「ナヴアジョ」(Navajos)「アステク」(Astec)等は救世主の出でんことを望みしなり

第一世紀に於て支那の帝王は亞細亞洲の西方に大なる悟道者顯はれんことを望みし故使者を西方に遣せり其使者印度に達し佛教を聞き其開祖釋迦は我帝王が求むる所の悟道者なりと信じ佛教を學び得て歸國せしと云ふ古傳あり(Hardwick's Christ and Other Masters. page 321.322)を見よ

古代の「ブラマ」教信徒はブラマの今一回世界に降臨し給ふを望み佛教も釋迦は後代に至り再顯することを

信じ波斯の拜火教信徒はソシオシ（Sosiosh）なるものが救を賜ふを待望し、墨是哥のアステク（Astec）人はキユエツトザルコート（Quetzalcoatl）と云ふ救主の降臨を信せしにより十六世紀に於て西班牙（スペイン）の大將コルテスが大軍を率ひて攻入せし時之れは吾人の待望せる救主ならんと思ひ專心戰爭に從事すること能はず遂に敗衂を取りたり、又小亞細亞のキユメーの「シイビル」（Sibyl）「女占或は預言女」は救主の顯現を預言し亦スカンヂナヴィヤの傳說にボルドル（Balder）即光、平和の神なるものは一回ローキイ（Loki）なる惡魔の首領たるものに殺されしと雖も人民は彼が再び歸り來ることを待望したりと

羅馬の歷史家シユトニアス（Seutonius）はベスパシアン（Vespasian）大王の傳記第四章に記して曰く亞細亞洲にも小亞細亞にも此時代（基督の時代を指す）に於て世界中を支配すべき至尊者猶太國より起り來る可しと言ふ希望ありしなりと歷史家タシトスも同一の事を書けり、又歷史家ジヨセフホスは猶太人の歷史二十卷四章一節同二十卷六十八章六節猶太人の戰爭二卷十三章四、五節に於て猶太人は基督時代及其後の時代に大に救主顯現を望みしことを記し此希望に應と當時數十年間數多の僞基督なるもの現はれ叛亂を企て殺戮せられしことを公言せり此事たる實に馬太傳二十四章五節にある基督の自言に符合するものなり彼聖經馬太傳二章にある東方の博士等も救主顯現の希望に應じて基督に謁し且彼を拜せん爲猶太國に來りしなり

猶太人は基督顯現の事に關し大なる誤見謬想を抱き來る可き基督は此國を羅馬帝王の管下より拔き世の所謂王國なるもの丶主權者として天下の諸國を併有し之を治め給ふ可しと思へり此思想たる詩篇二篇二、六、八節エレミヤ二十三章五、六節ザカリヤ九章九―十一節等の預言の意味を誤解せしに起因せり新約書を閲みするに基督に從ひし者は基督を要して國王たらしめんとする希望を有せしことを知る即約六章十五節と太二十一章八、九節とを參看せば明なる可し又基督の弟子等も主の死に至る迄同一の希望を抱きしは太二十章二十一節路二十四章二十一節、徒一章六節に証せられたりサマリヤ人の如きも約束せられし救主の顯はれんことを待てるは約四章二十五節に顯はれしなり

以上列記したる諸國人が救主の顯現を待望するは人類各自の必要に應ずる希望なる事は顯著なる事實なり若し人類にして己の罪惡を感じ其罪惡より救ひ出されざる可らざる必然的思想より犧牲を神に獻じ或は救主の顯現を切望するものなりとせば、神は此人生自然の必要と希望に從ひ救主を降し人類を罪惡より救ひ出さゞる可きか否神は必ず人類を罪惡の軛より免れしむ可き爲に最良至善の道を立て給ふ可し

二目　神は始祖等に贖罪の契約をなし又た預言し給ひたり廣く言ふ時は舊約全書の主意は即罪の贖ひにして基督降生の準備をなし基督の贖罪を示す所の禮式を敎へ或は之を預言する所のものなり神は亞當（アダム）及ノアに契約を爲し給ひしが人類が罪惡を愛する甚しく迷謬の思想盛なるにより此契約は殆んど絕滅せんとせり是に於て神は亞伯刺罕を呼び起し彼れに其契約を新に授け以て神に忠實に事ふ可き子孫を出すの準備となし給へり神の亞伯刺罕を呼び起す實に偶然にあらず彼をして基督の先祖たらしむ可き唯一の目的ありしが故なり羅四章と來十一章、加三章六節より十四節迄を見よ

精細に舊約全書を研究すれば神は古昔始祖に罪の贖ひを約束し給ひしを知る創三章十五節是れなり本節に記する女の裔とは基督を指し蛇はサタン即人類を誘惑し人類を罪惡に迷はしめんと謀る處の者を指すなり新約全書中本節の譬喩を引きて基督或はサタンに適用したる例多し彼約八章四十四節約壹、三章八節、默十二章九節、同二十二章二節、太十三章三十八節、路十章十七節より二十節、約十二章三十一節、同十四章三十節

同十六章十一節、哥後十一章三節、十四、十五節、弗四章八節、西二章十四、五節、來二章十四節の如きを見よ」

創四章一節より五節迄及八章二十、二十一節を見る時は古代の人は神に獸類を犧牲として献せしことを知る

創世記に於て犧牲を献ずる可きを命じ給ひしこと見へずと雖此事たる神より蒙りし命なりと信ずるは疑義を容るゝを要せざる可し若し献物を其儘神に供し置くものとせば古代の人類自然に此風を馴致したりと言ふ可きも供物を神前に燔祭と爲す理由に至りては說き明すを得ざるなりよし神は摩西の時代に至りて此の犧牲を爲す可き事を命じ給ひしと言ふとも苦し摩西の時代に於て此の如き要用あらば古代にも同一の要用ありしと論ずること決して不當にあらざるなり古代の人類即亞當の時代より雅各の時代に至る迄エホバに忠實に且熱心に事へしものは常に獸類を殺し之を犧牲として神に献せしなり又一目に論せし如く古昔一般の人々眞神より遠かり迷信謬仰に陷りしも猶犧牲を以て贖罪の表徵とし神に献ずる風習ありしなり

創十二章、十三章、十五章、十七章及十八章に神は亞伯刺罕(アブラハム)に契約を賜ひしことを記せり是れ亞伯刺罕或は其子孫に世界各國の人類が恩惠を受る所の契約なり、而して亞伯刺罕に賜ひしは三回（創十二章三節、十八章十八節、二十二章十八節を見る可し）又一回は以撒(イサク)に創二十六章四節、一回は雅各(ヤコブ)に創二十八章十四節に此契約を與へしことを讀むなり、新約書中加三章八節及十六節を讀めば此契約は基督の事なりし、羅四章十三節及約八章五十六節に記せしも同義なり

創二十二章に於て基督が吾人人類に代り死を遂げ贖罪の道を立て給ひし表徵を示されたり見よ敬虔なる亞伯刺罕(アブラハム)が愛子以撒(イサク)を神に献げし事と至慈至愛なる父なる神が己の獨子を人類罪惡の爲に賜ひしことゝを比較せば不思議にも類似の點甚多きを知る請ふ試に之を掲げん

第一以撒(イサク)も基督も共に獨子なりしなり。太三章十七節約三章十六節を見よ

第二以撒も基督も共に約束し給ひし子なり創十五章四節同十七章十五節より十九節迄、詩二篇七節、賽七章十四節及九章十六節を見よ

第三亞伯刺罕の決心より言へば以撒は即三日の間死せしものにして基督は三日間墓中に居給ひしなり

第四以撒も基督の如く縛せられたり創二十二章九節、太二十七章二節を見よ

第五以撒は己の燔祭として燒かる可き柴薪を負ひ基督は己の釘けらる可き十字架を負へり創二十二章六節、約十九章十七節を見よ

第六以撒も基督も共に死に至る迄其父の旨に從ひしなり腓二章八節を見よ

創四十九章八節より十節迄の「ユダよ汝は兄弟の讃る者なり汝の手は汝の敵の頭を抑へ汝の父の子等汝の前に鞠(かがみ)んユダは獅子の子の如し我子よ汝は所掠(えもの)物をさきて歸り登る彼は牡獅子の如く伏し牝獅子の如く蹲まる誰か之を起すことをせん杖ユダを離れず法を立つるもの其足の間を離るゝことなくしてシロの來る時に迄及ばん彼に諸の民從ふ可し」とは雅各(ヤコブ)のユダを祝せし語にして後に基督の來り給ふことを預言せるものなり、此シロとは平和の意味なり賽九章六節を見れば基督を指し「平和の君」と言へり又猶太人後代の歷史を研究する時は雅各の預言成就したる事實を見ることを得べし太闢(ダビデ)大王を始め總ての王はユダの族より生じ巴比倫(バビロン)に四虜となりし時も唯ユダの族のみ再猶太に歸り其時代より今日に至る迄彼國人はユダの名に依りて猶太人と稱へられ又巴比倫より歸り基督の時代に至る迄數百年間はユダの血統は權威を持せしものなりし然りと雖とも基督即シロなる平和の君が顯はれし時より今日に至る迄猶太人は權威なきのみならず自國に安然として

住むことを得ざるに至れり

民二十四章十七節にバラムは基督に就き預言せしことを讀むなり、太二章二節、默二十二章十六節を見よ、然れども摩西の時既に基督贖罪の表徵明確になりたり、申十八章十五節より十八節迄と約一章十九、二十一節同六章十四節と徒三章二十二節と同七章三十七節とを比ぶ可し

舊約書中其基礎とも稱す可き摩西は基督を預示する者なり今此二者を比較せんに左の數點の類似せるを見る

第一赤子の時に基督の如く死より遁れしものなり

第二基督が天の榮光を去り肉体を取りしが如く摩西は法老王の女の子と言はるゝを恥ぢ卑賤なる牧羊の職を西奈の野に爲せり

第三摩西は以色列人を埃及の奴隷の狀態より迦南に拔出し基督は彼を信ずるもの即心靈的以色列人を罪惡の奴隷たる境遇より天の迦南に救ひ出し給ひしなり

第四摩西は基督の如く同胞の爲に神に對し中保たる職をなせり（出三十二章十節より十三節及三十一、二節、同三十三章十一節より十五節、同三十四章九節、民十四章六節より二十四節）又基督が人類の爲に懇求と挽回の事とを爲し給ひしは來七章二十五節、同九章二十四節、約壹二章一、二節、羅八章三十四節を見る可し

第五摩西は基督の如く大なる奇蹟をなせしものなり

第六摩西は基督の如く神と親密に交りをなせり

第七摩西は基督の如く神の契約を顯はせり即摩西は舊約の基礎にして基督は新約の隅の首石となりしなり

出十二章にある逾越節及其羔は基督と其贖罪の事を示せしなり逾越節に瑕疵なき羔羊を取りしは基督の瑕疵なきを示せり來九章十四節を見よ、出十二章四十六節及民九章十二節を見れば此羔羊の骨を一も碎折することを許さゞりき、基督の十字架に釘けられし時其兩側に共に磔せられたるものゝ脛骨を碎折したりと雖キリストの脛骨を碎折することなかりし是れ其骨の一をも摧かざる可しとあるに應せんが爲なりとは約十九章三十一節より三十六節に記されたるが如し、其逾越節の羔羊の血を兩つの柱と鴨居に注ぎしによりて埃及人の長子を殺さんとする使者は猶太人の家を過ぎしと見ゆるなり此事と大贖罪の日の羔羊の故を以て基督を神の羔と稱したり賽五十三章七、八節、約一章二十九節、徒八章三十二節、彼前一章十九節、默五章六節、同六章一節、同七章九節、同十四章一節、同十五章三節、同十七章十四節、同十九章七節、同二十一章九節を見よ。

又基督は吾人の逾越即我等の爲に既に屠られ給へるものと稱せらる哥前五章七節を見る可し

舊約全書にある「マナ」は基督を示せりそは約六章四十八節より五十八節に明なり。舊約全書一般の禮式は基督の贖罪を示せしものなり、利十六章と來九章とを比せよ。來七。八、九、十章を以て舊約全書禮式上に照し見る時は基督は彼禮式の實物たることを知る可し、舊約書中宮殿は基督の肉體を示せしは約二章十八節より二十二節を見よ、燭臺は基督世界の光たるを表し、供麵包は基督が世の生命たるを顯はし、線香は基督の吾人の爲に懇求（トリナ）し給ふことを示せり、路一章八節より十節、弗五章二節、默五章八節、同八章三、四節を見よ。

舊約の祭司は基督を示したるは來四章十五節、同五章三節、七章二十六節、九章六節より十五節を見て知る可く、罪祭も基督を表せしは賽五十三章十節、哥幾五章二十一節、來九章二十八節、弗五章二節を見て知る可し大贖罪日二頭の野羊、一頭は基督の罪を贖ひ給ふを示し一頭は基督自ら罪を負ふて全く吾人より取除き給

ひし事を示したり利十六章と來九章二十四節と約一章二十九節、約壹三章五節を見よ
路二十四章二十六、及四十四、四十六節、約五章四十六、七節、徒二十六章二十二、三節を見れば基督は舊
約書にある禮式の實物なることを知る、基督數たひ己れは實物にして舊約の律法禮式を成就するものなりと
言へり、太五章十七、八節、路二十四章四十四節を見よ、又基督は聖晩餐を以て逾越節の實物となし給へり即
己の十字架上に裂れし肉と流せし血とを以て逾越節の羔羊の肉と血の實物なることを敎へたり
預言書を研究する時は基督の事を預言せし所數多あり賽五十三章を見よ。新約全書中本章を引き基督を示す
所の例を左に擧げん太八章十七節、可十五章二十八節、路二十二章三十七節、徒八章三十二、三節、羅四章
二十五節、哥前十五章三節、哥後五章二十一節、彼前二章二十四、五節を見る可し。又但九章二十四節より
二十七節迄を見よ。亞十二章十節、約十九章三十四節より三十七節迄とを比し。亞十三章七節と太二十六章
三十一節とを比し。賽七章十四節と太一章二十二節より二十五節、米五章二節と路二章四節より六節と太二
章一節より六節と約七章四十二節を比し。賽四十章三節と馬三章一節と四章五節と太三章一節と十一章十四
節とを比し。賽三十五章五、六節と太十一章四、五節とを比し。亞九章九節と太二十一章四節より十節とを
比し。詩四十一篇九節と五十五篇十二節より十四節と路二十二章三、四節と比し。亞十一章十二、三節と太
二十六章十四節と二十七章三節より八節とを比し。詩二十二篇十六、七節と賽五十章六節と五十三章五節よ
り八節十及二節と約十九章一、二節と太二十七章三十節と可十五章十九、二十五節と彼前二章二十二、三、
四節とを比し。詩二十二篇七、八、十二、三節と太二十七章三十九節四十一、二節と可十五章三十一、二節
と路二十三章三十五、六節とを比し。詩六十九篇二十一節と約十九章二十九節と太二十七章四十八節、可十
五章三十六節とを比し。詩二十二篇十八節と約十九章二十三、四節とを比し。詩十六篇九、十節と六十八篇
十八節と徒二章三十一節と哥前十五章四節とを比し。詩百十篇四節と來五章六節と七章二十一、二十四節、
二章十七節と三章一、二節と四章十四節と十章二十一節とを比ぶ可し

三目　基督は挽回の供物となり人類の罪惡を全く贖ひ給ひし事は聖旨の趣旨なり新舊約全書中贖ひに關し用
ひたる言葉を調ふる時は强き證據を見ることを得べし即希伯來語「パダ」(Padah)　なる字は舊約全書に於て
(出十三章十三節)又驢馬の初子は皆羔羊を以て贖ふ可し若し贖はずば其頸を折る可し、汝の子等の長子な
る人は皆贖ふ可し(同十五節)當時パロ剛愎にして我儕を去らしめざりしかばエホバ埃及の國の中の長子た
る者を人の長子より畜の初生迄悉く殺し給へり是故に始めて生れし牡を盡くエホバに犧牲に献ぐ但し我子
等の中の長子は之を贖ふなり(同二十一章八節)彼もし其約せし主人の心に適はざる時は其主人之を贖は
しむることを得べしされど之れに眞實ならずして亦之を異邦人に賣ることを爲す可らず(同三十節)若彼
贖罪金を命せられなば凡て其命せられしものを生命の償に出す可し(同三十四章二十節)但し驢馬の首出
は羔をもて贖ふ可し若し贖はずば其頸を折るべし汝の子息の中の初子は皆贖ふべし我前に空手にて出づる
ものあるべからずと

猶、利十九章二十節、二十七章二十七、二十九節、民三章四十六、八、九、五十一節、同十八章十五、六、
七節、申七章八節、九章二十六節、十三章五節、十五章十五節、二十四章十八章、母上十四章四十五節、母
下四章九節、七章二十三節、王上一章二十九節、代上十七章二十一節、尼一章十節、百五章二十節、六章
二十三節、三十三章二十八節、詩二十五篇二十二節、二十六篇十一節、三十一篇五節、三十四篇二十二節、

四十四篇二十六節、四十九篇七、八、九、十五節、六十九篇十八節、七十一篇二十三節、七十八篇四十二節、百十一篇九節、百十九篇百三十四節、百三十篇七節、賽一章二十七節、二十九章二十二節、三十五章十節、五十一章十一節、耶(エレミヤ)十五章二十一節三十一章十一節、何(ホセア)七章十三節、十三章十四節、米(ミカ)六章四節、亞(ザカリア)十章八節を見よ以上の引証によるに此字は重に代贖の意味にて用ひられしことを知るなり、舊約全書七十人譯（希臘語）に此（Padah）なる字は大概「ルートロー」(Lutroo) なる字に譯せらる此（Lutroo）は昔時希臘語の用方によれば金子を出して俘虜を拔ひ出だす意味にて用ひたるなり、歴史家ソシヂデース(Thucydides) 此字を用ひて曰く希臘の王はセロキユス（シヽリアの市邑）の俘虜を赦す爲に土地を「ルートラン」(Lutron) として受けたりと、ゼノフホンデモスセニースジョセフホスも同一の意義に此字を用ひたり此（Lutroo）は新約全書に於て動詞とし三回用ひらる即ち

（路二十四章二十一節）我儕イスラエルを贖はんものは此人なりと望みたりし云々（多二章十四節）基督我儕の爲に己の身を棄て給へり是我儕を諸ての罪より贖ひ出し且己の爲に一民を潔め云々（彼前一章十八節）蓋汝等贖はれて先祖より傳はりたる云々

名詞なる（Lutron）にして二回即ち

（太二十章二十八節）此の如く人の子の來るも人を役ふ爲にはあらず反て人に役はれ又多くの人に代て生命を與へ其贖とならん爲なり（可十章四十五節）蓋人の子の來るも人を役ふ爲に非ず反て人に役はれ且多の人に代り其生命を予へて贖とならん爲なりと

「ルートロシス」(Lutrosis) なる字にして三回即ち

路一章六十八節主なるイスラエルの神は讃美べき哉是れ其民を顧みて贖を爲し（同二章三十八節）此時此老女も側に立て主を讃美し亦エルサレムにて贖を望める凡ての人に此子の事を語れり（來九章十二節）羊犢の血を用ず己が血をもて一たび聖所に入て永遠贖をなすことを得たりと

又「アポルートロシス(Apolutrosis) なる字にて十回即ち

（路二十一章二十八節）此等の事の成り初ん時には起きて爾等の首を翹よ蓋汝等の贖近つけば也（羅三章二十四節）只キリストイエスの贖に賴りて神の恩を受け功なくして義とせらるゝなり（同八章二十三節）只此等のもの耳ならず聖靈の初て結べる實を有る我等も自ら心の中に歎て子とならんこと即我儕の身體の救はれんことを俟つ（哥前一章三十節）爾等は神に由りてキリストイエスに在りイエスは神に立てられて爾等の智慧又義又聖又贖と爲り給へり（弗一章七節）其恩の豐なるに由て彼にある我儕其血により贖即罪の救を得るなり（同十四節）神聖靈をもて印し給ふは其買受けし者を救ひ且己の榮を顯はさん爲なり（同四章三十節）神の聖靈をして愛へしむること勿れ爾等救を得る日の爲に彼の印を受けしものなり（西一章十四節）我儕其子によりて贖即罪の赦を得るなり（來九章十五節）是故に彼は新約の中保となれり是れ初めの契約の時に犯せる罪を贖ふ可き死あるによりて召れたる者の窮なき世嗣の約束を得んが爲なり（同十一章三十五節）、婦も又死たる者の復活を受けしことあり亦或人は最も愈れる復生を得べき爲に酷刑られて免るゝことを欲まざりきと

希伯來語「ゲアル」(Gaal) は百回程用ひたり例へば利(ヒル)二十五章二十五、四十八、九節、二十七章十三、十五、十九、二十一、三十一節、得(ルツ)四章四、六節、賽四十四章二十三節、四十八章二十節を見よ、此字も七十人譯

には（Lutroo）に譯せられたり若し單に救ふことのみを示すものならば希臘語の「ローオマイ」(Ruomai)なる字を用ゆ可きなり。今此（Ruomai）なる字を用ひし例を擧げんに太六章十三節、同二十七章四十三節、路一章七十四節、同十一章四節、羅七章二十四節、同十五章三十一節、哥後一章十節、西一章十三節、撒前一章十節、同後三章二節、提後三章十一節、同後四章十七、八節、彼後二章七、九節の如し

希伯來語「カファル」(Kaphar)なる字は元來蔽ふとの意味なるが舊約全書には罪を贖ふとの意味にて大概ね用ひたり、而して舊約全書に蔽ふの意味にて用ひられたるものは希伯來語「カサ」(Kasah)なる字なり例へば創三十八章十五節、利十三章十二、三節、耶五十一章四十二節を見よ（Kaphar）は唯一回のみ蔽ふの意味にて創六章十四節に用ひ、其他は悉く罪を贖ふの意義にて用ひられたるなり、例へば創三十二章二十節、出二十九章三十六節、同三十章十、十五、六節、同三十二章三十節、利一章四節、同四章二十、二十六、三十一、三十五節、五章六、十、十三、十六、十八節、六章三十節、七章七節、八章十五、三十四節、九章七節、利十二章七、八節、同十六章六、十、十一、十六、十七、十八、二十、二十四、二十七、三十、三十二、三、四節、同十七章十一節、十九章二十二節、二十三章二十八節、民五章八節、六章十一節、八章十二、十九、二十一節、十六章四十六、七節、二十八章二十二、三十節、代下二十九章二十四節、詩六十五篇三節、七十九篇九節、箴十六章十四節、但九章二十四節の如し、此字は七十人譯に「アイラスコマイ」(Hlaskomai)とあり、希臘語の用法によれば此の字は常になだむるの意味にて用ひたり、ホーマーもヘロドタスも神をなだむるの意義に用ひ、クリソストムは曰く希臘人はミノルヴァ（Minerva）と言ふ偶像神に挽回の供物即ち「アイラステリヨン」(Hlasterion)を献げしなりと、ジョセフホスは猶太人の歴史十六卷七章一節に曰くヘロデ大王は太闢王の石墳を發き金銀を取りしが其時火氣あり突然幕中より起り其役夫を焚殺したりヘロデ即ち白大理石扉を其前に立て之をなだめたりと此なだむるの字は（Hlaskomai）を用ひしなり此（Hlaskomai）なる字は新約全書中左の諸節に用ひらる即ち

（路十八章十三節）税吏は遠に立て天をも仰ぎ見ず其胸を拍て神よ罪人なる我を憐み給へと曰り（來二章十七節）是故に神に屬ける事に就て矜恤と忠義なる祭司の長となりて民の罪を贖はん爲に諸事に於て兄弟の如くなるは宜なり（約壹二章二節）彼は我儕の罪の挽回の祭物なり　第に我儕の爲のみならず徧く世の爲の挽回の祭物なり（同四章十節）我儕神を愛するに非ず神我儕を愛し我儕の罪の爲に其子を遣はして挽回の祭物とせり是即ち愛也

又希臘語「アゴラゾー」(Agoradzo)なる字は物品を買ひ求むるの意味を有せり新約書に此字を用ゆる者を證せんに、太十三章四十四、四十六節、十四章十五節、二十一章十二節、二十五章九、十節、二十七章七節、可六章三十六、七節、十五章四十六節、十六章一節、路九章十三節、十四章十八節、十七章二十八節、十九章四十五節、二十二章三十六節、約四章八節、六章五節、十三章二十九節、默三章十八節、十七節、十三章十七節、十八章十一節等是れなり、此等の引證を調ぶるに此字は市場に物を買ふ意味にて用ひたるなり、而して左の數節には基督が人類を贖ひ給ふの意味にて用ひられしを知る、今其數節の全文を記して以て之れを明さん即ち

哥前六章二十節蓋爾等は價を以て買はれたるものなればなり是故に神のものなる爾曹身に於ても靈魂に於ても神の榮を顯はす可し（同七章二十三節）爾曹は價をもて買れたる者なり人の奴隷となる勿れ（彼後二章一節）昔し民の中に僞りの預言者ありき其如く爾等の中にも僞の師出でん彼等は淪亡に至る異端を傳へ

且己れを贖ふ主を主とせずして速かなる淪亡を自ら取る可し（默五章九節）此長老たち新しき歌を唱ひ言ひけるは爾は此卷を取り其封印を解くに堪る者なり蓋汝曾て殺され其血をもて諸族諸音諸民諸國の中より我儕を贖ひて神に歸せしめ（同十四章三、四節）彼等新しき歌を寶座の前及四の生物と長老等の前に歌ふ此歌は贖はるゝことを得て地より來れる十四萬四千人の外は學び得ることなし彼等は婦女と交りて其身を玷ざる潔者なり且羔の往ところ何處にても之れに從ふ彼等は人の中より贖ひ出されたる者にて神と羔に獻げし初の果なり

希臘語「エックスアゴラゾー」(Exagoradzo) なる字を用ひし處を左に引証せん

（加三章十三節）基督既に我儕の爲に詛はるゝ者となりて我儕を贖ひ律法の詛より脫しめ給へり蓋總て木に懸る者は詛れし者なりと錄されたれば也（同四章五節）是れ律法の下にある者を贖ひ我儕をして子たることを得しめんが爲なり（弗五章十六節）機を窺ふべし是れ時惡ければ也（附說す弗の分は唯原語の同一なるを知らしめんが爲に引きしものなり）

徒二十章二十八節に一回のみ希臘語「ペリポイオ」(Peripoio) を用ひたり此等の意味は己の爲に買ひ出すを題はすものなり即ち

故に爾等自ら愼み且爾曹が聖靈に立られて監督となれる其全群を愼み主の己が血をもて買ひ給ひし所の敎會を牧ふ可しと

義とせらるゝの意味にて希伯來語「サダク」(Tsadak) なる字を用ひること十八回にして創四十四章十六節、申二十五章一節、出二十三章七節、王上八章三十二節、母後十五章四節、代下六章二十三節、伯二十七章五節、三十二章二節、三十三章三十節、詩八十二篇三節、箴十七章十五節、賽五章二十三節、同五十章八節、同五十三章十一節、耶三章十一節、結十六章五十一、二節、但十二章三節の如し七十人譯により右の引證を閲みする時は (Tsadak) は「デカイヲ」(Dikaio) なる字に譯せられたり、(Dikaio) なる字は希臘に於ても新約全書に於ても共に義とせらるゝ意味にて用ひられしなり此字は新約全書中動詞として凡四十回見ることを得次に記する所の引證即ち是れなり

（太十一章十九節）人の子來りて食ふことをし飲む事を爲れば又食を嗜み酒を好む人稅吏罪ある者の友なりと云ふ然れども智慧は智慧の子に義とせらるゝなり（同十二章三十七節）それ爾其曰ところの言に由て義とせられ又其曰ふ言によりて罪ありとせらるゝなり（路七章二十九節）ヨハネに聞ける庶民又稅吏は其バプテスマを受けて神を義とせり（同章三十五節）然れども智慧は智慧の子に義と爲らる（同十章二十九節）彼自らを罪なき者に爲んとてイエスに曰けるは我隣とは誰なる乎（同十六章十五節）イエス彼等に曰けるは爾等は人々の前に自らを義とする者なり、然れども神は汝等の心を知れり、夫人の崇ぶ所のものは神の前に惡まるゝ者なり（同十八章十四節）我爾等に告ん此人は彼人よりは義とせられて家に歸りたり、夫總て自己を高る者は卑られ自己を卑す者は高らる可し（徒十三章三十九節）爾等摩西の律法に依て義と爲らるゝこと能はざる凡の罪も信ずるものは皆彼れに由て赦され義とせらるゝなり（羅二章十三節）神の前に義とせらるゝは律法を聞く者に非ず義と爲らるゝは律法を守る者なり（同三章四節）非ず凡の人を僞とするも神を眞とすべし、爾の告る言は義とせられ爾が鞫るゝ時勝を得んと錄されたる如し（同章二十節）是故に律法の行に由て神の前に義と爲らるゝもの一人だに有ることなし、蓋律法によりて罪は知らるゝなり

（同章二十四節）只キリストイエスの贖に頼て神の恩を受け功なくして義とせらるゝなり（同章二十六節）神はイエスを信ずるものを義とするとも尚自ら義たらん爲に今其義を彰はさんとす（同章二十八節）故に我思ふに人の義とせらるゝは信仰に由て律法の行に由ず（同章三十節）それ割禮せし者をも信仰に由て義とし亦割禮なき者をも信仰に由て義とする神は一位なれば實に然り（同四章二節）若しアブラハム行に由て義とせられたらんには誇る可き所あり、然れど神の前には有ることなし（同章五節）然れど工なき者も不義なる者を義とする神を信じて其信仰を義とせられたり（同五章一節）是故に我儕信仰に由て義とせられたれば神と和ぐことを得たり、此は吾主イエス、キリストに頼てなり（同章九節）今其血に頼て我儕義とせられたれば況て彼に由て怒より救はるゝことなからんや（同六章七節）そは死し者は罪より釋さるればなり（同八章三十節）又豫め定めたる所の者は之を召き召たる者は之を義とし義としたる者は之に榮を賜へり（同章三十三節）神の選びたる者を訟へん者は誰ぞや、義とする神なる乎（哥前四章四節）我自ら省みるに過あるを覺へず然れども此に由て義とせられず我を評るものは主なり（同六章十一節）爾等の中前には此の如き者ありしかども、主イエスの名に頼り且我儕の神の靈に因て洗滌又潔まり又義と爲ることを得たり（加二章十六、七節）然れど人の義とせらるゝは律法の行に由るに非ず、惟イエス、キリストを信ずるに由なるを知る、此故に我儕も律法の行に由ず キリストを信ずるに由て義とせられんが爲にイエス キリストを信ず、蓋律法の行に由て義とせらるゝものなければなり、若し我儕キリストに由て義とせられん事を欲ひ猶罪人ならばキリストの僕なるか決して然らず（同三章八節）且聖書既に信仰に由て神の異邦人を義とし給ふことを預じめ曉り先づ福音をアブラハムに傳へて諸國の民は爾に由て福を獲んと云り（同章十一節）且義人は信仰に由て生く可しと有れば律法に由て神の前に義とせらるゝものなきことは明なり（同章二十四節）斯く律法は我儕をして信仰に由て義とせらるゝ事を得しめんが爲に、我儕をキリストに導く師傅となれり（同五章四節）汝等律法によりて義とせられるゝ者はキリストと與りなく、恩より絶たる者なり（提前三章十六節）敬の奥義の大なることは更に疑ふ所なし神肉體となりて顯はれ靈に因て義とせられ、天使に見はれ、異邦人の中に宣傳へられ、世の人に信せられ、榮光の中に擧られ給へり（多三章七節）我儕の救主イエス、キリストに由て豊に我儕の上に注ぎ給へる所のものなり（雅二章二十一節）我儕の先祖アブラハム其子イサクを壇の上に献げて義とせられたるは行に由るに非ずや（同章二十四、五節）汝等人の義とせらるゝは信仰にのみ由に非ず行に由ることを知るなる可し、又妓婦ラハブ使者を受け之を他の道より去しめて義とせられたるは行に由に非ずや（默二十二章十一節）不義者は不義なる任にし汚穢者は穢き任にし義者は義なる任にし聖者は聖き任にせよ、と

以上の引証を通讀せば其字の意味明なる可し、使徒保羅は（羅三章二十一節より二十六節迄）に罪人は唯基督イエスの贖ひにより神の恩を受け功なくして義とせらるゝことを確言せり、此字は又名詞「デカイヲシュニー」（Dikaiosune）にして五十度用ひらる、例へば羅三章二十一、二、二十五、六節、同四章二十二節、哥後五章二十一節、腓三章九節を見よ、「デカイヲシス」として二回羅四章二十五節、同五章十八節を見る可し聖書を調ぶる時は墮落せる天使の爲に贖のこと見へざるなり（彼前一章十二節、同後二章四節、猶六節を見よ）來二章十六節を見れば基督は迷ひたる天使の爲に働き給はざるを知る、鑑て數千年間人類に就きて考ふるに贖の表徴顯はるゝ見よ一匹の獸を殺し其血を灑ぎ其肉を神に献ずる果して何の爲ぞや是れ將に顯はれ

んとする形式なり、然れども故意に行ふ罪惡には舊約時代に於て贖ひの事見へず（民十五章三十節、申十七章十二、三節を見よ）之れと同く新約の時代に於ても甚頑固なるもの丶爲に救拯の道なしと見ゆ（可三章二十八、九節、約壹五章十六、七節を見よ）

四目　基督の苦惱と死し給ひし事と人間の罪惡より救はる丶事との關係につき聖書を調ぶる時は左の數點の如し

一、基督の死し給ひしは其降生し給ひし大主意なりしなり今新約書より之を証す可し則ち

（太二十章二十七、八節）亦爾等の中首たらんと欲ふ者は爾曹の僕となる可し此の如く人の子の來るも人を役ふ爲には非ず反て人に役はれ又た多くの人に代て生命を與へ其贖とならん爲なり（約十章十七、十八節）我父我を愛す蓋我再び命を得んが爲に命を捐つるが故なり、我より之を奪ふ者なし我自ら之を捐るなり我之を捐るの權能あり亦能く之を得るの權能あり吾父より我此命令を受たり（來二章九節）惟我曹天の使等より少しく遜されし者即ち死の苦を受けしに因て榮と尊貴を冠せられたるイエスを見たり其死たるは神の惠に因て衆の人に代り死を嘗へんが爲なり（同章十四、五節）夫れ諸子は偕に肉と血とを具れば彼も同じく之を具ふ是死をもて死の權威を有るもの即ち惡魔を滅し且死を畏れて生涯繫がる丶ものを放たん爲なりと

二、基督の死し給ふ可きは必然の事にして基督の自言せし所なり左の引証を讀まば明なる可し

（太十六章二十一節）此時よりイエス其弟子に己のエルサレムに往て長老祭司の長學者等より多くの苦みを受け且殺され第三日に甦る等なす可き事を示し始む（廿章十七節至十九節）イエス、エルサレムに上る時途間にて人を離れ十二弟子を伴ひて彼等に曰けるは我等エルサレムに上り人の子は祭司の長と學者等に賣されん彼等之を死罪に定め又凌辱鞭ち十字架に釘ん爲に異邦人に解す可し又第三日に甦へるべし（二十六章四十二節）二次行きて復祈り曰けるは吾父よ若し我に此の杯を飲さで離つ事能はずば聖旨に任せ給へ（同章五十三、四節）我今十二軍餘の天使を吾父に請ふて受ること能はずと爾曹思ふ乎若し然せば如此の可き事を錄し聖書に如何で應はんや（可十章四十五節）蓋人の子の來るも人を役ふ爲に非ず反て人に役はれ且多くの人に代り其命を予て贖と爲らん爲なり（路九章三十一節）イエスのエルサレムにてもはや世を逝らんとする事を語る（同十二章五十節）我受く可きの「バプテスマ」あり其成遂らる丶迄は我痛如何ばかりぞや（同十八章三十一節より三十四節）イエス十二弟子を携へて之れに曰けるは我儕エルサレムに上る人の子に就て預言者の錄されし事は皆應らる可し夫れ人の子は異邦人に解され戲弄凌辱られ唾せらる可し且彼等鞭撲て之を殺さん又第三日に甦る可し弟子此語を少も達らず亦此言へる事彼等に隱れたり亦其語る言を知らざりき（同二十四章二十五、六、七節）イエス曰けるは預言者の凡て言ひたる事を信ずる心の遲き愚なる者よキリストは此等の難を受て其榮光に入る可きに非ずや故にモーセより凡の預言者を始總ての聖書に於て己に就ての事は解明されたり（同章四十四、五、六、七節）又彼等に曰けるはモーセの例預言者の書又詩の篇に錄されたる我事につく凡の言の必ず應べきは我もと爾曹と偕に在しとき語れる所なり是に於て聖書を悟らせんとて其聰を啓き曰けるは己に斯錄されたり如此キリストは苦難を受け第三日に死より甦る可し又其名に託て悔改と赦罪はエルサレムより始まり萬國の民に宣傳られん（約三章十四、五節）モーセ野に蛇を擧し如く人の子も擧らるべし凡て之を信ずる者に亡ぶること無くして永生を受しめん

が爲なり（同十章十五節）父我を識る如く我も父を識る我羊の爲に命を捐ん（徒十七章三節）キリストの必ず苦難を受け死より甦る可き事を說き、又我汝等に傳る所の此イエスは即キリストなることを說明せり（來七章二十七、八節）又彼祭司の長等の如く先己の罪後民の罪の爲に日ごと犧牲を獻ぐべき由なし、蓋既に一次己を献げて之を成せばなり、其れ律法は弱き人を立て祭司の長となせり、然れども律法の後の誓の言は窮なく全く子を立てたり（九章十二節より十六節）羊犢の血を用ず己が血をもて一たび聖所に入て永遠贖をなすことを得たり、若し汚穢に灑て牛及羊の血又焚る牝犢の灰など肉體を潔むることを得ば況て永遠靈により瑕なくして己を神に献げしキリストの血は爾曹に活神を奉事せんが爲死の行を去しめて其心を潔むることを爲ざらんや、是故に彼は新約の中保となれり、是始の契約の時に犯せる罪を贖ふ可き死あるに由て召れたる者の窮なき世嗣の約束を得んが爲なり、凡そ遺書ある時は必ず之を錄しゝ者の死したることを顯さゞるを得ず（同章二十六節より二十八節）若し然すば彼創世より以來しばしば苦難を受く可きなり、然れども己を犧牲となして罪を除かんが爲に今世の季に一たび顯はれたり、一たび死することゝ死して審判を受る事とは人に定まれる事なり、如此キリストも多の人の罪を負んが爲に一たび犧牲とせらる彼は復罪を負ことなく己れを望むものに再び顯現て救を施す可しと

三、キリストの死し給ひしは十字架上に於ける通常人の死し狀況とは異なれり、凡そ十字架に釘けられしものは短くとも二日長きは六日間苦悶を受けて死せしと言ふ然れども基督は僅に四五日間のみ苦難を嘗めて死し給へり。可十五章四十四節を見る時はピラトはイエスの甚速に死したることを怪訝して百夫の長を召して其事の如何を問へり。彼基督の受く可き苦難を預言せし詩二十二篇、四十篇、六十九篇、賽五十三章十節より十二節と約十二章二十七節、太二十六章三十八節より四十二節及二十七章四十六節より五十節を調ぶる時は基督の大なる苦患は肉體上の苦患にあらずして血の如き汗を出し、又我神々々何ぞ我を棄て給ふやと言ひ給ひし程無量なる心靈上の苦難なりし、然らば則ち基督の死は心靈上非常の苦痛の爲に速かなりし也

四、約三章十六節に記せし如く神の慈愛は人類救拯の本源にして基督の死は此救拯の爲め缺く可らざる據り所なり、太二十章二十八節、可十章四十五節、約三章十四節より十六節、同六章五十一節、同十章十一節、同十二章三十二節、加四十四、五節、提前二章五、六節、多二章十四節、來八章六節、同九章十五節、十二章二十四節を見よ

五、基督の降生及其死と人類の罪惡とは親密なる關係あるなり、今之を示す爲に左に數箇所を引証すべし（約一章二十九節）明日ヨハネイエスの己に來るを見て曰けるは世の罪を負ふ神の羔を觀よ（羅三章二十四節より二十六節）只キリストイエスの贖に頼て神の恩を受け功なくて義とせらるゝなり、神は忍びて已往の罪を寛容に爲給ひしかど其義を彰さんとてイエスを立て挽回の祭物となせり即ち其血を信ずる者の挽回の祭物たるなり、神はイエスを信するものを義とするとも尙自ら義たらん爲に今其義を彰はさんとす（同五章八節より十節）然れどキリストは我儕の猶罪人たる時我儕の爲に死給へり、神は之によりて其愛を彰し給ふ今其血に頼て我儕義とせられたれば況て彼に由て怒より救はるゝことなからん乎、若我儕敵たりし時に其子の死によりて神に和ぐことを得たらんには況て和を得たる今其生るに頼て救はるゝことを得ざらんや（哥前十五章三節）我爾曹に傳へしは我受けし所の事にて其第一は即ち聖書に應てキリスト我儕の罪の爲に死（彼前二章二十四章）彼木の上に懸て我儕の罪を自ら己が身に任給へり、是我儕をして罪に

死て義に生しめん爲なり、彼の鞭扑れしに因て爾曹醫されたり（約壹二章二節）彼は我儕の罪の挽回の祭物なり第に我儕の爲のみならず徧く世の爲の挽回の祭物なり（同章十二節）少子よ我この書を爾曹に書送るは爾曹主の名に緣て罪を赦されたるに因る（同三章五節）我儕の罪を除かんが爲に主の顯れ給ひしことは爾曹の知る所なり彼又自ら罪なし（同四章十節）我儕神を愛するに非ず神我儕を愛し、我儕の罪の爲に其子を遣して挽回の祭物とせり是則ち愛なりと

又人類を罪惡より買ひ出し給ふの例あり、路一章六十八節、同二十四章二十一節、哥前一章三十節、同六章二十節、同七章二十三節、弗一章七節、加三章十三節、同四章五節、多二章十四節、來九章十四、五節、彼前一章十八節、彼後二章一節、默五章九節、十四章三、四節を見よ

以上擧げたる引証中（彼前二章二十四節）彼木の上に懸て我儕の罪を自ら己が身に任給へり、是我儕をして罪に死して義に生しめん爲なり、彼の鞭扑れしに因て爾曹醫されたりとは最も著しきものにして之れは賽五十三章より引きたるなり、新舊約全書中罪を負ふとは代て罰を受しことを言へり、利二十章十七、十九節、同二十四章十五節、民十四章三十三節、結十八章十九、二十節及二十三章三十五節により瞭然たり、有名なる註解者メーヤー（Meyer）ランゲ（Lange）デーウエット（De Wette）アルフォルド（Alford）の如き人々は此引証の意味は基督我儕の罪を十字架上に負ひて贖ひしなりと言へり、猶、羅六章九節及十節、八章三節、來一章三節、彼前三章十八節、西一章十四節を見よ。又之と共に羅三章二十五節、來九章十五節、同十章一節より十四節を調ぶる時は基督の死は基督降生後の信者の罪を贖ふのみにあらずして降生前の信者の罪をも全く贖ひしと見ゆるなり

六、人類は基督の寶血により罪を許され救はるゝなり、利十七章十節より十四節を見れば犧牲の血は最も肝要なるものにして血を食ふ事は律法の禁ずる所なり、是れ血は獸の生命なるが故に血を流すものは則其生命を奪ふものなればなり創九章四、六節を見よ。此血を祭壇に流注し以て罪を贖へり、來九章二十二節を見れば凡そ律法に循るに凡ての物は血を以て潔らる血を流すこと有らざれば赦さるゝ事なしと、而して新約に於て舊約儀式の實物となり之を成就したる基督の寶血は實に緊要なるものと見ゆるなり、此事に就き新約書中にある本文を示さんに則ち

（太二十六章二十八節）是れ新約の我血にして罪を赦さんとて衆の人の爲に流す所のものなり（可十四章二十四節）イエス曰けるは此は新約の我血にして衆の人の爲に流す所のものなり（路二十二章二十節）又食して後杯を取り曰けるは此杯は爾曹の爲に流す我血にして立る所の新約なり（哥前十一章二十五節）食して後又杯を取り前の如くして曰けるは、此杯は我血にして立つる所の新約なり、爾等も如此行ひて飲む每に我を憶よ、と

此等の引證を見れば舊約時代に於て彼犧牲の血は罪を赦す所の舊約の血と言ひ、而して基督の寶血は其實物たるものにして罪を赦す爲に流す所の新約の血なりと言へり、來九章七節より十四節を見れば一層確に之を知ることを得べし、今其全文を記して通閲の便に供せん、曰く

奥なる幕屋は祭司の長のみ年一次入れど血を携ずして入ることなし、是己と民の愆の爲に獻ぐるなり、聖靈之を以て前の幕屋の猶在りし時は至聖所に入可き路の顯はれざりし事を示す、此幕屋は當時の爲に設けられたる表式なり、之に從ひて獻たる禮物と犧牲は其奉事る者の良心を全ふすること能はざりき、此等は